

I 2012 年度認証評価における指摘事項（努力課題） ※参考

・教員採用・任免基準や昇格基準が明文化されていないため、適切な基準を明文化することが望まれる。⇒対応済

II 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

文学部は 6 学科からなっており、文学部としての教育理念はあるが、各学科とも専門教育や教育方針の目標を独自に掲げている。その点、6 学科を一つの学部として総評するのは難しいが、全体としては少人数教育を重視し、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育を目指している点は高く評価できる。

「2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」については、全体としては、共通して少人数教育の重視とそれを目指した丁寧な指導が窺えるものの、このようなきめ細かな指導により教員個々の負担が重いのではないかと懸念が残り、その解消策の持続的な検討が今後必要であろうと思われる。

さらに、全般的に文学部の記述には、学生教育への努力は認められるものの、現状の問題点を可視化することが少ないように思われる。さらに一歩踏み込んで、さまざまな視点から文学部、そして各学科を客観的に見直し、問題点を明確にし、問題点への対策を実施することが期待されるとともに、よりきめの細かい教育成果の検証と測定を期待したい。他学部や、文学部の中でも新しい学科の好ましい対策や方策を、今後の文学部改革に導入していつてもらいたいと期待している。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

2016 年度、文学部では 3 つのポリシーの見直しとナンバリングの導入を行い、カリキュラムマップ、カリキュラムツリーの作成を行った（進捗状況はⅢ-2.3①参照）。この作業を通じて、教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針はより精緻化され、その中で各科目の果たす役割もより明確化された。そして、こうした認識が学部全体で共有されることにより、教育目標の実現とそれに向けた各階梯の意義を意識し、教育活動を展開する機運が高まった。

その一方で、「2016 年度大学評価結果総評」における「現状の問題点を可視化することが少ないように思われる」との指摘に対しては、さらに対応すべき余地が多く残されている。誰もが希望すれば大学に進学できる、いわゆる「ユニバーサル段階」に入った現在の高等教育の現状を踏まえ、各学科の教育がその状況下で有効に機能しているか、不断に問いなおす必要があると認識している。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

文学部の各 6 学科からなる研究・教育体制では、学部の教育理念および各学科の専門教育や教育方針の作成・周知について、所定の目標を達成している点は高く評価できる。

課題とされていた、教育目標と 3 つのポリシーの見直しが終了し、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー、科目ナンバリングの策定が行われ、初年次から卒業までの 4 年間の順次性・体系性を確保したカリキュラムの構築もさらに充実し、学生への適切な指導を担保できていることについても評価できる。問題点の可視化という点では、2017 年度から成績不振学生の洗い出しを従来の年 1 回から 2 回へと増やすとともに、厳正な成績評価では GPCA を活用した検証が行われており、今後の対策と成果が期待される。

少人数教育などきめ細かな指導によって懸念される教員の過重な負担については、各学科の個別対応策は評価できるが、学部全体の共通対応策等が明確でないため、今後の改善に期待したい。

III 自己点検・評価

1 内部質保証

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】 ※箇条書きで記入。

・構成……各学科より委員 1 名が選出され、計 6 名で構成される。また、執行部（学部長・教授会主任・教授会副主任）がオブザーバーとして毎回、出席する。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・第1回：2016年4月27日。議題、①委員長の選出、②2016年度文学部質保証委員会の役割、③2016年度の自己点検・評価活動について、④2016年度文学部「自己点検」活動のスケジュール、⑤自己点検書類へのコメントの仕方について。
- ・第2回：2017年3月8日。議題、①自己点検・評価シートの年度末報告、②授業相互参観実施報告。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部質保証委員会は、文学部全学科共通のシステムとなっており、学部と各学科の連携が適切に行われている。また、質保証委員会の構成や分掌も明確にされ、年度初めに活動計画を定め、年度末にその活動成果の総括が行われている。質保証委員会は適切に活動が行われていると評価できる。

2 教育課程・学習成果

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

【文学部全体】

文学部は、各学科のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」を授与する。

1. 各専門分野の学問内容や研究方法を理解している。また、幅広い教養を備えている。
2. 自ら問題を発見し解決していく思考力や調査力を有している。
3. 自らの考えを論理的に表現できる文章力やプレゼンテーション能力を有している。また、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえることができる。

【哲学科】

哲学科は、所定の単位の修得により以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

1. 哲学的専門性を備えた知識をもつとともに、深い教養と国際的な広い視野をもっている。
2. 古今の哲学者のテキストを正しく理解でき、同時に哲学的知見を現代の諸問題に応用する力を有している。
3. 論理的な理解力や表現力をもち、説得力のある仕方でも口頭での発表や文章による表現ができる。
4. ディスカッション等において哲学的教養に裏打ちされた豊かなコミュニケーション能力を示せる。
5. 哲学的な問題発見能力と独創的な発想力・問題解決能力をもっている。

【日本文学科】

日本文学科は、所定の教育課程のもと、所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての基本的な知識を身につけている。
2. 所属する文学・言語・文芸の三コースいずれかの領域における正確な読解力を有している。
3. 自ら問題を発見し、その問題について考察を深められる思考力を有している（文学・言語コース）。
自ら主題を発見し、その主題について構想を深められる想像力を有している（文芸コース）。
4. 自らの研究や発想の成果を的確に伝えられる日本語の表現力を有している。

【英文学科】

英文学科では、文学部全体のディプロマ・ポリシーのもと、以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

1. 論理的な日本語力・英語力とそれに基づく高度なコミュニケーション能力を備えている。
2. 批判的・論理的思考力とそれに基づく課題発見力・課題解決力を有している。
3. 自らの文化や言語を、グローバルな文脈の中で相対化・客観化して捉える能力を有している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

4. 英米文学・文化研究または科学的な英語学・言語学研究の基礎的な知識をもとに、一つの課題の解決のために、様々な知識を有機的に結びつける能力を有している。

【 史学科 】

史学科は、所定のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対し、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 国際的な視野と、政治・経済・社会・文化などにわたる幅広い歴史知識を得ることによって、現代社会の問題を見る眼を養い、未来を展望することができる。
2. 史料の批判的考察から体系的理解に至る歴史学の分析方法を習得して思考力・判断力を培い、自立的に問題を発見・追究・検証することができる。
3. 発表・討論の訓練を通して、自分の意見を論理化・体系化して相手に伝え、かつ相手の意見を理解することができる。
4. 次世代の教育に歴史学の成果を生かし、また、文化遺産の継承に貢献することができる。

【 地理学科 】

地理学科は、地理学科のカリキュラムのもと所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 人間の生活の舞台である地球表層の自然環境や人文・社会環境について基礎的な知識を身に付け、地理的諸事象の基本的メカニズムを理解しているとともに、幅広い教養も身につけている。
2. 地理学的な思考力やものの見方を身に付け、それらに基づく研究方法を用いて考察することができる。
3. 地理学の知をもって社会の諸問題に関心を持ち、他者の声に耳を傾け、自分の考えを口頭表現や文章表現によつて的確に発信することができる能力、地域社会のニーズに応えられる能力、および諸問題を解決する能力を身に付けている。

【 心理学科 】

心理学科のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の学位の授与を認める。

1. 人の認知について科学的理解をすることができる。
2. 人の発達について科学的理解をすることができる。
3. 観察・実験・調査を通して、心の機能を測定し、分析することができる。
4. 国内外の先行研究や社会的要請をふまえて、自ら課題を設定することができる。
5. 研究・学習成果を的確に他者に伝えることができる。
6. 研究・学習目標を達成するために、他者と協働することができる。

①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

☒ はい ☐ いいえ

2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【教育課程の編成・実施方針】

【 文学部全体 】

文学部では、各学科のカリキュラムのもと、教育目標と学位授与方針にそつて、以下に示す教育課程を編成している。

1. プレゼンテーションやディスカッション等の能力を涵養するため、各学科の専門科目として「ゼミナール」や「演習」を設置している。
2. 文章読解・資料調査・レポート作成・ディベート等の基礎的なスキルを涵養する初年次教育として、「基礎ゼミ」等を設置している。
3. 幅広い知識や教養を涵養するため、市ヶ谷リベラルアーツセンター科目の単位を卒業所要単位に含めている。
4. グローバルな問題意識を涵養するため、全学科を対象とする「共通科目」や他学科開講科目を設置している。
5. 課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。

【 哲学科 】

哲学科は、学科の人材育成の目的を達成するために以下に示す教育課程を編成する。

1. 文章読解、ディスカッション、プレゼンテーション、レポート作成の基礎力を涵養するために、初年次に基礎ゼミを設置している。
2. 国際的な幅広い知識を獲得し、広い視野でものごとを思考できる能力の養成をはかるために、リベラルアーツ科目を卒業所要単位に含めている。
3. 専門科目については、哲学科卒業に相応しい学力を段階的に身につけられるようにするために、概論科目・哲学史料

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

目および基礎演習からはじめて、特講科目、演習（ゼミ）を経て卒業論文に至るという発展的な教育課程を編成している。

4. 視野の広い問題意識を養うために、文学部の「共通科目」、および他学科共通科目の履修を可能にしている。

5. 学生がみずから問題を発見し、解決してゆく力を養うために、卒業論文を四年間の学びの集大成として位置づけている。

【 日本文学科 】

日本文学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1年次においては、大学生の学びに必要とされる能力の習得のため、少人数制による初年次教育科目を設置するとともに、専門教育への導入として、日本の文学・言語・芸能、また中国文学について基本的な知識を修得できる科目を配置している。

2. 専門性を広く把握すると同時に深く追求するため、文学・言語・文芸の3コースを設置し、学生は2年次からそのいずれかに籍を置き、少人数制のゼミナールに所属する。より正確な読解力、深い思考力・想像力、的確な表現力、問題発見・解決能力を涵養するため、専門分野に関する科目および隣接領域に関する科目を、段階的に、また体系的に履修できるよう配置している。

3. 教養教育科目（市ヶ谷リベラルアーツセンター科目）の単位を卒業所要単位に含むこととする。センターのカリキュラムに従って履修することにより、さらに幅広い学問分野の知識を得て、柔軟かつ多角的な認識力・思考力・問題解決力等を涵養する。

4. 4年次においては、ゼミナール担当教員の指導のもと、卒業論文の執筆に取り組む。なお、卒業論文は、日本文学科の教育課程における集大成とし、大学での研鑽の成果を発揮するものとして位置づける。

【 英文学科 】

英文学科では、文学部全体のカリキュラム・ポリシーのもと、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1年次においては、「演習科目」として、基礎ゼミにおいて導入教育を行ない、同時に、概説科目を配置してさまざまな分野への導入となる「講義科目」を設置している。

2. 2年次においては、学生各自の基礎的な英語力を向上させるための Speaking や Writing などの実践的な科目とともに、学問への興味をかき立てるように、少人数教育としての2年次演習および専門科目を配置している。

3. 3年次においては、専門的な知識が深められるように、併設された専門科目と合わせて少人数制のゼミを配置している。

4. 4年次においては、学生各自が選んだ研究テーマを卒業論文としてまとめられるように、担当教員の手厚い面談指導と添削指導を行なっている。

5. 上記の1～4と並行して、4年間の学生生活を通して幅広い英語力の獲得や文化交流ができるように、海外の提携大学への短期・中期の留学制度を設定している。

【 史学科 】

史学科では、所定のカリキュラムのもと、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1年次には教養教育に加え、国際的な視野と幅広い知識を身につけるため、日本史・東洋史・西洋史の概説を設置している。

2. 新入生が大学における多様な授業に十分に適応し、その能力を発揮することが可能になるよう、初年次教育科目として「基礎ゼミ」を設置している。

3. 2年次以降、日本史・東洋史・西洋史の三専攻に分かれ、演習（ゼミ）を中心とした歴史学の専門的教育に入る。

4. 自立的に研究できる能力を向上させるため、演習とともに史料の活用や外書の読解能力を実践的に訓練する授業を設置している。

5. 自分の専攻にとどまらず幅広い学識を得るために履修できる多様な講義科目を設置している。

6. 4年生は所属ゼミ担当教員の指導のもと、一つの研究課題に取り組み、卒業論文を作成していく。課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を学科における学業の集大成として位置づけている。

【 地理学科 】

地理学科では、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 幅広い知識や教養を涵養するため、市ヶ谷キャンパスのリベラルアーツ科目の単位を卒業所要単位に含めている。また、1年次には「基礎ゼミ」で、大学での学習方法の基礎・基本を身に付けさせる。

2. 地理学科の専門科目は、1年次では入門的な科目、2年次以降は地理学の様々な分野の基礎的知識を身につけるため各論科目が配置されている。また、主に3年次以降において、地理学の方法論や研究法を身に付ける、演習や実習科目が

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

配置されている。

3. フィールドワークを通じて地域の実態を調査し、その結果をもとにレポートを作成することによって、調査技能、研究方法および文章表現能力を身に付けさせる「現地研究」が必修科目の一つとして配置されている。

4. プレゼンテーションや討論を通して、地理学の研究手法や体系を学び、問題解決能力や卒業論文作成の基礎的能力を身に付けるため、演習（ゼミ）が配置されている。

5. 課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。優秀な学生が早期に研究活動に専念できるよう、3年次で早期卒業し大学院修士課程へ進学する5年一環プログラムも用意されている。

【心理学科】

心理学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 人の心を研究するために必要な知識・技能を偏りなく修得できるように「認知」と「発達」の二領域を中心とした専門科目を配置している。

2. 心理学の全領域に関わる基本的な知識・技能を学生が修得することを促すために、選択必修の学科基礎科目という科目区分を設定している。

3. 1年次に基礎ゼミ、2年次には演習Ⅰ・Ⅱ、3年次と4年次には研究法Ⅰ・Ⅱを配置し、一貫して少人数での演習形式の科目を履修できるようにし、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を系統的かつ継続的に修得できるようにしている。

4. それまでに修得した知識・技能を活用して、人間の心について自らが検討する価値のある問題を設定した上で、科学的・客観的に分析し、その研究成果を明瞭に記述する能力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。

①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。

☒はい ☐いいえ

②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。

☒はい ☐いいえ

【根拠資料】※冊子名称やホームページURL等。

- ・<http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/index.html>
- ・<http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/index.html>

③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。

S ☒A B

(～400字程度まで) ※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。

学部における教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証は、執行部の主導のもと、教授会、教学改革委員会、各学科の学科会議において実施される。そのプロセスは以下のとおりである。

【1】教授会：検証実施の決定。→【2】教学改革委員会：検証方法の決定。→【3】学科会議：検証の実施。→【4】教授会：検証結果の承認。

なお、検証の時期については固定化されていない。

これとは別に、各学科においても、学科ごとの教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証は、自律的に行われている。検証結果の報告は、教学改革委員会、教授会において行われている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

2016年度に実施した教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の見直しのプロセスについては、下記議事録を参照。

- ・2016年度第3回・第5回・第6回・第7回文学部定例教授会議事録
- ・2016年度第3回・第5回・第6回教学改革委員会議事録
- ・2016年度学科主任会議議事録

2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S ☒A B

(～400字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

各学科とも、学部・学科の教育課程の編成・実施方針にもとづき、適切な教育課程・教育内容を提供している。すなわち、各学科とも順次性・体系性を重視したカリキュラムを構築し、その中に初年次教育科目としての「基礎ゼミ」（日本文学学科では「大学での国語力」「ゼミナール入門」。以下、「基礎ゼミ」等」と略す）、プレゼンテーション、ディスカッション能力の養成をめざした「ゼミナール」「演習」（名称は学科ごとに異なる）を設定するほか、幅広い教養の涵養を図るための ILAC 科目（2016 年度以前入学生用の名称は「市ヶ谷基礎科目・総合科目」。以下、「ILAC 科目」で統一する）、文学部共通科目等を含めることにより、学部・学科の教育目標・学位授与方針に適った教育を実現している。特に、卒業論文を必修としている点は、文学部の教育の最大の特徴である（SSI 学生は選択制）。 なお、各学科とも 2016 年度中にナンバリングを導入し、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、ナンバリングの策定作業に着手した。現在、英文学科・心理学科はカリキュラムマップ、カリキュラムツリーともに完成し、他学科においてもカリキュラムツリーが完成している。すべての学科が双方ともに完備した段階で、これらを公開する予定である。	
【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページ URL や掲載冊子名称等 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S ☒ A B
（～600 字程度まで）※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。 各学科とも順次性・体系性を確保したカリキュラムを構築している。具体的には、概論的科目を 1 年次に、より専門性の高い科目を 2 年次ないし 3 年次以降に開講し、演習・実習的に課題に取り組む科目においても、1 年次に「基礎ゼミ」等を、2 年次ないし 3 年次以降に「ゼミナール」「演習」を開講するなど、年次にふさわしい科目配当を行っている。これらの科目は、必修科目・選択必修科目・選択科目・自由科目等の系列に分類され、学科の専門領域を幅広くかつ体系的に学ぶことができるようになっている。 また、1 年次より学科の専門科目と ILAC 科目の双方が学べるよう配慮されている。ただし、そのバランスを保つため、1 年次・2 年次には専門科目の履修上限が設けられている（上限となる単位数は学科ごとに異なる）。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	☒ S A B
（～400 字程度まで）※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 卒業所要単位数 132 単位のうち、44 単位を ILAC 科目より修得することが定められている。ILAC 科目は 0 群、1 群（人文科学分野）、2 群（社会科学分野）、3 群（自然科学分野）、4 群（外国語）、5 群（保健体育分野）から構成されており、群ごとに必要単位数を設定することにより、幅広い領域の教養を身につけることができるよう配慮されている。また、ILAC 科目の中には、教養をより発展的に学ぶ科目群として「総合科目」も設けられており、ここで修得した単位は原則として専門科目のうち、自由科目として認定されている。 さらに、文学部では 2011 年度より、社会倫理の涵養をめざし、「現代のコモンセンス」（2 年次より）を開講していることも、特徴としてあげられる。	
【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 2016 年度中に ILAC 科目のカリキュラムを確定し、2017 年度より施行することができた。ILAC 科目では、0～5 群の各科目群をそれぞれ基盤科目・リベラルアーツ科目に分類し、基礎的内容と応用的な内容の双方を学ぶことが定められている。さらには、2018 年度より「教養ゼミ」の開設も決定しており、リベラルアーツを深く学ぶ制度も準備されている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』	
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S ☒ A B
（～400 字程度まで）※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。 学士課程教育への円滑な移行に必要な初年次教育として、哲学科・英文学科・史学科・地理学科・心理学科では ILAC 科目の中に「基礎ゼミ」を開講し、日本文学学科では専門科目の中に「大学での国語力」「ゼミナール入門」を開講している。これらの科目では、文章読解、ディベート、プレゼンテーション、レポート作成、資料探索技術等を扱い、大学での学びに必要な基礎的な能力を身につけることがめざされている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』		
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 ILAC 科目に英語および諸外国語科目を設置し、必修科目を指定している。また、英語強化プログラム (ERP)、グローバル・オープン科目、交換留学生受入れプログラム (ESOP) のうちの英語開講科目、「短期語学研修」「国際ボランティア」「国際インターンシップ」が履修可能になっている。これらの科目は専門科目のうち、自由科目として認定されている (英文学科では一部、選択必修科目に認定されている)。 また、文学部では哲学科がフランス・アルザス地方での現地研修を含む「国際哲学特講」を、英文学科が 3 種類のスタディ・アブロード・プログラムを実施している。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』		
⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 ILAC 科目の中に「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン演習」(ともに 1 年次)、「就業基礎力養成」(1～4 年次)を設置し、初年次よりキャリア教育を実施している。また、文学部では、学部共通科目として「文学部生のキャリア形成」(2 年次以上)を設置している点も、特徴としてあげられる。当該科目では、文学部生としての立場を生かしたキャリア形成への意識を高めるため、本学文学部卒業生による講義がオムニバス形式で実施されている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』		
2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。		
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S	☒ A B
【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。 - 各学科専任教員：4 月にオリエンテーション (1 年次生対象)、在学生ガイダンス (2 年次以降の学生対象) を実施。 - 学務部学部事務課文学部担当：4 月に学部ガイダンス (1 年次生対象) を実施。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・http://www.hosei.ac.jp/bungaku/NEWS/zaigaku/20170221_1.html		
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 すべての専任教員がオフィスアワーを設け、面会時間・場所を『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』に公開し、個々の学生への学習相談に対応している。また、新入生に対しては、すべての学科で 5 月頃までに個人・グループ面談、懇親会等の機会を設け、適切な学習指導を行っている。 また、2 年次以上の学生に対しては、「ゼミナール」「演習」を通じて、担当教員による学習指導が行われている。 さらに、4 年次の学生に対しては、必修の卒業論文を通じて、指導教員による研究指導が行われている。その指導計画については、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』において公開されている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』		
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 履修登録単位数の上限を、再履修単位を含めて 49 単位と定め、計画的な単位履修の指導に加え、学生が授業時間外の学習時間を確保できる方策をとっている。個別の科目については、担当教員が各回の「授業計画」および「授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）」をシラバスに記載し、予習・復習の時間を設けるよう適切に指示・指導している。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

④1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	はい ☒ いいえ
【履修登録単位数の上限設定】※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位数の上限を記入。 履修登録単位数の上限は、各年次とも卒業所要単位（専門科目・ILAC科目）のうち、49単位までと定められている。 【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。 教職科目・資格科目を履修する場合、各年次の登録総合計は、1年次 60 単位まで、2～4 年次 68 単位までと定めている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』	
⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S ☒ B
【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ・授業においてアクティブラーニングを積極的に導入している。 ・大教室における講義科目でも、リアクションペーパー等を活用した双方向型の授業形態を積極的に導入している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S ☒ B
（～400 字程度まで）※どのような配慮が行われているかを記入。 「ゼミナール」「演習」においては、少人数教育を徹底するため、履修者の選抜・調整等を行っている。また、ILAC 科目の英語においては 1 授業あたり 24 名を履修者の上限とし、諸外国語においても 1 授業あたりの履修者の上限を設けている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「ゼミナール」「演習」等の履修者数制限については、各学科のシート参照。	
⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	はい ☒ いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・教学改革委員会委員によるシラバス第三者チェックの実施。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・2016 年度第 10 回文学部定例教授会議事録 ・2016 年度第 7 回教学改革委員会議事録	
⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	はい ☒ いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・「学生による授業改善アンケート」による確認。 ・一部の授業において相互授業参観を実施。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・2016 年度第 2 回質保証委員会議事録 ・http://www.hoseiyoiku.jp/fd/images/topics/1491795704/1491795704_4.pdf	
2.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S ☒ B
【確認体制および方法】※箇条書きで記入。 ・学期ごとに、すべての専任・兼任教員に成績評価・単位認定基準を通知している。 ・一部の科目については、学科会議で成績評価・単位認定について審議している。 ・すべての科目の成績評価・単位認定基準は『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』に公表されている。 ・GPCA 集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい ☒ いいえ
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 他大学等における既修単位は、当該大学のシラバス等を参照し、各学科の学科会議および教授会で審議し、認定を行っている。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2016 年度第 1 回文学部定例教授会議事録	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 厳格な成績評価を行うため、各科目では試験、レポート、口頭発表等にもとづく評価を実施し、その方法もシラバスを通じて告知されている。また、GPCA 集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認できる仕組みをとっている。一部の科目では、学科会議において成績評価を検討・決定している。 なお、講義科目における A+ の付与は、認定単位のうち 20% 以内を目途とすることが、申し合わせられている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』 ・2010 年度第 12 回文学部定例教授会議事録	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい いいえ
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・学生の就職・進学状況については、キャリアセンターによる報告をすべての専任教員で共有することとしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし。	
2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・成績分布については、執行部が学部別・学科別の GPCA 集計表を各学科に配布し、確認している。 ・進級・留級については、毎年 9 月の学科主任会議および 3 月の教授会の承認事項としている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2016 年度第 11 回文学部定例教授会資料 ・2016 年度学科主任会議議事録	
②学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等）。 学生の学習成果の把握・評価は、講義科目においては期末試験、レポートを通じて行われるほか、随時、小テストやリアクションペーパーを通じても行われている。「ゼミナール」「演習」においては口頭発表、レポートを通じて行われている。また、文学部では卒業論文が必修であるため、4 年間の学習成果は論文本体および口述試験によって、把握・評価が可能となっている。なお、レポート、口頭発表、卒業論文への取り組み、評価にあたり、ルーブリックの使用が広まりつつある。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
③学習成果を可視化していますか。	S ☒ A B
【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。 ・学科ごとに学術誌を刊行し、学生の学習成果を公表している。 ・「ゼミナール」「演習」の中には、定期的に成果報告集を作成しているものもある。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・各学科のシート参照。	
2.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

学期末に「学生による授業改善アンケート」を実施し、各教員がそれを授業内容にフィードバックすることで、授業内容とシラバスの整合性を、学生の学びの立場に立ってチェックする体制をとっている。また、毎年実施される「卒業生アンケート」の集計結果をすべての専任教員が把握する方策をとっており、その結果を教育課程、内容、方法の改善に役立てている。

このほか、「学生モニター制度 グループインタビュー」を実施し、学生の意見・要望も聴きとることにより、教育課程、内容の改善に生かす方策もとっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2016 年度第 7 回教学改革委員会回覧資料「学生モニター制度 グループインタビュー」

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S	A	B
---------------------------------	---	----------	---

【利用方法】※箇条書きで記入。

- ・学生による授業改善アンケートの結果を各教員が生かし、そこから気づいたこと、授業改善に役立てたことを『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』のうち、「学生の意見等からの気づき」の項目で公表している。
- ・教学改革委員会および各学科の学科会議で、授業改善のための検討資料として利用することがある。
- ・必要時には、各学科が執行部より学科ごとの「自由記述欄」のデータの提供を受け、現状把握にあたることもある。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2017 年度の ILAC 科目の発足とそれにとりまう教養教育の充実化。	2. 3③

（３）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

- ・文学部全体における教育の現状の問題点の可視化、共有、および改善方策の検討。
- ・全学科のカリキュラムマップ、カリキュラムツリーの年度内公開。

【この基準の大学評価】

①方針の設定に関すること（2.1～2.2）

学位授与方針については、文学部全体としてのディプロマ・ポリシーとそれを構築する各学科における修得すべき学習成果及びその達成のための諸要件が明示・公表されている。また、学位授与方針と教育課程の編成・実施方針の設定では、その関連性において大きな乖離等がなく妥当性・信頼性が高いものと評価できる。

教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の周知・公表については、文学部シラバス、各学科独自の配布資料等で行われている。また、執行部の主導のもと、各会議体において教育目標等の検証が行われ、そのプロセスも適切であると評価できる。

②教育課程・教育内容に関すること（2.2）

文学部全体の取り組みとして、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの策定により、すべての学科が教育課程の編成・実施方針にもとづき、順次性・体系性のあるカリキュラムを構築しようとしており評価できる。

幅広く深い教養および総合的な判断力を培うために卒業所要単位の中に ILAC 科目がバランスよく配置されており、また大学での学びに必要な基礎力を身につけるための初年次教育科目も開講されている。国際性を涵養するための教育としては、全学的に開講されている各種英語科目や海外留学・ボランティア等の制度を卒業所要単位の一部に認定し、その活用を促している。さらに、学生の社会的および職業的自立を図るためのキャリア教育への取り組みに向けた文学部独自のプログラムの提供なども、優れた取り組みである。

③教育方法に関すること（2.4）

文学部における学生への諸指導は、初年次初めから、各学科専任教員により、新入生オリエンテーション、個人・グループ面談、懇親会、在学生ガイダンス、オフィスアワー等を通じて、きめ細かに行われている。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

学生の学習時間の確保と履修登録単位数の上限、各種授業形態の目的等については、『文学部履修の手引き』、『文学部シラバス』等で要項を学生に明示・公開しており、シラバスの作成・検証では、第三者チェック、教員同士の相互授業参観、学生アンケートの実施などに基づいて適切に行われており、評価できる。

授業形態においては、学生の積極的な参加を促す指導法が導入され、指導者と学習者双方向の交流が図られており、また外国語科目や演習科目において1授業あたりの学生数を制限あるいは調整することで少人数教育の徹底を図っている点も評価できる。

④学習成果・教育改善に関すること（2.5～2.7）

成績評価と単位認定基準については、専任・兼任を問わず学期ごとに通知し、学生にもシラバスを通じて周知を図り、さらに成績評価の適切性はGPCAを通じて確認されている。他大学における既修単位については、当該大学の授業内容を確認した上で組織的な認定を行っている。学習成果の可視化については、学科ごとに学術誌を刊行したり、ゼミなどで定期的に成果報告書を出すなどの取り組みが行われている。学習成果の定期的検討については、初年次科目から卒業論文に至るまでの4年間におよぶ履修期間を通じて、各種形成的・総括的評価を導入することで効果的に行われており、学生による授業改善アンケートもシラバスの「気づき」の項目や、授業改善の検討資料として組織的に活用されていることは評価できる。

3 学生の受け入れ

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

【学生の受け入れ方針】

【文学部全体】

文学部は、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、自己推薦入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、グローバル体験入試、英語外部試験利用入試、外国人留学生入試、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要となる基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 志望する学科の専門分野に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

【哲学科】

哲学科は、文学部全体の方針に準じ、各種の入学試験（※）を通して以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、グローバル体験入試、外国人留学生入試、帰国生入試、国際バカロレア利用自己推薦入試。

1. 大学での学習のための一般的基礎学力を有している。
2. 入学後の修学・研究に必要となる基礎的な学力・知識を有している。また、論理的に思考ができ、自分の意見を表現することができる。
3. 哲学に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

【日本文学科】

日本文学科では、文学部の方針に準じ、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。能力・資質を的確に判断して学生を受け入れるため、多様な入試経路を用意し、日本文学科で学ぶにふさわしい者に広く門戸を開放する。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、自己推薦入試、社会人入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要となる基礎的な知識・教養を有している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 日本の文学・言語・芸能について深い関心を持ち、それらの研究や文芸創作に必要となる、知識・読解力・思考力・表現力全般にわたる、より多様でより奥深い人間的な学力・資質を有している。

【 英文学科 】

英文学科では、文学部全体のアドミッション・ポリシーのもと、以下の点を重視し、一つの固定した視点にとらわれずに様々な視点から物事を学ぼうという意欲と能力のある受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、付属校推薦入試、指定校推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、国際バカロレア自己推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試。

1. 英語への関心、文学・演劇作品への興味をもっている。
2. 外国語教育や言語理論の研究に必要な科学的思考を養う意欲を持っている。

近年採用した国際バカロレア自己推薦入試では、とりわけ、一定の能力を持ちつつ多様な個性をそなえた受験生の入学を認めている。

【 史学科 】

史学科は、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 史学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

【 地理学科 】

地理学科は、各種の入学試験（※）を通して、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、自己推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語、外国語、地理、歴史、公民、数学、理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要とされる基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 地理学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

【 心理学科 】

心理学科では、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 心理学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

☐ はい ☐ いいえ

3.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

☐ はい ☐ いいえ

(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

入試における合格者の決定は、執行部（入試委員）と入学センターおよび担当理事が協議を行ない、また必要に応じて学科とも相談のうえ、慎重に行っている。入学定員・収容定員の充足状況は、教授会で報告され、すべての専任教員に把握されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・2016 年度第 1 回文学部定例教授会資料

定員充足率（2012～2016 年度）

（各年度 5 月 1 日現在）

種別\年度	2012	2013	2014	2015	2016	5 年平均
入学定員	605 名	655 名	655 名	655 名	655 名	
入学者数	675 名	651 名	700 名	627 名	801 名	
入学定員充足率	1. 12	0. 99	1. 07	0. 96	1. 22	1. 07
収容定員	2420 名	2470 名	2520 名	2570 名	2620 名	
在籍学生数	2852 名	2846 名	2867 名	2834 名	2950 名	
収容定員充足率	1. 18	1. 15	1. 14	1. 10	1. 13	1. 14

※ 1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ①学部・学科における過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1. 20 以上	1. 25 以上
上記以外の分野	1. 25 以上	1. 30 以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告
すべての分野共通	0. 9 未満	0. 8 未満

※ 2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1. 20 以上	1. 17 以上	1. 14 以上	1. 10 以上
収容定員超過率	1. 40 以上	1. 40 以上	1. 40 以上	1. 40 以上

3. 3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S ☐ A ☐ B ☐

（～400 字程度）※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

学生募集および入学者選抜の結果については、毎年、教授会、入試小委員会（各学科より 1 名選出される委員と教授会主任によって構成）、各学科の学科会議で検証される。その際、入学者の入試経路別 GPCA 平均値等のデータも検討資料に加え、各種入試の定員、選抜方法の改善を必要に応じて行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016 年度第 1 回文学部定例教授会資料
- ・2016 年度第 1 回～第 4 回入試小委員会資料

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし。	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・特になし。

【この基準の大学評価】

文学部の学生の受け入れ方針については、『入試ガイド』等を通じて、明示、公開されており適切に設定されている。それに基づき、定員の超過・未充足については、入学センターとの協議に基づいて対応策が図られ、全専任教員へのその周知方法等についても明示されている。また、学生募集及び入学者選抜の結果については、その検証のための時期、各種会議、構成員、方法等について明示されるとともに、改善点等も学部全体で共有されており、評価できる。

4 教員・教員組織

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

【求める教員像および教員組織の編制方針】(2011 年度自己点検・評価報告書より)

学部・学科の理念を十分に理解した上で、学生一人一人に目の届くきめの細かい教育を行ない、かつ、独創的で最先端の研究に従事できる教員が求められる。同時に教員は、学部・学科運営にも積極的に関わることも重要である。

教員組織においては、年齢、性別、国籍、専門分野等のバランスに留意し、理念を実現するのに十分な教育・研究・指導が可能となる編制を目指す。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」および各学科「人事に関する内規」

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

・学部執行部：学部長（教授会構成員の投票による選出）、教授会主任・副主任（学部長の委嘱、教授会の承認）により構成される。

・学部執行部の役割：学部長は教授会を代表し、文学部教授会規程第 3 条に定められた事項の審議を行うべく、教授会を招集する。教授会主任は学部長を補佐し、学部長に支障のある場合には、その職務を代行する。教授会副主任の職務等は、主任に準ずる。

・各学科：学科の運営を行うため、学科主任を置く。

・基幹委員会名称：人事委員会、紀要委員会、留学規定委員会、資料室委員会、教学改革委員会、入試小委員会、広報小委員会、文学部 I T 委員会、文学部質保証委員会、文学部共通科目運営委員会。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「文学部教授会規程」、「文学部教授会規程内規」、「文学部各種委員会一覧」

4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

☒ はい ☐ いいえ

(～400 字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

各学科とも、年齢、性別、専門分野等のバランスに留意し、理念を実現するのに十分な教育・研究活動が可能となる編制をめざし、組織を整備している。これを保証するために、教員の募集・採用にあたっては学部・学科に規程・内規を設けている。各学科により発議された教員の募集・採用については、6 学科より 1 名ずつ選出される委員と学部長・教授会主任により構成される人事委員会、教授会場で、研究・指導実績、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比、年齢構成等に鑑みつつ、厳正な審査を行っている。そのほか、ILAC 科目などについても、人事委員会および教授会で同様に厳正な審査を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・各学科「人事に関する内規」

・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』

②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(～400 字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

哲学・日本文学・英文学・史学・地理学・心理学から成る文学部の6学科体制は、大学院人文科学研究科の6専攻体制に対応している。そのため、文学部各学科の教員の約9割は、人文科学研究科の各専攻および国際日本学インスティテュートに所属して、学部・大学院の教育にあっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『大学院講義概要(シラバス) 人文科学研究科・国際文化研究科』

2016年度専任教員数一覧

(2016年5月1日現在)

学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
哲	11	1	0	0	12	6	3
日本文	14	1	0	1	16	9	5
英文	10	3	0	1	14	7	4
史	7	2	1	1	11	6	3
地理	7	3	0	0	10	6	3
心理	8	1	1	0	10	6	3
学部計	57	11	2	3	73	40	21

専任教員1人あたりの学生数(2016年5月1日現在): 40.4人

③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【特記事項】(～200字程度まで) ※ない場合は「特になし」と記入。

各学科とも、専任教員の採用にあたっては、年齢構成への配慮を行っている。

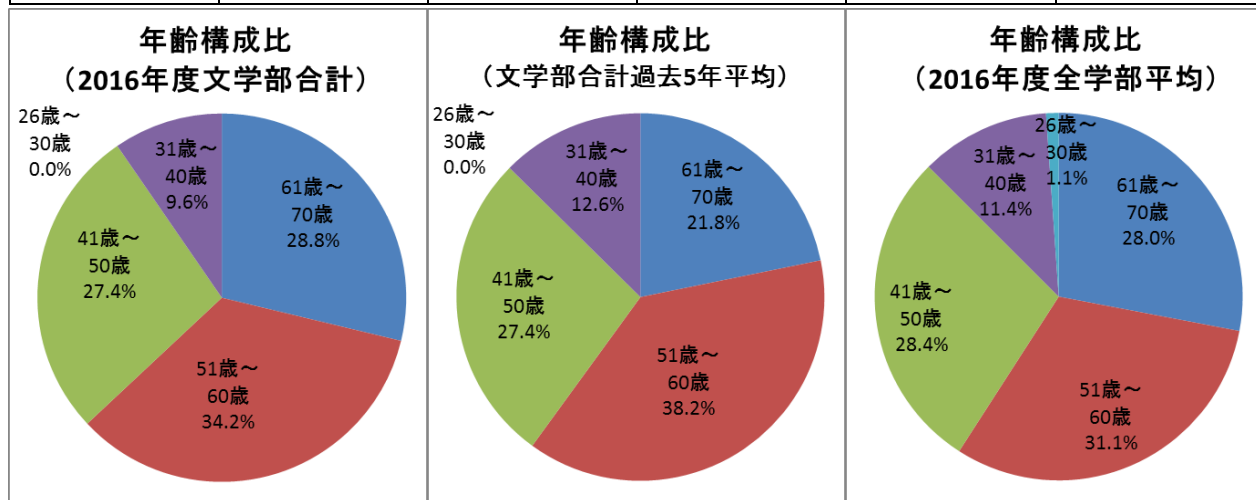
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし。

年齢構成一覧

(2016年5月1日現在)

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2016	0人	7人	20人	25人	21人
	0.0%	9.6%	27.4%	34.2%	28.8%



4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

①各種規程は整備されていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を簡条書きで記入。

・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」および各学科「人事に関する内規」

・大学の定める「教員の定年に関する規程」、「法政大学名誉教授規程」、「市ヶ谷リベラルアーツセンター運営委員会規程」

②規程の運用は適切に行われていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※簡条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等(非公開)を添付すること

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

でも可。

- ・専任教員の募集・任免・昇格は、原則として各学科の発議を受け、文学部人事委員会で審議・承認を行い、その後、教授会で審議・承認を行うこととしている。

4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S ☒ A B

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・執行部、教学改革委員会、質保証委員会が連携して、「専任教員による授業相互参観」の方法改善や集計結果を検討し、教授会全体に周知した。

【2016年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・「学生による授業改善アンケート」（専任・兼任全教員 大学指定期間）を実施した。
- ・「専任教員による授業相互参観」（春・秋学期のほぼ全期間）を実施した。
- ・すべての学科でFDミーティングを実施した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016年度第9回教学改革委員会（拡大）議事録
- ・第2回文学部質保証委員会資料B「2016年度文学部授業相互参観およびFDミーティング等 実施状況（報告）」
- ・http://www.hoseikyoiku.jp/fd/images/topics/1491795704/1491795704_4.pdf

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし。	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科とも、2017年度中に人事に関する内規において、採用における基準を明確化する。

【この基準の大学評価】

文学部の組織については、各種資料（「文学部教授会規程」、「文学部教授会規程内規」、「文学部人事委員会細則」、各学科「人事に関する内規」）で求める教員像および教員組織の編成方針が明示されており、それに基づき、組織運営のための役割分担、責任の所在が明確にされている。また、各学科では、若干の偏りが見られるものの、年齢・性別・専門分野のバランスが考慮され、学部（学科）のカリキュラムとの整合性を保つために、多様な研究内容を提供できる体制を整えている。さらに、大学院との連携においても、その体制が保たれている。

FD活動については、執行部と各委員会が連携した「専任教員による授業相互参観」やFDミーティングが行われており、概ね適切である。

5 学生支援

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・卒業・卒業保留・留年者の把握は、2月の教授会および各学科の学科会議で実施されている（秋卒業については9月の教授会で実施）。
- ・休・退学などの学籍異動の把握は、毎月の学科会議・教授会で実施されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016年第1回～第11回文学部定例教授会議事録

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。 文学部ではクラス担任制は敷いていないが、「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」、卒業論文の各担当教員が担任に準じる職務を果たし、学生の修学支援を行っている。また、各学科の学科主任は学生の窓口としての機能を果たし、学生の要望・相談に適切に対応している。また、すべての専任教員はオフィスアワーを設定し、対応する時間・場所を『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』で公開している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	S ☒ A B
【成績不振学生への対応体制および対応内容】※箇条書きで記入。 ・執行部が各学科主任へ成績不振学生の情報を提供し、対応方策の検討を教学改革委員会で行っている。 ・実際の成績不振学生への対応は、各学科主任の主導により、学科ごとに行っている。 ・対応内容としては、当該学生との面談、学科会議における結果の報告、等である。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・2016 年度第 5 回・第 7 回教学改革委員会議事録 ・2016 年度第 7 回教学改革委員会回覧資料 S-1～7 「成績不振」学生に対する大学が主体的に行う学修指導制度に係る根拠資料」	
④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 外国人留学生の修学支援は、初年次教育科目および「ゼミナール」「演習」の担当教員によって行われている。また、留学生数の最も多い日本文学科では、留学生の修学支援の組織的な対応方法を確立している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本文学科のシート参照。	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし。	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・増加しつつある外国人留学生への修学支援体制の拡充の検討。

【この基準の大学評価】

修学支援の取り組みとしては、学生個人と交流する機会を持ちやすい、ゼミ、卒業論文担当教員などによる学生の要望・相談に適切に対応する取り組みは、優れた取り組みである。成績不振者に対する対応としても、執行部が各学科主任へ成績不振学生の情報を提供し、教学改革委員会が対応方策を検討し、当該学生を面談によって指導するという組織的な指導方法の確立に取り組んでいることも評価できる。 さらに、外国人留学生の修学支援については、ゼミ、各種会議を通じて修学状況を学部(学科)で共有するとともに、教員による個別相談の実施や、グローバル教育センター、学生相談室等との連携により、組織的かつ適切な取り組みが行われている。
--

IV 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準	教育課程・教育内容
現状の課題・今後の対応等	今年度の大学全体の課題である 3 つのポリシーの改定作業、カリキュラム・マップ（ツリー）そして科目ナンバリングの完成等（それに伴う必要なカリキュラム改革等）が当面の課題で

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		ある。 <u>なお、各学科の当該項目を参照。</u>
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	・教育目標と3つのポリシーの改訂作業を終了した。 ・カリキュラム・マップおよびツリーの暫定版（2016年3月作成）をもとに改訂版を作るよう、6学科に依頼した。 ・分野を表す新たな科目ナンバリングを付け終えた。 <u>なお、各学科の当該項目を参照。</u>
	質保証委員会による点検・評価	・大学全体の課題に応じ、3つのポリシーのみならず教育目標も含めて改訂作業が行われたことは、非常に高く評価することができる。 ・カリキュラム・マップおよびツリー、科目ナンバリングの改訂が順調に行われていることも、十分に評価できるが、それに応じたカリキュラム改革が行われているかどうかについては、今後も継続的な検証が必要であると考えられる。
評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		カリキュラムマップ（ツリー）等によるカリキュラム改革とそれに呼応する教育方法の見直し。
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	2017年度中に新たなカリキュラム・マップおよびツリーを各学科HPに公開し、学生に適切な指導を行なえるよう準備を進めている。 <u>なお、各学科の当該項目を参照。</u>
	質保証委員会による点検・評価	カリキュラム・マップおよびツリーの改訂が行われ、学生に適切な指導を行うことができる状態に近づいていることは、学部全体の取り組みとして評価できる。
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		学生の資質・能力等の変化により、限界はあるが、よりきめの細かい教育成果の検証・測定が必要である。
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	GPCA 集計結果のデータをもとに、成績不振者や入学経路別の傾向を分析したが、教育方法と成果の測定については確たる物差しを得るに至っていない。
	質保証委員会による点検・評価	成績不振者や入学経路別の傾向について、GPCA 集計結果に対する分析が行われたことは評価できる。今後も教育成果の検証・測定が適切に行われ、教育方法との関連が一定程度明らかにされることが望まれる。
評価基準		学生の受け入れ
現状の課題・今後の対応等		2016年度入学者数が定員を大幅に超過したため、今後も入学定員充足率に留意する。
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	各入試において、志願状況や併願状況を精査し、定員を超過しないよう厳密な査定を行なった。
	質保証委員会による点検・評価	定員を超過しない厳密な査定が行われたことによって、入学定員充足率に留意するという取り組みは十分に達成されている。
評価基準		学生支援
現状の課題・今後の対応等		成績不振者に対するさらに効果的な指導方法の確立
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	GPCA 集計結果のデータを用い、成績不振者に適切な指導を行なうよう、6学科に依頼した。
	質保証委員会による点検・評価	成績不振者に対する効果的な指導を確立するために、学部として GPCA 集計結果を適切に利用する取り組みが行われていることは、十分に評価できる。

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

文学部では、特に、教育目標と3つのポリシーの改訂作業を終了し、さらに、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー、科目ナンバリングの策定を経て、現状の課題とされていた項目を達成し、学生の学びにおいて、初年次から卒業までの4年間のカリキュラムの順次性・体系性がさらに充実するものとなり、学生に適切な指導を行う状況の実現に至ったことは評価できる。厳正な成績評価の検証として、GPCA 集計結果データの活用を通しての取り組みは評価できるが、さらなる効果的な教育成果の検証・測定に臨むことを期待したい。

また、学生の受け入れについての入学定員超過による問題においては、学部(学科)内での少人数教育等の学生の学びの質を担保する取り組みとして、増コマ等の対応策が一部取られているが、教員の過重な負担を軽減するという観点から、今後とも引き続き対応策の検討が望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【大学評価総評】

文学部は、学部と各 6 学科の連携の在り方が明示され、学部の全体の教育理念と各学科の専門教育・教育方針の整合性がとれていると評価できる。それにより、学科独自の取り組み等の個別の研究・教育実践に違いは見られるが、初年次からの個々の学生の学びの支援体制として、教育方法、教育成果の検証・測定、学生指導等に関する検討事項が学部教員全体で共有されており、学部内(学科間)で良い影響を及ぼし合う環境を構築できている。

学部(学科)のカリキュラム改革等の実践では、教育目標と 3 つのポリシーおよびカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー、科目ナンバリング策定に関する課題を達成したことに加え、ILAC 科目の導入等により、学生に多様な学びの機会を提供しつつ取り組んでいる点も評価できる。

学習支援等では、成績不振学生への組織的な指導法の確立、導入とともに、各教員が公務および担当ゼミ、卒業論文等の授業を通じて積極的に取り組んでいることは優れた取り組みである。一方で、学部(各学科)内での教員の過重な負担という課題では、今後の改善に期待したい。

さらには、学部(各学科)での多彩な研究・教育実践の推進を図るために教員組織・指導体制等について、年齢、性別、専門分野等の配慮すべき項目について明示、共有し、それにともなう課題に真摯に取り組まれている。今後ともさらなる文学部の教育理念の実現に大いに期待したい。

文学部哲学科

I 2012 年度認証評価における指摘事項(努力課題)

該当なし

II 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

文学部は 6 学科からなっており、文学部としての教育理念はあるが、各学科とも専門教育や教育方針の目標を独自に掲げている。その点、6 学科を一つの学部として総評するのは難しいが、全体としては少人数教育を重視し、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育を目指している点は高く評価できる。

「2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」については、全体としては、共通して少人数教育の重視とそれを目指した丁寧な指導が窺えるものの、このようなきめ細かな指導により教員個々の負担が重いのではないかという懸念が残り、その解消策の持続的な検討が今後必要であろうと思われる。

さらに、一般的に文学部の記述には、学生教育への努力は認められるものの、現状の問題点を可視化することが少ないように思われる。さらに一步踏み込んで、さまざまな視点から文学部、そして各学科を客観的に見直し、問題点を明確にし、問題点への対策を実施することが期待されるとともに、よりきめの細かい教育成果の検証と測定を期待したい。他学部や、文学部の中でも新しい学科の好ましい対策や方策を、今後の文学部改革に導入していってもらいたいと期待している。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】(～400 字程度まで)

総評で触れられている教員の学生指導における負担の重さの問題について、抜本策はなお模索中であるが、教員間での負担の平準化については、ゼミ定員制の厳密な適用などで対応が引き続き行われている。また教育成果のきめ細かな検証と言うことでは、学科会議で継続的に、学年ごとに、学生個々の具体的ケースにも触れながら、文書資料に基づき、学習の達成度などの問題点の可視化と検討が行われている。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

※文学部全体の対応状況の評価を参照。

III 自己点検・評価

1 内部質保証

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム(質保証委員会)を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【2016 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

・文学部全体のシートを参照。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

2 教育課程・学習成果

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

哲学科は、所定の単位の修得により以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

1. 哲学的専門性を備えた知識をもつとともに、深い教養と国際的な広い視野をもっている。
2. 古今の哲学者のテキストを正しく理解でき、同時に哲学的知見を現代の諸問題に応用する力を有している。
3. 論理的な理解力や表現力を持ち、説得力のある仕方でも口頭での発表や文章による表現ができる。
4. ディスカッション等において哲学的教養に裏打ちされた豊かなコミュニケーション能力を示せる。
5. 哲学的な問題発見能力と独創的な発想力・問題解決能力をもっている。

①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

☒ はい ☐ いいえ

2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【教育課程の編成・実施方針】

哲学科は、学科の人材育成の目的を達成するために以下に示す教育課程を編成する。

1. 文章読解、ディスカッション、プレゼンテーション、レポート作成の基礎力を涵養するために、初年次に基礎ゼミを設置している。
2. 国際的な幅広い知識を獲得し、広い視野でものごとを思考できる能力の養成をはかるために、リベラルアーツ科目を卒業所要単位に含めている。
3. 専門科目については、哲学科卒業に相応しい学力を段階的に身につけられるようにするために、概論科目・哲学史科目および基礎演習からはじめて、特講科目、演習（ゼミ）を経て卒業論文に至るという発展的な教育課程を編成している。
4. 視野の広い問題意識を養うために、文学部の「共通科目」、および他学科共通科目の履修を可能にしている。
5. 学生がみずから問題を発見し、解決してゆく力を養うために、卒業論文を四年間の学びの集大成として位置づけている。

①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。

☒ はい ☐ いいえ

②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※冊子名称やホームページURL等。

・『文学部案内』、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』、『2017 年度文学部履修の手引き』、
<http://www.hosei.ac.jp/bungaku/gakka/philosophy/index.html>

③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。

S ☒ A ☐ B

(～400 字程度まで) ※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。

教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性を、各学期末の学科会議において検証している。検証のプロセスで問題点が認められる場合は、学科の枠を超えて、学部の教学改革委員会や教授会に問題を提起している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「2016 年度哲学科会議議事予定」	
2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 各課程に相応しい教育内容を提供している。1 年次の「基礎ゼミ」、1・2 年次の概論科目、2 年次の「基礎演習」、2・3 年次の「哲学特講」、3・4 年次の「哲学演習」と、4 年間で段階的で継続した能力形成が可能となるように配置し、4 年次には、広い教養に支えられた専門性の習得の証として、卒業論文の提出を課している。専門科目の中心に位置付けられる哲学特講および哲学演習については、各担当教員の専門分野を生かしながら、幅広い分野にわたる授業内容を提供している。「哲学特講」については、春/秋学期で担当教員を代え、学生の多様な問題関心に対応するように、教育内容に多様性をもたせている。	
【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等 ・『文学部案内』、『2017 年度文学部履修の手引き』 http://www.hosei.ac.jp/documents/gakubu/bungaku/gakka/philosophy/philosophy.pdf	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S ☒ A B
(～600 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。 1・2 年次に教養教育科目（人文・社会・自然科学の一般教養科目と語学科目）を厚く配し、3・4 年次の専門科目中心の学習に資するようにしている。専門科目それ自身についても、ゼミ形式の授業に関しては、1 年次の基礎ゼミ、2 年次の「基礎演習」、3・4 年次「哲学演習」と、4 年間で段階的で継続した能力形成が可能となるように配置している。また、1・2 年次に概論科目を履修・修得させ、2・3 年次には「基礎演習」「哲学演習」と並行して特殊講義、選択科目で専門性および視野の拡大を図り、4 年次には、広い教養に支えられた専門性の習得の証として、卒業論文の提出を課するようにしている。教養教育科目と専門科目の必要単位数の比はほぼ 1:3、同じく専門科目内での必修科目と選択・自由科目の必要単位数の比もおおよそ 1:3 であり、教養教育科目と専門必修科目の基盤の上で、専門科目を比較的自由に、かつ厚く学べるように配慮している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』、『2017 年度文学部履修の手引き』、哲学科ホームページ (http://www.hosei.ac.jp/bungaku/gakka/philosophy/index.html)	
③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 哲学科では、哲学という学問の性格上、教育課程全体にわたり、幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するための授業科目を開設し、体系的に編成している。時代と地域から言えば、古代ギリシャ哲学から近現代ドイツ・フランス・英米哲学、さらに東洋・日本思想までがカバーされ、テーマから言えば、伝統的な存在論、認識論から、科学哲学、政治哲学、社会哲学、美学、倫理学、心の哲学、言語哲学、宗教哲学までが扱われている。加えて、総合科目の一部も専門科目として指定されており、また、テーマの固定がない特殊講義科目では、時代・社会が要請するときの喫緊の問題が、あくまでも哲学の総合的な立場から、機動的に扱われている。必修科目や選択必修科目を軸に、こうした授業を学生たちが体系的かつ総合的に受講するようにカリキュラムは編成されている。	
【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 ・「市ヶ谷基礎科目」の「ILAC 科目」への組み換えが行われた。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』、『2017 年度文学部履修の手引き』、哲学科ホームページ (http://www.hosei.ac.jp/bungaku/gakka/philosophy/index.html)	
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S ☒ A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(～400 字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。 初年次教育に「基礎ゼミ」を開講し、まず全体でゼミ合宿を行うことから始めている。その後、教室での少人数のゼミ授業では、グループ学習なども機動的に取り入れて、リテラシー能力、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力の徹底した向上を図っている。高大連携では、付属高校との関係に限られるが、授業の見学や、まだ実績はないが、一部の授業では継続的な受講も認めている。付属高校 3 年生 3 学期には、哲学科進学者たちに、一コマではあるが、導入授業を実施している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2017 年度文学部履修の手引き』、『2017 年度 ILAC/市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』、哲学科ホームページ (http://www.hosei.ac.jp/bungaku/gakka/philosophy/index.html)	
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 2011 年度（秋学期）から「国際哲学特講」を開講した。この「国際哲学特講」は、国内外に類を見ないユニークな科目であり、ドイツおよびフランスの学生と、それぞれ現地の大学で、同一テーマの下で「合同ゼミ」を行うことが学期の最後に組み込まれている。提携のハイデルベルグ大学（ドイツ）およびストラスブール大学（フランス）でもこの授業は正規授業であり、3 大学の学生は、最終の「合同ゼミ」の準備として、それぞれ自大学で、共通テーマをめぐる「講義と演習の融合授業」を半期間受講する。最終段階で、法大生はフランス・アルザス地方にある国際提携施設に一週間滞在しつつ、それぞれの大学に赴き、それぞれの大学で、それぞれの大学生と、2 大学で合計 5 回の合同授業に参加する。学生は、異文化（西ヨーロッパ文化）に直に触れつつ、異国の学生たちと真剣勝負で哲学を論じるわけで、大変大きな刺激を受けることになる。この科目は、受講学生に異文化への関心を強く抱く機会を与え、国際性の涵養に貢献している。事実この間、哲学科からの大学派遣留学生数は倍増している（2005－10 年度 5 名、2011－16 年度 11 名）。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』、哲学科独自ページ (https://philos.ws.hosei.ac.jp/)	
⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 キャリア教育については、文学部独自の共通科目として、2011 年度より「文学部生のキャリア形成」、「現代のコモンセンス」が開講されている。これらの科目は、就業力の形成、社会人としての常識・倫理の涵養というキャリア教育を目的としており、哲学科の学生にもその履修を奨励している。哲学科独自の試みとしては、やはり 2011 年度より、年に一度、学科卒業生を招いてセミナー形式で、狭く就活についてだけでなく、広く就職ということについて体験談を語ってもらう機会を設けている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』、『2017 年度文学部履修の手引き』	
2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S ☒ A B
【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。 新年度開始の 4 月初めに次を実施している。(1) 新入生オリエンテーション、(2) 在学生ガイダンス、(3) スポーツ推薦入学者ガイダンス、(4) 4 年生に対しては在学生ガイダンス時に卒論ガイダンスも併せて実施している。その際、履修上の誤りが生じないようにするため、演習履修上、卒業論文作成上の留意事項等の資料を配布して指導している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 2010 年度から、新入生全員に対し、専任教員が面接を行い、大学での学習において留意すべきポイントを指導し、履修上のミスマッチが生じないよう学習上の問題点の早期発見と適切な対応に努めている。加えて、ゼミ授業では、複数設置されているゼミを同時に担当する複数の教員が、出欠やレポート提出などで学習の共通ルールを作り、それがすべてのゼミで履行されるようにしている。加えて、1 年次の「基礎ゼミ」では「読み・書き・話す」の基本を徹底させること、2 年次の「基礎演習」では、哲学的に厳密に「理解し・考え・表現する」ことに習熟させること、そして 3・4 年次の「哲学演	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

習」では卒論作成につながることを、自分で「問い・調べ・答える」態度を身につけさせることを、共通のガイドラインとして、学生たちの学習全般にわたってきめ細かく指導している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』、	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S ☒ A B
※取り組み概要を記入。 授業外における学生の学習時間を効果的に確保させるために、とくにシラバスには「授業時間外の学習」についての記述を行い、学生たちが当該授業の外で、予習や復習に効果的な時間の使い方を工夫できるようにしている。また、学生たちが予習や復習を効率よく進めることができるよう、授業前には参考文献等の情報を提供し、また授業後にレポート提出があった場合には、その添削指導などを行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』	
④1 年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	☒ はい いいえ
【履修登録単位数の上限設定】 ※1 年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。 履修上限単位数（春学期履修登録）、また年間合計履修上限単位数は、いずれも 49 単位である。 【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】 ※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。 「文学部全体」のシート参照。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』	
⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S ☒ A B
【具体的な科目名および授業形態・内容等】 ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 (1) 各教員は、指定教科書や参考文献の活用以外に、必要に応じてパワーポイントや毎回のリアクション・ペーパーなどを利用して、教育上の目的を達成できるよう努めている。 (2) 一部の「哲学演習」では、受講生の発表をパワーポイントによるプレゼンテーション形式で実施し、哲学の内容を概念図に変換する能力を養成している。 (3) 受講生が 100 名前後の中規模教室の授業では、授業中に適宜、教員と学生だけでなく、学生間の質疑応答を行なわせ、アクティブラーニングを実施するなど、新たな授業形態の導入に積極的に取り組んでいる。 (4) 卒業論文はそれ自体が巨大な PBL であり、その準備としてある各「哲学演習」では、大なり小なりの PBL が実施されている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』	
⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※どのような配慮が行われているかを記入。 1 年次の「基礎ゼミ」、2 年次の「基礎演習」は、入学者数によって多少は生じるものの、クラス単位で行われている。また、3・4 年次の「哲学演習」は、基本的には当該学年在籍者数をゼミ数（現在は 11）で割った数を定員として、ゼミによるバラつきがなく、どのゼミも少人数教育の特色が活かせるように配慮が行われている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』、「「哲学演習」の受講者制限について」（配布プリント）	
⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 (1) シラバスは、各教員による作成後、教学改革委員が点検し、フィードバックしている。 (2) シラバスには、「授業の概要と目的」、「到達目標」、「授業の概要と方法」、「授業計画」、「授業時間外の学習」、「テキスト」、「参考書」、「成績評価の方法と基準」、「学生の意見等からの気づき」が記載されているが、各項目についての記述の適正さが点検されている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「2016 年度 2 月教授会議事録」	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	はい ☒ いいえ ☐
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・（1）授業がシラバスに沿って行われているかどうかは、学生による授業改善アンケートなどによって検証している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S ☒ A ☐ B ☐
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。 （1）「成績評価基準」は、評価方法を含めてすべてシラバスに明示されており、各担当教員はそれにもとづいて公正かつ適切に評価している。 （2）学生がその評価に疑問をもった場合には、学務部事務課を通じて成績調査を依頼することができる。 （3）成績訂正が必要な場合には、その理由を明らかにし、教授会の議を経て行う。 （4）「哲学演習」として開設されている11の演習科目を始め、ゼミ科目では、単位認定および成績評価の基準を学科内で統一して、成績評価と単位認定の適切性を確保している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』、『2017年度文学部履修の手引き』	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい ☒ いいえ ☐
（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。 転編入試験により哲学科に所属することとなった学生の既修得単位の認定は、学部および学科内で基準を設けて、それに従って、厳格に実施している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017年度文学部履修の手引き』	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。 厳格な成績評価を行うために、シラバスに明示した「成績評価の方法と基準」に従って、また、最初の授業で成績評価基準と努力目標を説明した上で、試験やレポートの出来具合、受講態度や授業参加など平常の状態を総合的に判断評価している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016年度文学部講義概要（シラバス）』	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・（1）学生の就職・進学状況（実数や企業の業種等）については、キャリアセンターからの報告に加えて、各ゼミの卒業生の就職状況が年度末や年度初めの学科会議において担当教員より報告され、その実態を把握している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部全体」に記載している、「キャリアセンターによる報告」	
2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・（1）学科会議で提示される学生に関する資料（事務部作成）から、成績分布、進級・留級状況などを、学科内で把握している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部哲学科学科会議資料	
②学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400字程度まで）※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等）。 講義形式の科目では、習熟度達成テスト、レポートの評価、小テストの評価などを通じて、学生の学習成果を測定している。2年次の「基礎演習」では、毎回の提出される小論文の添削指導、プレゼン実践の評価などを通じて、3・4年次の	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

「哲学演習」では、プレゼン実践・討論実践の評価、レポートの評価などを通じて、学生の学習成果を測定している。これらを踏まえて、卒業論文の評価が、学習成果の総合的な測定となる。学習成果の測定は、定量化・数値化しにくいところがあるが、その方法が教員間で検討され、共有されるようになっている。また、卒業生アンケートを学科会議で回覧し、教授活動にフィードバックしている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』

③学習成果を可視化していますか。

S ☒ A B

【学習成果可視化の取り組み】※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。

(1) 4 年次の卒業論文指導では、ゼミ単位ではあるが、成果発表会の実施、卒論論集の作成、卒論要旨集の作成などが行われている。また、4 月初めの在学生ガイダンスの際に、前年度のタイトルの一覧を在学生に公表している。

(2) 一部の「哲学演習」では、ゼミ発表と配布資料をすべて DVD に収録し、ゼミ学生に配布している。また、他に、学年末に、その 1 年の校内外でのゼミの活動を、ゼミ生たちの 1 年を振り返る言葉とともに DVD にまとめて、配布しているゼミもある。

(3) 「国際哲学特講」では毎年のドイツ・フランス研修の詳しい報告を、写真や参加学生の言葉とともに学科 HP 上で公開している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・哲学科独自のサイト (<https://philos.ws.hosei.ac.jp/>)

2.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。

①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。

S ☒ A B

(～400 字程度まで) ※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

(1) 学科会議において、哲学科の学生の履修状況、GPCA 集計結果など成績等に関する資料、ならびに、教員相互の情報交換などにより、教育成果の検証を行っている。

(2) 対処すべき問題が生じた場合には、学科会議の議により対処を決定し、実施している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・文学部哲学科学科会議資料

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

S ☒ A B

【利用方法】※箇条書きで記入。

(1) 学生による授業改善アンケート結果については、各セメスター終了後、アンケート調査表を各教員が確認し、そのアンケートからの「気づき」にもとづいて次年度の授業改善に活用している。

(2) 学科会議では、適宜、改善可能な点を検討し学科全体で組織的に活用するよう努めている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・これまでの履修指導、学習指導の実績を踏まえて、学生個々の固有の課題に対応したきめの細かい指導のあり方を学科会議で検討してゆく。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

3 学生の受け入れ

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。						
【学生の受け入れ方針】 哲学科は、文学部全体の方針に準じ、各種の入学試験（※）を通して以下に示すような能力、意欲を有する受験生の入学を認める。 ※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、グローバル体験入試、外国人留学生入試、帰国生入試、国際バカロレア利用自己推薦入試等。 1. 大学での学習のための一般的基礎学力を有している。 2. 入学後の修学・研究に必要となる基礎的な学力・知識を有している。また、論理的に思考ができ、自分の意見を表現することができる。 3. 哲学に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。						
①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。						☒ はい ☐ いいえ
3.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。						
①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。						☒ はい ☐ いいえ
（～200 字程度まで）※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。 2012 年度から 2016 年度までの平均入学定員充足率は、1.17 であり若干の超過状態にあると認められる。これはほぼもっぱら 2016 年度の超過に起因している。この超過は大学全体に見られた事態で、原因についても大学全体で分析がなされており、2017 年度以降には哲学科でも繰り返されないものと考えている。						
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「2017 年度 4 月定例教授会資料 5」						
定員充足率（2012～2016 年度） （各年度 5 月 1 日現在）						
種別\年度	2012	2013	2014	2015	2016	5 年平均
入学定員	70 名	77 名	77 名	77 名	77 名	
入学者数	81 名	83 名	81 名	73 名	99 名	
入学定員充足率	1.16	1.08	1.05	0.95	1.29	1.11
収容定員	280 名	287 名	294 名	301 名	308 名	
在籍学生数	340 名	347 名	342 名	334 名	353 名	
収容定員充足率	1.21	1.21	1.16	1.11	1.15	1.17
※ 1 定員充足率における大学基準協会提言指針 【対象】 ①学部・学科における過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率の平均 ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率 【定員超過の場合】 ※医学・歯学分野は省略						
提言		努力課題		改善勧告		
実験・実習を伴う分野 （心理学、社会福祉に関する分野を含む）		1.20 以上		1.25 以上		
上記以外の分野		1.25 以上		1.30 以上		
【定員未充足の場合】						
提言		努力課題		改善勧告		
すべての分野共通		0.9 未満		0.8 未満		
※ 2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準						
年度	～2015	2016	2017	2018～		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

入学定員超過率	1.20 以上	1.17 以上	1.14 以上	1.10 以上	
収容定員超過率	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	

3.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S ☒ A B
---	---

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

(1) 哲学科では、毎年、入学センターから提供される資料に基づき、学生募集定員と受験者実数との関係や入学者の学力等を精査して、当該年度の入学選抜の結果について、入試形態ごとに妥当性を検証している。

(2) 当該年度の入学者の入学経路や成績分布等も検証することによって、翌年度の学生募集定員や推薦入学指定校の見直しを行なっている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
(1) 2016 年度入学者の超過に伴う増コマなどを含む教育上の対応を行った。	3.2 ①

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

(1) 2016 年度入学者の超過に伴う今後 3 年間の増コマなどを含む教育上の対応法の検討と実施。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

4 教員・教員組織

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	
【求める教員像および教員組織の編制方針】(2011 年度自己点検・評価報告書より) 専門研究者としての実績、すぐれた教育指導力、そして高潔な人格を兼ね備えた人材が本学科の求める教員像である。また、本学科の教育課程は、西洋哲学を中心とした幅広い分野を網羅していることに大きな特色がある。この教育課程に即して、その主要部分を担当できる専任教員ならびにその他の部分を担当するに適した兼任講師をもって教員組織を編制する。	
①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【根拠資料】 ※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。 ・「文学部教授会規定」「文学部教授会規定内規」、「文学部人事委員会細則」、「哲学科 人事に関する内規」	
②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】 ※箇条書きで記入。 (1) 文学部全体のシートを参照。 (2) 年度ごとに学科主任一名を選出し、役割を分担している。 (3) 学科会議において学科所属教員の学内・学部・学科内の役割分担を決定している。 (4) それを分担表に明示し責任の所在を明確化している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	

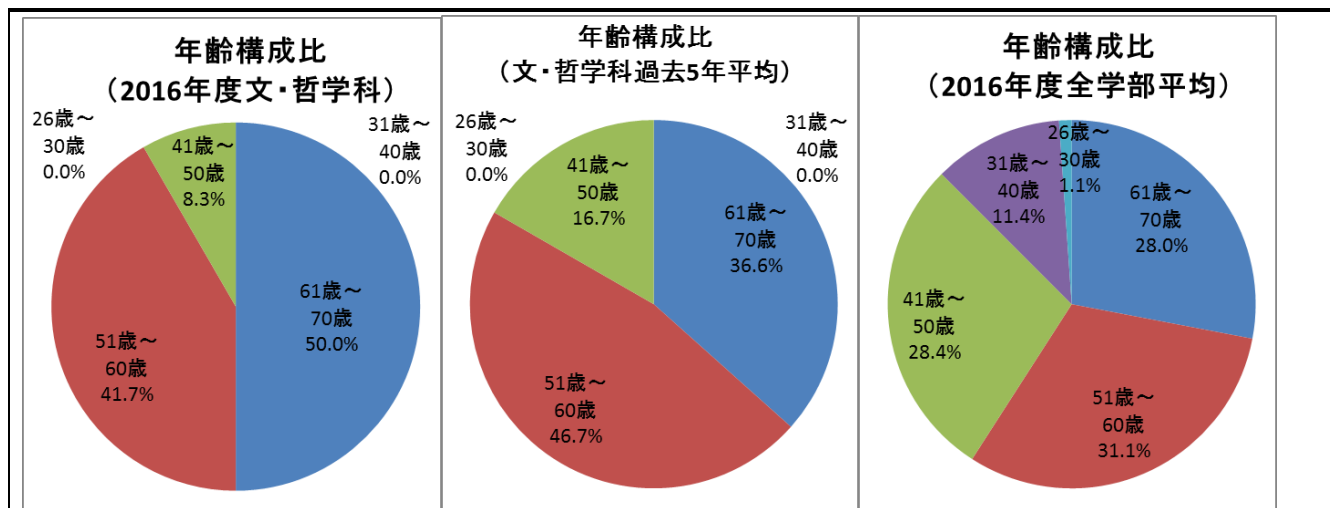
※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

・2017 年度各種委員会名簿（文学部教授会資料）							
4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。							
①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。						はい いいえ	
（～400 字程度まで）※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。 哲学科のカリキュラムは、古代ギリシャ哲学から、近代の英米系・フランス系・ドイツ系の哲学・倫理学、そして、現代の言語分析哲学、哲学的解釈学、法哲学、数理哲学、さらに社会思想、日本思想、東洋思想、比較文化に至るまで、学生の多様な関心に対応できるように、幅広い学問分野を網羅し、それに相応しい教員組織を備えている。専任教員は、古代ギリシャ哲学 1 名、英米系哲学 1 名、フランス系哲学・思想 2 名、ドイツ系哲学・思想 5 名、数理哲学 1 名、法哲学 1 名、比較文化 1 名であり、主要な分野にバランスよく配置されている。専任教員ではカバーできない科目については兼任教員に担当してもらうが、担当教員については、カリキュラムのバランスと候補者の専門性、教育経歴を慎重に審査した上で人事を提起し、人事委員会および教授会の承認を得て決定している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部全体」、「哲学科 人事に関する内規」、「『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』」							
②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。						はい いいえ	
（～400 字程度まで）※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。 哲学科 12 名の専任教員の内、11 名が大学院教育を担当し、学部・大学院相互の連携を図っている。また、学部学生に大学院科目の受講を認めることによって、学部教育との連携が図られている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『大学案内』、『大学院案内』							
2016 年度専任教員数一覧 (2016 年 5 月 1 日現在)							
学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
哲	11	1	0	0	12	6	3
専任教員 1 人あたりの学生数（2016 年 5 月 1 日現在）：29.4 人							
③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。						はい いいえ	
【特記事項】（～200 字程度まで）※ない場合は「特になし」と記入。 直近の過去の退職教員の後任人事の際に、40 歳代前半の教員を採用することによって、年齢構成上の問題は一定程度改善されている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし							
年齢構成一覧 (2016 年 5 月 1 日現在)							
年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳		
2016	0 人	0 人	1 人	5 人	6 人		
	0.0%	0.0%	8.3%	41.7%	50.0%		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

①各種規程は整備されていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- (1)「文学部教授会規定内規」
- (2)「哲学科 人事に関する内規」

②規程の運用は適切に行われていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。

- (1) 教員の募集・任免・昇格に際しては、人事関連規定に則り、学科内で審議・検討の上、人事委員会へ発議し、教授会で審議・承認というプロセスを採っている。
- (2) 教員の募集は公募を原則とし、書類選考、面接、模擬授業による厳格で適正な採用方針に則って行われている。

4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S ☒ A ☐ B ☐

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- (1)「相互授業参観」のために授業を公開する。
- (2)ゼミ科目を中心に学科内でFDミーティングを実施する。
- (3)FD推進センターが主催する各種セミナーへ参加する。

【2016年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- (1) 哲学科では2016年度において、「相互授業参観」のために、月曜2限、火曜3限、5限、水曜2限の計4つの専門科目を公開した。
- (2) 2名の教員で2クラスを分担し、並行して開講している「基礎ゼミ」（春学期）では、FDミーティングを学期内に2回行った。同じく、2名の教員で2クラスを分担している「基礎演習」（春学期・秋学期）では、FDミーティングを学期ごとに3回ずつ行った。それぞれでは、主に、同じ評価基準で授業をどう運営していくかが検討された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・教員の年齢構成の偏りは最近改善されたとは言え、今後、さらに改善努力が求められよう。加えて、2017年度中に、人

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

事に関する内規において、採用における基準を明確化する。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

5 学生支援

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の種類等】※箇条書きで記入。

- (1) 卒業、卒業保留、退学状況については、事務部作成の資料をもとに、教授会、学科会議においても確認し、その実態を把握している。
- (2) 学科主任や卒業論文指導教員による面談や連絡を通じて、実態の具体的把握を行っている。
- (3) 問題が生じた場合は、学科会議で検討し対処を決定している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・文学部哲学科学科会議資料

②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。

S A B

(～400 字程度まで) ※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。

修学困難者への支援は、困難のよってくるところが多様であるだけに、学科として一様の対応を行うことはむずかしい。学力が原因である場合、ほとんどの教員は、オフィスアワーなどを利用して補習を行っている。ゼミの外に、恒常的にサブゼミを置いて教育補充を行っている教員も多い。また、身体的あるいは精神的問題が原因である場合、学科会議で情報を交換し合い、問題学生個々に応じて、学内診療所や相談室からのアドバイスも求めつつ対応を図っている。加えて特筆すべきは、哲学科所属の教員の一人が自らの資産を元に、経済的原因での修学困難者を対象にした奨学金制度を 2015 年に発足させたことで、もちろんこれは全く個人の意思に発することではあるが、学科としてもこれが大変誇らしく感じている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・ http://www.hosei.ac.jp/documents/campuslife/shogaku/2015/makino_150501_01.pdf

③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。

S A B

【成績不振学生への対応体制および対応内容】※箇条書きで記入。

- (1) 成績不振に先立ち、欠席が目立つようになった段階から、当該学生については、学科会議で情報を交換し、可能な対応を話し合っている。
- (2) 1 年生については教員全部で手分けして全員の面接を夏休み前後に一度行っており、学業で問題を抱える学生を早い機会に発見できるようにしている。結果として支援が必要と認められた学生については、対応を、学科会議全体でと言うより、主に、その学生が受講している授業の担当者同士が話し合っていて決めている。
- (3) 2-4 年生の成績不振学生については、学生が必修ないし選択必修で属しているゼミ（「基礎演習」ないし「哲学演習」）の担当者が個別に面談し事情の把握に努め、それに基づき、取るべき対応を、学科会議の場で話し合っている。
- (4) 必要に応じて、学科主任による面談を実施している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。

S A B

(～400 字程度まで) ※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。

1 年生全員に対する個人面談の際に、学修に関する問題を取り上げ、支援を行っている。また、基礎ゼミ、基礎演習、必修科目、哲学演習等の授業、卒業論文の個人指導の機会等に、適宜、学修上のアドバイスや支援を行なっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・この間、留学生が毎年入学してくるようになってきており、修学支援で、より組織だった対応が必要になって来よう。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

IV 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		教員・教員組織
現状の課題・今後の対応等		前年度の実績を踏まえて「相互授業参観」への取り組みを進める。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	・(1) 2名の教員で2クラスを分担し、並行して開講している「基礎ゼミⅠ」(春学期)では、FDミーティングを2回行い、同評価基準で授業を運営した。 ・(2) 2名の教員で2クラスを分担している「基礎演習1」、「基礎演習2」(春学期・秋学期)では、FDミーティングを学期ごとに3回ずつ行い、同評価基準で授業を運営した。 ・(3) 哲学科では2016年度において、「相互授業参観」のために、月曜2限、火曜3限、5限、水曜2限の計4つの専門科目を公開した。 ・(4) これらを学科会議の議を経るなかで行った。
	質保証委員会による点検・評価	・異なる担当教員が開講している「基礎ゼミⅠ」や「基礎演習1」「基礎演習2」では、クラス間での評価の公平性が求められるわけだが、複数のFDミーティングにより「同評価基準」の実現に努めていることは適切である。 ・「相互授業参観」を2016年度は4科目としているが、この科目数は2015年度と比べて増加しているかどうかの検証が行われることが望ましい。
評価基準		教育課程・教育内容
現状の課題・今後の対応等		(1) これまでの取り組みを踏まえ、各年次の学生の履修状況をより詳細に把握し問題点の検討・対応を行う。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	(1) 専任教員が1年生全員と面談を行ない、学生の履修状況と問題点を把握した。 (2) 履修上問題のある学生全員をピックアップし、学科会議で個別に検討、必修授業・ゼミを通して学生への指導を行った。 (3) その結果を学科会議に上げ、学科での検討を行い、各教員の指導にフィードバックした。
	質保証委員会による点検・評価	履修上問題のある学生全員に対し、丁寧な対応が行われており、学科会議で実情把握と対応内容を教員全体で共有し、学生への対応レベルの向上と統一化を目指したことは適切である。
評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		これまでの履修指導、学習指導の実績を踏まえて、年度ごとの固有の課題に対応したきめの細かい指導のあり方を学科会議で検討してゆく。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	(1) 月一回開催される学科会議において、哲学科の学生の履修状況、成績等に関する資料、ならびに、教員相互の情報交換により、教育成果の検証を定常的に行った。 (2) 今年度における入学者増に伴う、今年度および次年度以降における学習指導上の問題点を検討し、方策を協議した。 (3) 上記協議に基づき、次年度の「基礎演習1」、「基礎演習2」の一コマ増、今後3年間の

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		「哲学特講」春学期・秋学期それぞれ一コマ増を法人に求め、実現した。
	質保証委員会による点検・評価	今年度の入学者増に伴うコマ数の増加対応を、卒業までの4年間を見通して法人に申請し実現できたことは、適切な対応と評価できる。
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		これまでの取り組みを踏まえて、学習成果の測定を行い、成果の可視化を進める。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	(1) 1年次の基礎ゼミ・必修科目、2年次の基礎演習・必修科目、3・4年次の哲学演習・特殊講義において、授業内アンケートや質問用紙の回収とそれへの授業内での回答を通じて学習成果を可視化した。 (2) 4年次の卒業論文指導では、前年度に引き続き、構想発表会を実施し、学習成果を可視化・共有化した。 (3) 卒業論文に関しては、4月初めの在学生ガイダンスの際に、前年度のタイトルの一覧を在学生に公表し、学科主任が卒業論文執筆の流れとあわせて説明を行なった。
	質保証委員会による点検・評価	授業内アンケートや卒論構想発表会などにより学習成果を可視化する努力は評価できるが、「可視化」の具体的内容の提示があれば、学習成果だけでなく問題点の把握にもより役立つと考えられる。
評価基準		学生の受け入れ
現状の課題・今後の対応等		(1) 入学者の超過に伴う今後4年間の増コマなどを含む教育上の対処法の検討と実施。 (2) 入学定員超過の問題を全学的な分析を踏まえて学科としての対処を検討する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	(1) 今年度における入学者増に伴う、次年度以降における学習指導上の問題点を検討し、それに基づいて、次年度の「基礎演習1」、「基礎演習2」の一コマ増、今後3年間の「哲学特講」春学期・秋学期それぞれ一コマ増を法人に求め、実現した。 (2) 夏休み明けに一年生全員を対象に面談を行い、必修科目を中心として、定員超過に伴う履修上の問題点を検討し、学科会議での議を通して、各教員にフィードバックした。
	質保証委員会による点検・評価	増コマ対応だけでなく、夏休み明けの1年生全員に面談を実施したことは、定員超過への効果的対応と評価できる。
評価基準		学生支援
現状の課題・今後の対応等		留学生を含め、個人面談、授業、卒論指導を通して個々の学修状況の把握、支援をきめ細かく行っていく。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	(1) オフィスアワーを通して、学生個人に即した形での学修指導を行ない、学科会議で検討した。 (2) 個別の卒論指導、また卒論構想発表会を通して、3・4年次生への学修指導を行なった。 (3) 新入生全員に面談を行ない、学修上の問題点を把握し、学修指導とアドバイスを行ない学科会議で検討した。
	質保証委員会による点検・評価	記載内容が上記4項目と重複している感はあるが、オフィスアワー・個別の卒論指導・新入生全員への面談と、学生への個別対応を丁寧に行っていることは適切である。

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

※文学部全体の取り組み状況の評価を参照。

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照。

文学部日本文学科

I 2012年度認証評価における指摘事項（努力課題）

該当なし

II 2016年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016年度大学評価結果総評】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

文学部は6学科からなっており、文学部としての教育理念はあるが、各学科とも専門教育や教育方針の目標を独自に掲げている。その点、6学科を一つの学部として総評するのは難しいが、全体としては少人数教育を重視し、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育を目指している点は高く評価できる。

「2015年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」については、全体としては、共通して少人数教育の重視とそれを目指した丁寧な指導が窺えるものの、このようなきめ細かな指導により教員個々の負担が重いのではないかと懸念が残り、その解消策の持続的な検討が今後必要であろうと思われる。

さらに、一般的に文学部の記述には、学生教育への努力は認められるものの、現状の問題点を可視化することが少ないように思われる。さらに一歩踏み込んで、さまざまな視点から文学部、そして各学科を客観的に見直し、問題点を明確にし、問題点への対策を実施することが期待されるとともに、よりきめの細かい教育成果の検証と測定を期待したい。他学部や、文学部の中でも新しい学科の好ましい対策や方策を、今後の文学部改革に導入していただくと期待している。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

少人数科目である初年次教育科目とゼミナールに関しては、担当教員間で頻繁に情報交換を行なうなど、円滑な運営をすすめるための方策を講じている。また助教が2016年度をもって退職したため、学科教員の年齢比率や負担軽減を念頭に置きながら、後任人事をすすめる予定である。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

※文学部全体の対応状況の評価を参照。

III 自己点検・評価

1 内部質保証

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

- ・「文学部全体」のシート参照。
- ・学科の内部質保証については、学科主任を中心に、学科会議とメールによる情報共有を組み合わせで運営している。学科の目的および教育目標を具現化するため、教員組織を効果的に機能させて適切な現状分析を行い、その現状分析に基づいて教員それぞれの主体的な関与が期待できる方針・到達目標を設定する。目標が達成された後も、さらなる改善のため検証作業を行っている。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
特になし。	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

2 教育課程・学習成果

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

日本文学科は、所定の教育課程のもと、所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1. 日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての基本的な知識を身につけている。 2. 所属する文学・言語・文芸の三コースいずれかの領域における正確な読解力を有している。 3. 自ら問題を発見し、その問題について考察を深められる思考力を有している（文学・言語コース）。 自ら主題を発見し、その主題について構想を深められる想像力を有している（文芸コース）。 4. 自らの研究や発想の成果を的確に伝えられる日本語の表現力を有している。	
①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。	はい ☒ いいえ
2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。	
【教育課程の編成・実施方針】 日本文学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。 1. 1年次においては、大学生の学びに必要とされる能力の習得のため、少人数制による初年次教育科目を設置するとともに、専門教育への導入として、日本の文学・言語・芸能、また中国文学について基本的な知識を修得できる科目を配置している。 2. 専門性を広く把握すると同時に深く追求するため、文学・言語・文芸の3コースを設置し、学生は2年次からそのいずれかに籍を置き、少人数制のゼミナールに所属する。より正確な読解力、深い思考力・想像力、的確な表現力、問題発見・解決能力を涵養するため、専門分野に関する科目および隣接領域に関する科目を、段階的に、また体系的に履修できるよう配置している。 3. 教養教育科目（市ヶ谷リベラルアーツセンター科目）の単位を卒業所要単位に含めている。センターのカリキュラムに従って履修することにより、さらに幅広い学問分野の知識を得て、柔軟かつ多角的な認識力・思考力・問題解決力等を涵養する。 4. 4年次においては、ゼミナール担当教員の指導のもと、卒業論文の執筆に取り組む。なお、卒業論文は、日本文学科の教育課程における集大成とし、大学での研鑽の成果を発揮するものとして位置づける。	
①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。	はい ☒ いいえ
②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。	はい ☒ いいえ
【根拠資料】 ※冊子名称やホームページURL等。 ・ http://www.hosei.jp/bungaku/shokai/policy/index.html ・ http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page_id=220	
③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。	S ☒ A B
（～400字程度まで）※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。 学科の理念・目的の適切性の検証と連動し、上記各項目の適切性の検証を学科会議で行っている。定期的に検証するしくみは構築していないが、改善の余地が判明した場合、特にカリキュラム改革を行う際には、その検討過程において、学科会議等でその適切性を検証している（直近のカリキュラム変更は2014年度）。また、2014年度から、カリキュラムマップの作成、科目ナンバリング・コードの付番に取り組んでおり、現在も学科会議において検証過程にあるところである。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・ 特になし。	
2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S ☒ A B
（～400字程度まで）※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 1年次では、大学での学習に必須の国語基礎力を養成するため「大学での国語力」（必修科目）を、そして「ゼミナール」を履修する上で基礎的な能力を養成するため「ゼミナール入門」（選択科目）を開講している。2年次以降は所属コース必修科目と「ゼミナール」および各コース共通で履修できる選択科目を通し、諸領域にわたる幅広い知識を身につける。 すなわち、初年次教育から専門的教育へと順次段階的に知識と理解を深め、蓄積しつつ、専門科目やゼミナールでの演習によって自ら問題を発見・思考・調査し、プレゼンテーションすることを通して、自己の研究課題や創作テーマを見出	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

すとともに、それらの方法論を学ぶ。その過程において各ゼミナールの教員は的確・厳密に学生の能力の向上を図り、その集大成としての卒業論文・卒業制作執筆の指導に当たる。毎年多くの優れた卒業論文・卒業制作が提出されるところから、これらの教育内容の適切性を判断しうる。		
【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等 ・『2017年度文学部履修の手引き』60～76頁 ・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』73～158頁		
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S	☒ A B
(～600字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。 1年次に春学期必修科目「大学での国語力」を置き、大学での学習に必須である国語基礎力の養成を、1クラス20名程度という少人数授業で徹底して行っている。秋学期には2年次以降科目「ゼミナール」の導入として、選択科目「ゼミナール入門」を置き、より専門的な資料作成能力や文献探索能力、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力の養成を少人数授業で行っている。 2年次からは、文学・言語・文芸の3コース制をとる。コースは「ゼミナール」（選択必修科目、2年間の継続履修、各学年7～10名定員）の所属ゼミによって決定し、各コース共通の必修科目3科目を土台とし、コース別必修科目2科目をそれぞれの専門性の柱とする体系化が施されている。選択必修科目には専門性を深く掘り下げる科目、選択科目・自由科目には各コースにおける研究の可能性の幅を広げ多様な興味に応えられる科目が用意されており、こうした教育課程で身につけた総合的な学力を検証するものとして、必修科目「卒業論文」が4年次に配置されている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017年度文学部履修の手引き』60～76頁		
③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	☒ S	A B
(～400字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 1年次では、ILAC科目を中心に履修できるよう配慮し、人文科学、社会科学、自然科学、語学、体育の各分野について幅広く教養を習得できるようにしている。その一方、学生が早い段階からより深い学識が得られるよう、専門科目の履修も、科目の限定はしているが、可能としている。 2年次以降も、ILAC科目の履修により幅広く教養を身につけることができる。専門科目においても、日本文学・言語研究に関する科目以外に、美術、思想、言語心理学、認知科学等、隣接した学問領域の科目を選択科目として履修可能としているほか、総合科目、他学部公開科目、電算実習科目等を自由科目として8単位以上取得することとし、さまざまな学問領域をより深く学び、総合的な教養を修得できるよう教育課程を編成している。また、「ゼミナール」では少人数教育を行っており、担当教員の個性を生かした、豊かな人間性と専門的能力を涵養する場となっている。 上記の教育によって得られた深い教養と専門的知識をベースに、4年次では卒業論文・卒業制作に取り組み、さらに総合的な判断力を培っていくこととなる。		
【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ・2017年度からILAC科目新カリキュラム施行を踏まえた再検討を行なう（「文学部全体」のシート参照）。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017年度文学部履修の手引き』60～76頁 ・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』73～158頁		
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S	☒ A B
(～400字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。 初年次教育として、大学での学習に必須の国語基礎力を養成するため「大学での国語力」（必修科目）を春学期に、「ゼミナール」履修上基礎的な能力を養成するため「ゼミナール入門」（選択科目）を秋学期に開講している。前者は授業でのレポート・論文を書く力、専門的学術書を読解するための読む力、講義を聞く力を養うための講義であり、毎回漢字テストも課している。この授業を通して高校までの基礎的な国語力を確認するとともに、大学での高度な講義に対応するための研究基礎力を養成している。また後者は、高校生には十分な経験のない、プレゼンテーション力を鍛錬することを主眼とする講義であり、2年次からの研究の中心となる「ゼミナール」への橋渡しの役割を果たしている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』75 頁		
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 国際化に対応した教育内容として、日本文学科は日本文学に興味をもつ海外からの留学生（主に中国・韓国）を積極的に受け入れるとともに、ゼミナールから選択必修科目、選択科目までを含む中国文学に関する科目が学生の国際性を涵養するための重要な柱となっており、教育課程において日本文学を相対化してとらえる視点を提供している。 また、ESOP 科目、グローバル・オープン科目、ERP 科目等のグローバル教育センター設置科目を自由科目として履修できるようにしており、グローバルな視点を養う教育プログラムも積極的に導入している。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』60～76 頁 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』73～158 頁		
⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 キャリア教育に関しては、文学部共通科目「現代のコモンセンス」「文学部生のキャリア形成」のほか、学科独自の取り組みとしては、「メディアと社会」、「編集理論 A・B」、「編集実務 A・B」、「表現と著作権」（以上、選択科目）はキャリア教育としての意味も担っている。また「古文・漢文の基礎」（選択科目）は古典読解の前提となる内容をあつかうが、受講対象者には、教育実習で古文漢文を教えることになる学生も含んでおり、教職志望学生のためのキャリア教育的役割も担っている。 カリキュラム外でも就職支援行事「日文科生のための就活力」を日本文学科学生委員会との共催で開き、4 年生の就職活動状況を把握したり、3 年生への情報提供を行ったりしている。また中高校の教員となった本学科卒業生から成る交流会を組織し、今後はこの会が教員を目指す在学生の支援も行なうことになっている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』149～153 頁		
2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。		
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S	☒ A B
【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。 ・新入生オリエンテーション ・学科内留学生サポート小委員会による「1 年次留学生履修相談会」の開催 ・1 年次後半のゼミナール選抜に関する指導 ・2 年次在学生ガイダンス ・コースや研究分野に対応した 5 つの履修モデルを日本文学科公式サイトにて公開 ・4 年次への進級や卒業履修要件の充足を目指し、履修状況の確認を学生各自で行う「3 年次履修チェックリスト」を日本文学科公式サイトにて公開		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本文学科新入生オリエンテーション資料 ・留学生サポート小委員会履修相談資料 ・日本文学科在学生ガイダンス資料 ・「専門科目の履修モデル」（文学コース、言語コース、文芸コース） ・文学部日本文学科公式サイト http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/		
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 当学科の教育方法の特徴は双方向授業による一貫した少人数指導である。1 年次春学期「大学での国語力」（必修科目）、1 年次秋学期「ゼミナール入門」（選択科目）、2～3 年次「ゼミナール」（選択必修科目）はいずれも受講者数が 20 名前後の少人数クラスで、担当教員がきめ細やかな教育を行っており、学生にとっても教員に質問しやすい学習環境を構築している。また、4 年次「卒業論文」（必修科目）はゼミナール担当の教員が指導教員となるため、2 年次から 4 年次まで、教員が学生の学習段階を常に把握し、互いに信頼関係を築きつつ、密度の濃い学習指導を行うことが可能となっている。		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

各教員ともオフィスアワーを設定しているが、1 年次入学直後の新入生歓迎会において、教員の研究室の案内をして懇談会を開き、学科全体で学生が学習相談をしやすい環境を築いており、オフィスアワーの活用を促している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』60～76 頁 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』73～158 頁	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S ☒ A B
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 学生の学習時間は、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』に記載された「授業外に行うべき学習活動（準備学習等）」という項目によって予習・復習を促し、成績評価にかかわる課題の提出や試験の実施によって復習を行わせることで、適切に確保するようにしている。『2015 年度文学部講義概要（シラバス）』から「授業外に行うべき学習活動（準備学習等）」の内容を、より具体的に記載することによって、学生が取り組みやすくなるよう、工夫を施した。成績評価の基準も『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』に明記されているが、主にシラバスで必要な情報を公開することによって、学生に自主的な学習を促している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』73～158 頁	
④1 年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【履修登録単位数の上限設定】※1 年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。 「文学部全体」のシート参照。 【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。 「文学部全体」のシート参照。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部全体」のシート参照。	
⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S ☒ A B
【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ・下記の科目等ではアクティブラーニングを導入している。 「大学での国語力」「ゼミナール入門」…「ゼミナール」の導入的基礎的内容。 「ゼミナール」…各コースの研究分野に関する知識を習得するほか、問題発見・解決能力、複数で調査や考察を行うグループワークの能力、さらにはその結果をプレゼンテーションする発表能力を修得する。 「編集実務 A・B」…DTP ソフトを使用し、書籍や雑誌の誌面デザインを行う。小冊子の作製や課題のプレゼンテーションを行う。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』73～158 頁	
⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S ☒ A B
（～400 字程度まで）※どのような配慮が行われているかを記入。 1 年次の演習形式授業「大学での国語力」「ゼミナール入門」は担当教員がきめ細かい指導ができるよう、受講生を 20 名程度の少人数クラスで開講している。また通常 2・3 年次に履修する「ゼミナール」は教員と学生、または学生間の意見交換が円滑に行なえるよう、1 年次の秋に学生の希望に基づきゼミ選抜を実施し、各ゼミの各学年が 10 名程度になるよう構成している。 講義形式のうち、最も大人数となる必修科目（日本文芸学概論・日本言語学概論・日本文芸史Ⅰ）・コース別必修科目（文学概論・日本文芸史Ⅱ・日本言語史・日本文法論・日本文学史・文章表現論）は昼間・夜間それぞれ 1 コマずつ開講しており、受講者が最大でも 150 名程度になるよう配慮している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』60～76 頁 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』73～158 頁 ・ゼミ説明会配布資料	
⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・「文学部全体」のシート参照。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部全体」のシート参照。	
⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	はい ☒ いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・「文学部全体」のシート参照。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部全体」のシート参照。	
2.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S ☒ A B
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・成績評価の方法と基準は『2017年度文学部講義概要（シラバス）』に明示されており、またFD推進センターから授業ごとにGPCAおよび成績分布が通知されるので、各教員がそれを参考に成績評価を適切に行っている。 ・単位認定については、『2017年度文学部講義概要（シラバス）』に記載されている成績評価基準に則って、各教員が厳密かつ適正に行っている。 ・複数教員によるオムニバス科目「日本文学概論A・B」（必修科目）については、平常点（リアクションペーパーの提出を兼ねる）と、授業担当者が出題する定期試験の点数を5段階で数値化したものを、各学期末に学科会議で検討して、A+の割合やD評価の割合なども勘案しつつ、厳密かつ適正な単位認定を行っている。 ・1年生を10クラスに分け、複数の教員で担当する「大学での国語力」では、各クラスで成績評価の割合に不均衡が生じないよう、担当教員で連絡を取り合い、成績を確定している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本文学科会議資料	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい ☒ いいえ
（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。 留学生や転編入生の既修得単位認定については、申請のあった科目について学科会議で関係書類を精査して審議し、そののち教授会で承認を得ることで適切に行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S ☒ A B
（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。 成績評価は原則的に各教員の裁量に委ねられているが、たとえばオムニバス授業である「日本文学概論A・B」では適切・厳格な評価を行うために、成績評価基準について試験ごとに学科会議で検討を行っている。また「大学での国語力」「ゼミナール入門」についても、開講前と終了後に担当者によって検討会と反省会が行われているが、そのようなやりとりを通して、学科において共有すべき成績評価基準が明確になっていると考えられる。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料 ・日本文学科会議資料	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・学生の就職・進学状況については、キャリアセンターによる報告をすべての専任教員で共有することとしている。 ・各ゼミナール担当教員による学生からの聞きとり等で把握、集計している。 ・学部から配布されるキャリアセンターからの資料によって把握している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 特になし	
2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・成績分布や試験放棄については当該科目の担当教員がその実績を把握し、ケースによっては学科で対応策について議論している。 ・進級については、教授会回覧・配布資料により学科として実績を把握している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部教授会資料	
②学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組みの概要を記入 (取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。 2012 年度以降入学者については、必修科目「大学での国語力」2 単位・「日本文芸学概論 A・B」各 2 単位・「日本言語学概論 A・B」各 2 単位および選択必修科目「ゼミナール」卒業要件 8 単位のうち 4 単位分を修得しなければ 4 年次に進級できないという規程によって、カリキュラムの基礎的な内容における 3 年次までの学習成果を測定している。 学位授与方針「自らの研究や発想の成果を的確に伝えられる日本語の表現力を有している」については、卒業論文（文芸コースは制作）によって確かめられている。とくに優秀な卒業論文・作品は、学科発行雑誌『日本文学誌要』『法政文芸』に掲載されており、学科の教育成果が高水準にあることを示している。 また、大学評価室卒業生アンケートを活用し、教育内容に関する学生の満足度を確認している。2015 年度の結果によれば、当学科は「専門課程の教育」については「満足」「やや満足」の合計が 82.4%、「ゼミナール」については同合計が 89.6%で、全学集計のそれぞれ 80.0%、78.7%を上回っており、学生にも学習成果が実感できていることを示す指標の一つとして受け取ることができる。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『日本文学誌要』第 94 号 ・『法政文芸』第 12 号 ・法政大学大学評価支援システム 大学便覧リポート 17 卒業生アンケート(教育内容に関する満足度)	
③学習成果を可視化していますか。	S ☒ A B
【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入 (取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等)。 ・卒業論文・卒業制作には、4 年間の教育・学習によって蓄積された読解力・思考力・調査力・表現力・文章作成能力の全てが表れる。文学コースでは 2014 年度に、言語コースでは 2015 年度に卒業論文ルーブリックを作成し、大学での教育で身につけた資質・能力を測るための項目を設定して、4 段階評価にて学習成果の可視化を行っている。 ・優秀卒業論文・卒業制作は学科発行の学術雑誌『日本文学誌要』・文芸雑誌『法政文芸』に掲載し、学生の学習成果を公表している。 ・ゼミによっては、年度ごとに「ゼミナールレポート集」「卒業論文集」を作成し、学習成果を可視化している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本文学科卒業論文ルーブリック (文学コース、言語コース) ・『日本文学誌要』第 94 号 ・『法政文芸』第 12 号 ・ゼミ作成「レポート集」「卒業論文集」	
2.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。 ・日本文学科の教育の柱となっている「大学での国語力」「ゼミナール入門」は、学期末に担当者で反省会を行ない、各クラスの学生の達成度を報告した上で、次年度の方策を検討している。 ・オムニバス型式で講義を行なう「日本文芸学概論」A・B の成績評価は、学科会議において議論した上で決定している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」反省会資料	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S ☒ A B
【利用方法】 ※箇条書きで記入。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・アンケート結果は、各教員によって継続的に授業の改善に利用している。 ・学科で共有すべきアンケート結果は各教員が学科会議で報告し、問題があれば検討する。 ・シラバス必須項目「学生による授業改善アンケートからの気づき」を通して、各教員がアンケートの結果を学生にフィードバックしている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本文学科会議資料 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』73～158 頁

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2017 年度の ILAC 科目の発足とそれにとまう教養教育の充実化。	2. 3③

（３）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・新たな授業形態や授業の工夫等について情報共有し、導入を検討する。 ・学科内で実現可能なキャリア教育・就職支援の方策をさらに検討する。 ・教育の柱である「ゼミナール」での学習達成度を学科全体で把握する方法を検討する。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

3 学生の受け入れ

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

【学生の受け入れ方針】

日本文学科では、文学部の方針に準じ、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。能力・資質を的確に判断して学生を受け入れるため、多様な入試経路を用意し、日本文学科で学ぶにふさわしい者に広く門戸を開放する。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、自己推薦入試、社会人入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試等。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要となる基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 日本の文学・言語・芸能について深い関心を持ち、それらの研究や文芸創作に必要となる、知識・読解力・思考力・表現力全般にわたる、より多様でより奥深い人間的な学力・資質を有している。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

☒ はい ☐ いいえ

3.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

☒ はい ☐ いいえ

（～200 字程度まで）※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

2016 年度は入学定員充足率が 1.24 倍となり、入学者数が超過してしましたが、収容定員充足率は 2015 年度が 1.10 倍に対して、2106 年度は 1.09 倍と微減しており、全体の収容定員は調整できていると考えている。ただし、今後の入学者数に関しては、現状を鑑みた管理が必要となる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・法政大学大学評価支援システム 大学便覧リポート 29 入学定員超過率

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

定員充足率（2012～2016 年度）（各年度 5 月 1 日現在）

種別\年度	2012	2013	2014	2015	2016	5 年平均
入学定員	170 名	187 名	187 名	187 名	187 名	
入学者数	221 名	182 名	181 名	172 名	231 名	
入学定員充足率	1.30	0.97	0.97	0.92	1.24	1.08
収容定員	680 名	697 名	714 名	731 名	748 名	
在籍学生数	824 名	820 名	819 名	801 名	812 名	
収容定員充足率	1.21	1.18	1.15	1.10	1.09	1.15

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ①学部・学科における過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20 以上	1.25 以上
上記以外の分野	1.25 以上	1.30 以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告
すべての分野共通	0.9 未満	0.8 未満

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1.20 以上	1.17 以上	1.14 以上	1.10 以上
収容定員超過率	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上

3.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S ☐ A ☐ B ☐

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

それぞれの入試結果が判明したあとに学科会議で報告を行い、その都度審議・検討している。また、年度ごとの入試体制、推薦入試の在り方等についても志願者・指定校等の動向に注目し、入試小委員会および学科会議で定期的に検証を行っている。さらに初年次教育の反省会で、入試経路を踏まえ、入学者の学力を把握するための情報交換を行なっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・日本文学科学科会議資料

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

2016 年度入学者数は、2012 年度入学者数を上回ったため、今後数カ年にわたり、入学定員充足率を注視していく必要があ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

る。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

4 教員・教員組織

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

【求める教員像および教員組織の編制方針】(2011年度自己点検・評価報告書より)

日本文学科はその目的を実現するため、日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての先鋭で多様な研究を可能にする、自立的な研究者・専門家からなる教員組織を編制する。教員にはその学風の礎となる研究活動への積極的な取り組みと、その研究成果を生かした教育活動への熱意ある取り組み、また教員組織を効果的に機能させる学科運営および学部・大学運営への主体的な関与が求められる。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」および「日本文学科の人事についての内規」

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

・文学部全体のシートを参照。

・学科の責任体制としては以下のとおり。

(1) 日本文学の各時代および中国文学・言語学・日本の芸能を専門にする研究者・専門家をバランスよく配置、全員が専門科目の授業を担当し、学科主任を中心に組織的な教育を実施している。

(2) 1年次の教育については、初年次教育科目「大学での国語力」「ゼミナール入門」担当教員チームを組織し、チームリーダーを置く。

(3) 2年次以降については、文学・言語・文芸各コースのゼミ担当教員が中心となり、横断的に必要な役割を担う。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

☒ はい ☐ いいえ

(～400字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

専任教員全15名のうち、文学コース11名、言語コース2名、文芸コース2名という配分となっている。学生の各コースへの所属を示すゼミナールの数では文学コース12、言語コース4、文芸コース5となり、カリキュラムの体系性にふさわしい教員組織である。科目と担当教員の適合性は学科会議で判断した上で、人事委員会および教授会に審議・決定を委ねている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

(～400字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

日本文学科の専任教員の大部分は、人文科学研究科日本文学専攻および国際日本学インスティテュートで大学院教育にも携わっており、連帯はきわめて緊密である。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「日本文学科の人事についての内規」

・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2016 年度専任教員数一覧

(2016 年 5 月 1 日現在)

学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
日本文	14	1	0	1	16	9	5

専任教員 1 人あたりの学生数 (2016 年 5 月 1 日現在) : 50.8 人

③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

はい いいえ

【特記事項】(～200 字程度まで) ※ない場合は「特になし」と記入。

41～50 歳が 8 名とややバランスが悪いので、年齢構成に配慮し、2016 年度に定年退職者の補充人事として、30 代の教員を採用した。また 2017 年 3 月をもって、助教 (30 代) も退職したが、その補充人事も適切なバランスとなるよう配慮する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

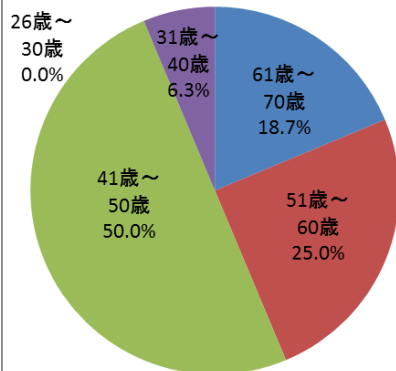
特になし

年齢構成一覧

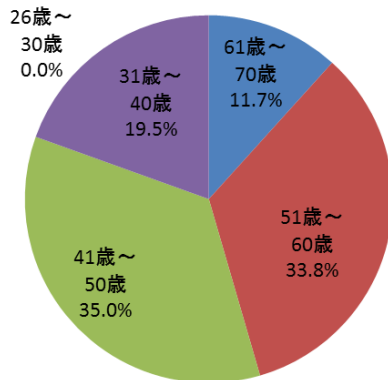
(2016 年 5 月 1 日現在)

年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳
2016	0 人	1 人	8 人	4 人	3 人
	0.0%	6.3%	50.0%	25.0%	18.7%

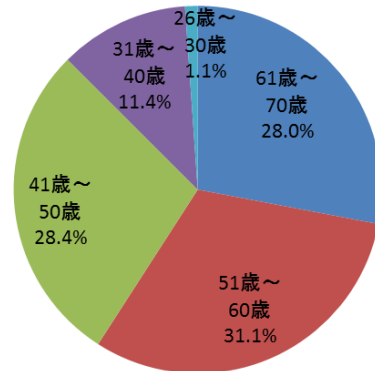
年齢構成比
(2016年度文・日本文学科)



年齢構成比
(文・日本文学科過去5年平均)



年齢構成比
(2016年度全学部平均)



4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

①各種規程は整備されていますか。

はい いいえ

【根拠資料】 ※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- ・「文学部人事委員会細則」
- ・「日本文学科の人事についての内規」

②規程の運用は適切に行われていますか。

はい いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】 ※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等 (非公開) を添付することでも可。

- ・募集については、原則として公募制を採用し、学科会議での発議を受けて学科主任、大学院専攻主任、採用しようとする教員の専門に関連する分野を専攻する複数の教員から構成される小委員会を組織し、応募者の業績を精査したうえで再び学科全体で審議を行う。最終的に面接等による審査を経て、学科として採用候補者を決定し、文学部人事委員会および教授会に審議・決定を委ねている。なお、文芸や芸能など特殊な分野において余人をもって代え難い人材を採用する場合には、公募によらず選考を行うことがある。
- ・任免については、学科会議で発議し、審議・承認のうえ文学部人事委員会および文学部教授会に審議・決定を委ねる。
- ・昇格については、学科会議で発議し、十分な教育経験および研究業績を有しているか審議を行う。承認された後、文学部人事委員会および文学部教授会に審議・決定を委ねる。

4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部 (学科) 内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・「文学部全体」のシート参照。
- ・教学改革委員による全シラバスチェックの報告をもとに、授業運営上、注意すべき問題や有益な事柄等については教員で情報を共有し、学科会議で討論等を行っている。
- ・学科独自の取り組みとして、必修科目「大学での国語力」・選択科目「ゼミナール入門」を担当する教員が学期開始前・学期末に検討会・反省会を行い、次年度の教育内容および方法の改善に結びつけている。

【2016年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・「文学部全体」のシート参照。
- ・文学部専任教員授業相互参観 公開科目数 7 科目
- ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会 2016 年 9 月 12 日実施（参加者 8 名）、2017 年 3 月 30 日実施（参加者 12 名）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部専任教員授業相互参観公開科目資料
- ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料
- ・日本文学科シラバス第三者チェック報告

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・1.2②に示したように、教員の年齢構成のバランスがやや悪い。今後、教員新規採用の際には、その点についても配慮する。
- ・2017 年度中に、人事に関する内規において、採用における基準を明確化する。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

5 学生支援

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☐ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。 ・卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の数については、教授会回覧・配布資料によって、学科として実績を把握している。 ・学科会議で、成績不振学生の状況についての報告を行ない、GPA の確認を行なっている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部教授会資料	
②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400 字程度まで）※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。 クラス担任制はとっていないが、1 年生を 20 名程度のクラスに分ける「大学での国語力」「ゼミナール入門」では、各クラス担当教員が出席状況を把握し、学生からの大学生活全般の質問を受けるなど、実質クラス担任の役割を担っている。2	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

年次以降は、同様の役目をゼミナール担当教員が担っている。 また学生が教員のオフィスアワーを利用しやすいように、新入生歓迎会時に、教員の研究室案内を行なっている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」クラス表 ・新入生歓迎会チラシ	
③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	S ☒ A B
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 ・1年次は「大学での国語力」「ゼミナール入門」、2年次以降は「ゼミナール」および「卒業論文」の担当教員が一人一人の学生に目を配り、細かく指導する場となっているため、成績が不振な学生に対しては担当教員が個別に対応している。 ・特に成績が不振な学生や不登校の学生については、学科会議で情報を共有し、学科として対応を協議する場合もある。 ・留学生に関しては、各授業担当教員と学科内留学生サポート小委員会が中心となり、対応する場合もある。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本文学科会議資料	
④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	S ☒ A B
（～400字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 2014年度以降、学科内に独自に設置した留学生サポート小委員会が中心になり、修学支援をしている。 1年次では「大学での国語力」「ゼミナール入門」クラスの担当教員、2年次以降はゼミ担当教員と小委員会が連携し、留学生の修学状況を把握している。問題が認められる場合には、学科会議で報告がなされ、学科として対応を行う。2015年度からは、1年次生に対して、小委員会が履修相談会を開催し、履修上や生活上の悩みに対応している。 また、学科会議で定期的に留学生のGPAを確認し、対応が必要であれば検討を行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・留学生サポート小委員会履修相談資料 ・日本文学科会議資料	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

成績不振学生の対応として、今後はGPA数値と関連させた綿密な対応を行なっていく予定である。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

IV 2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		教員・教員組織
現状の課題・今後の対応等		1.2②に示したように、教員の年齢構成のバランスがやや悪い。今後、教員新規採用の際には、その点についても配慮する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	2017年度教員新規採用に関する人事選考においては、学科教員の年齢構成のバランスも考慮して行い、年齢の点でも適切な採用候補者を選ぶことができた。
	質保証委員会による点検・評価	具体的にどのようにバランスを考慮し、どのような年齢の候補者を選定したかの検証が必要だが、教員新規採用に関する人事選考において、年齢構成のバランスを考慮し適切な候補者を選ぶことができた点は評価できる。
評価基準		教育課程・教育内容
現状の課題・今後の対応等		2015年度に、暫定版ではあるが、「カリキュラム・マップ」を作成した。作成作業の中で、

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		現行のディプロマ・ポリシーやカリキュラムポリシーと実際のカリキュラムとの間に、これまで認識しえなかった、やや不適合の点等を見出すことができたので、今後、是正していくための対策をとる予定である。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	従来の教育目標・3つのポリシーの見直しを行い、より適切で明確な形に修正した改訂版を作成することができた。
	質保証委員会による点検・評価	見出した不適合な点について、修正した改訂版を作成したことは評価できる。
評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		・新たな授業形態について、授業の工夫等について情報共有し、導入を検討する。 ・授業改善アンケート結果の、より有効な利用について検討する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	・複数の専任教員によりアクティブラーニングを行っている「大学での国語力」「ゼミナール入門」については、各学期前・後に担当者検討会・反省会を実施し、各教員が使用している教材や取り組みについて発表を行って情報共有し、授業改善に役立てた。 ・授業改善アンケートの有効な利用について、学科会議において、他学部他学科で行われている方法等を確認し、学科として取り組める利用方法について検討した。また学生の回答率アップが見込める方法についても検討を行った。
	質保証委員会による点検・評価	・各学期ごとの担当者検討会・反省会は高く評価でき、情報は共有できているが、「新たな授業形態の導入を検討する」ことまでは実現されておらず、反省点として明確にすべきである。 ・授業改善アンケートの有効な利用については、他学部他学科での方法を確認するなどの検討が高く評価できる。
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		大学評価室卒業生アンケート結果は学習成果の一つの指標となり得るが、やや主観的であるため、今後、GPA 等を利用し、より客観的な指標による成果の確認を検討する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	成績不振者に対する取り組みにおいて、GPA と履修単位数を指標とし、対策を講じた。また、自己推薦入試のあり方を検討する上で、当該入試入学者の年度毎の GPA を利用し、学習成果を確認するための資料の一つとした。
	質保証委員会による点検・評価	「卒業生に対する学習成果の確認」という課題に対しての結果としては不十分な点もあるが、成績不審者や自己推薦入試に関する検討は評価に値する。
評価基準		学生の受け入れ
現状の課題・今後の対応等		2016 年度入学者数は、2012 年度入学者数を上回ったため、今後数カ年にわたり、入学定員充足率を注視していく必要がある。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	2016 年度入学者の定員が超過したために学科の在籍者数が増加したが、学科会議で検討した結果、従来の授業コマ数で教育上、十分適切に対応できると判断し、コマ数増は行わないこととした。また、2016 年度入学者について、2 年次で入ることとなるゼミの選抜を適切に行うことができた。
	質保証委員会による点検・評価	従来の授業コマ数で適切に対応できるという根拠が曖昧だが、入学者増加の問題に対して適切な検討が行われている。また「入学定員充足率を注視した結果」については、今後も継続的な検証が必要であると考えられる。

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

※文学部全体の取り組み状況の評価を参照。

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照。

文学部英文学科

I 2012 年度認証評価における指摘事項（努力課題）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

II 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

文学部は 6 学科からなっており、文学部としての教育理念はあるが、各学科とも専門教育や教育方針の目標を独自に掲げている。その点、6 学科を一つの学部として総評するのは難しいが、全体としては少人数教育を重視し、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育を目指している点は高く評価できる。

「2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」については、全体としては、共通して少人数教育の重視とそれを目指した丁寧な指導が窺えるものの、このようなきめ細かな指導により教員個々の負担が重いのではないかという懸念が残り、その解消策の持続的な検討が今後必要であろうと思われる。

さらに、全般的に文学部の記述には、学生教育への努力は認められるものの、現状の問題点を可視化することが少ないように思われる。さらに一歩踏み込んで、さまざまな視点から文学部、そして各学科を客観的に見直し、問題点を明確にし、問題点への対策を実施することが期待されるとともに、よりきめの細かい教育成果の検証と測定を期待したい。他学部や、文学部の中でも新しい学科の好ましい対策や方策を、今後の文学部改革に導入していってもらいたいと期待している。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

2016 年度には文学部全体の課題として、英文学科でも 3 つのポリシーの見直し作業を行い、学科内において教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針がより明確に意識されることになった。2017 年度には、さらにカリキュラムマップ・カリキュラムツリーの改訂作業を行ない、英文学科の教育内容を精査しつつ学科教育の全体像を大学内外に向けて明示していく。

「2016 年度大学評価結果総評」における「現状の問題点の可視化」に関しては、データに基づいて諸問題を一つずつ客観視し、学科会議における議論を通じて検討する努力を継続していく。現在、入学時から 3 年次のゼミ所属時に至る期間のよりきめの細かい学生指導のあり方を求めているが、増コマが容易に認められない現状の制約下では即効的な解決が見つけられないでいる。数年来の学科入学者数の超過傾向に対しては、2 年次以降の主要な授業には増コマ要求によってかろうじて対処しているが、1 年次生については学期開始後における迅速な対応が困難であり、教員個々の負担増の問題と教育成果の問題との間で苦慮している。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

※文学部全体の対応状況の評価を参照。

III 自己点検・評価

1 内部質保証

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

- ・「文学部全体」の項目参照。
- ・文学部の質保証委員会と連携しつつ、問題があれば学科会議で審議し、改善策を同委員会および文学部教学改革委員会に諮り、最終的には教授会に提案して承認を得ている。
- ・大学評価委員会からの指摘事項についても、学科内で共有し、学科の努力で改善できる項目については改善策を検討し、それらの事項を質保証委員会に提案している。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

2 教育課程・学習成果

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

英文学科では、文学部全体のディプロマ・ポリシーのもと、以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

1. 論理的な日本語力・英語力とそれに基づく高度なコミュニケーション能力を備えている。
2. 批判的・論理的思考力とそれに基づく課題発見力・課題解決力を有している。
3. 自らの文化や言語を、グローバルな文脈の中で相対化・客観化して捉える能力を有している。
4. 英米文学・文化研究または科学的な英語学・言語学研究の基礎的な知識をもとに、一つの課題の解決のために、様々な知識を有機的に結びつける能力を有している。

①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

☒ はい ☐ いいえ

2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【教育課程の編成・実施方針】

英文学科では、文学部全体のカリキュラム・ポリシーのもと、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1 年次においては、「演習科目」として、基礎ゼミにおいて導入教育を行ない、同時に、概説科目を配置してさまざまな分野への導入となる「講義科目」を設置している。
2. 2 年次においては、学生各自の基礎的な英語力を向上させるための Speaking や Writing などの実践的な科目とともに、学問への興味をかき立てるように、少人数教育としての 2 年次演習および専門科目を配置している。
3. 3 年次においては、専門的な知識が深められるように、併設された専門科目と合わせて少人数制のゼミを配置している。
4. 4 年次においては、学生各自が選んだ研究テーマを卒業論文としてまとめられるように、担当教員の手厚い面談指導と添削指導を行なっている。
5. 上記の 1～4 と並行して、4 年間の学生生活を通して幅広い英語力の獲得や文化交流ができるように、海外の提携大学への短期・中期の留学制度を設定している。

①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。

☒ はい ☐ いいえ

②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※冊子名称やホームページ URL 等。

・『2017 年度文学部履修の手引き』『文学部案内』『法政英文 WEB』[http://eibun.ws.hosei.ac.jp]

③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。

☒ S ☐ A ☐ B

(～400 字程度まで) ※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。

学科会議では、学科の理念等が適切か、常に検証し、理念に見合った教育課程となるよう見直しの議論を行っている。改善の余地があれば、教学改革委員会や教授会に具体的に提案している。

【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

文学部全体の改訂作業とともに英文学科の〈理念・目的〉〈教育目標〉〈ディプロマ・ポリシー〉〈カリキュラム・ポリシー〉〈アドミッション・ポリシー〉の改訂を行なった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

第 7 回 文学部定例教授会回覧資料 P

http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/rinen.html

http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/policy/diploma.html

http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/policy/curriculum.html

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/policy/admission.html	
2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 英文学科で開設している授業科目は、「英語という言語が基礎にある学科」という特徴を活かし、英米文学、英米文化から英語学、言語学、英語教育学まで、幅広い領域を学べるように工夫されている。教育課程の編成・実施方針に基づき、段階を踏んで知識とスキルを積み重ねられるよう、現有スタッフと現コマ数の中で各専門分野に相応しい最大限の教育内容を提供している。 英文学科派遣留学制度 (SA) を設けて国際化に対応し、英米文学、英語学、言語学、英語教育学のいずれの分野でも、国際社会に貢献しうる能力を持った人材を育成している。 【根拠資料】 ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要 (シラバス)』『文学部英文学科 Study Abroad Program』(学生への配布パンフレット)	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系的性を確保していますか。	S ☒ A B
(～600 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修 (個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ (必修・選択等) 含む) への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。 高校から大学へ学生が円滑に移行するために必要な初年次教育を「基礎ゼミ」として 1 年次春学期に開設し、原則として全員が履修するように指導している。また、1 年次より学科の専門科目と ILAC 科目の双方が学べるように配慮がなされており、専門科目については、1 年次から履修可能な英米文学、英語学、言語学の基礎的な講義科目を経て、2 年次より専門的内容を持つ講義科目を履修できるように順次性を持った科目配置がなされている。同時に、英文学科生にとって不可欠である英語力を集中的に育成するために、2 年次より実践的な英語表現演習科目を複数履修できるように設置している。2 年次春学期には、3 年次からの所属ゼミにおける専門研究への導入科目として「2 年次演習」を設置し、原則として全員が履修するように指導している。3 年次からは、英米文学、言語学、英語学、英語教育学等の各分野から学生に所属ゼミを選択させ、学問の専門性をより高めながら、学生の能力育成を図り、4 年次に必須の卒業論文執筆に向けた学生指導がなされている。2015 年度には、学科のカリキュラムマップ・カリキュラムツリーを作成し、体系的なカリキュラム編成の実現に向けた改善を行なった。2017 年度にはカリキュラムマップ・カリキュラムツリーの改訂を行い、公開を予定している。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『カリキュラムマップ』『カリキュラムツリー』『ナンバリングに関する各種資料』	
③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 英文学科では、英米文学、英語学、言語学、英語教育学という諸分野にわたる科目が設置されている。1 年次春学期の「基礎ゼミ」では、大学生としての学習の基礎的な技能と教養が養成されるように工夫がなされ、1・2 年次で学ぶ専門科目では、ILAC 科目とも連動し、広い教養に学問の専門性が加味されることによる相乗的な効果が期待されている。さらに、英文学科では「総合科目」のうち一部の科目を学部専門科目の選択科目として、それ以外の「総合科目」を自由科目として卒業所要単位科目に認定している。また、文学を学ぶことによって自分や他者、世界についてのより深い理解が養われ、英語その他の言語を科学的な手法で分析する英語学、言語学を学ぶことによって論理的思考力が培われる。さらに文学部では、学部共通科目として、社会倫理の涵養を目指した「現代のコモンセンス」が開講されている。 上記のように、英文学科においては、異なる諸分野の学問に接することによって、高い倫理性と論理性を備えた総合的な判断力を持ち、かつ深い教養と豊かな人間性を備えた人間が育成されうる教育課程が編成されている。 【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。「文学部全体」のシート参照。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要 (シラバス)』『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要 (シラバス)』	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。 高校教育と大学教育を接続する役割を持つ「基礎ゼミ」を1年次春学期に配置している。「基礎ゼミ」は、大学という場についての考え方と、大学における学習の仕方に関する基本事項(文章読解力・資料探索技術・論理的思考力・レポート作成の基本・プレゼンテーション能力等)を習得するための科目である。また、専任教員がその全クラスを担当することによって、学科が入学時の個々の学生の状況を適確に把握することが可能となっている。「基礎ゼミ」は必修科目ではないにもかかわらず、学科の教育指導によりほぼすべての新生が履修しており、2013 年度 100%・2014 年度 98%・2015 年度 100%・2016 年度 97%・2017 年度 97%の履修率である。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要(シラバス)』	
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 ILAC 科目には、英語および諸外国語科目が設置されている。また、英語強化プログラム(ERP)、グローバル・オープン科目、交換留学生受入れプログラム(ESOP)のうちの英語開講科目が履修可能になっており、英文学科ではそのうちの一部の科目を学部専門科目の選択必修科目として、それ以外の科目を自由科目として卒業所要単位科目に認定している。 英文学科の専門科目は、そもそも国際性を涵養する科目がほとんどであるが、「比較文化論」「比較文学」や2016 年度からの新設科目として“Comparative Culture”といった幅広い視点を養う科目を学生に提供している。 また、英文学科では、さらなる国際性の涵養のために独自の派遣留学制度(SA)を設け、1年次からの参加を積極的に勧めている。このSA制度には、米国フォントボン大学[長期:① 8月中旬～12月中旬(約4ヶ月)② 8月中旬～3月中旬(約7ヶ月)8名以内]、アイルランド・ダブリン大学[夏季短期:8月上旬～8月下旬(約3週間)25名以内・長期:① 9月上旬～11月下旬(約12週間)② 9月上旬～3月中旬(約22週間)10名以内]という3種のプログラムがある。プログラム終了後に毎年開催されるSA報告会には、SA参加学生のみならず多くの学生が参加し、学科全体にも大きな成果をもたらしている。留学先で修得した単位は、学科及び学部の審議を経た上で、SA認定科目として認定される。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』(学生への配布パンフレット)	
⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 ILAC 科目については「文学部全体」の項目参照。 文学部共通科目「文学部生のキャリア形成」は、キャリア形成への意識を高めるために本学部卒業生による講義がオムニバス形式で実施されており、英文学科の卒業生も講師として招いている。 英文学科でも、2年次生を対象としたゼミ紹介のイベントにおいて、卒業生に大学のゼミにおける研究と現在の仕事とを関連付けた講演を依頼するなどして、在校生に対して実践的に役立つキャリア教育を行っている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『共通科目各種資料』(共通科目運営委員会)「Links 総会プログラム」 [http://eibun.ws.hosei.ac.jp/archives/599]	
2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S ☒ A B
【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。 - 全授業科目について、授業のテーマ・到達目標・授業概要と方法・授業計画等を『文学部講義概要(シラバス)』において公開している。 4月に「新生オリエンテーション」「在学生ガイダンス」において全学生を対象に履修指導を実施している。D・E評価とGPA値との関連に関して、履修しないことを決めた科目の取り消しについても補足説明を行なっている。 5月に全専任教員が分担して1年生全員を対象にしたグループ単位の「新生面談」を行ない、履修状況を把握し、必要に応じて個別に追跡調査を行っている。 11月～12月に、1年生を対象に「2年次演習」説明会、2年生を対象にゼミ制度説明会、3年生を対象に卒論説明会を実施するなど、各学年に適切な履修指導の説明会を実施している。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

個々の学生の履修上の問題については、授業（講義・演習）での状況を学科会議で話し合い、情報を共有し、学科として対応している。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』『新入生オリエンテーション』『在学生ガイダンス』配布資料		
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	☒ S	A B
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 文学系、言語系ともに、教育方法および学習指導は適切に行なわれている。言語系、特に実験系の研究分野については、実験室や設備が整備されていないという施設面の事情による不十分さがあるが、実験法やデータ分析の方法については演習科目、卒論指導などで適宜、指導している（また、そのために情報センター科目の中に科目を新設予定）。 1 年次の「基礎ゼミ」、2 年次の「2 年次演習」、3 年次からの選抜制度に基づくゼミ所属制度により少人数教育が確立しており、4 年次の卒業論文指導と併せて、学生と教員の距離を近づけることにより個々の学生に適合した学習指導が行われている。また、剽窃等の研究倫理についての指導も 1 年次より適宜継続的に行っている。 教員のオフィスアワーを積極的に活用する学生が多く、またゼミ合宿を通じて、専任教員が個々の学生の学習状況を丁寧に把握することが可能になっており、講義においても概ね双方向型授業が実現している。 新入生に対しては、5 月に全員を対象にしたグループ単位の「新入生面談」を行ない、大学における学習上の諸問題について専任教員が直接に指導する場を設けている。また、学科の学生団体 Links 主催の「新入生歓迎会」には専任教員も参加し、新入生・在学生・教員の交流の場となっている。		
【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 従来の言語系の実験・調査法の方法論的な学習指導をより系統化して行なうために、2016 年度には情報センター科目として「言語データ処理コース」の開設を決定しており、2018 年度からの開講を目指して準備作業を行なっている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』『卒業論文、レポートを書くにあたって - 剽窃（plagiarism）についての注意』『新入生歓迎会のチラシ』（ガイダンス配布資料）		
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S	☒ A B
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 時間外に行うべき学習活動（準備学習等）は、シラバスに具体的に明示している。授業支援システムなどを利用して、受講者に授業の資料を公開している。また、リアクションペーパーを活用して学生の理解度や反応を把握し、次の授業の内容に反映させている。また、毎回の授業に必要な事前学習を予告する、授業内発表を担当させる、理解度チェックのための小テストを行う等により、学生の予習・復習を動機づけている。ゼミによっては、グループ発表の機会を設けており、学生がグループごとに自主的に学習する契機となっている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』		
④1 年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	☒ はい	いいえ
【履修登録単位数の上限設定】※1 年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位数の上限を記入。 「文学部全体」のシートを参照。 【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 『2017 年度文学部履修の手引き』		
⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S	☒ A B
【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 「英語表現演習（speaking）」「英語表現演習（writing）」のうち 6 つをクラス指定の授業として設定し、クラス指定制度の徹底化を図り、履修希望学生全員に受講を保証している。 - 上記クラス指定の授業は 26～30 名程度の少人数授業が基本であり、1 人 1 人が意見表明できる環境作りによってアクティブラーニングが実践されている。また、所属ゼミ科目に相当する演習科目（「英米文学演習」「英語学演習」「言語学演習」「英語教育学演習」）においてもアクティブラーニングの取り組みが行われている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 特になし		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

⑥それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S ☒ A B
(～400字程度まで) ※どのような配慮が行われているかを記入。 「文学部全体」の項目参照。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入(取組例：執行部(〇〇委員会)による全シラバスチェック等)。 ・教学改革委員会委員による監修のもとで、専任教員全員が英文学科専門科目の全シラバスを割当制でチェックし、第三者チェックの体制を整えている。 ・シラバスチェックの結果を担当教員にフィードバックし、期間を設定した上で修正を加える体制を整えている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「2016年度第7回教学改革委員会 資料2」「2016年度第10回文学部定例教授会 議事録」	
⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入(取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等)。 ・学期末に実施される全学の「学生による授業改善アンケート」の確認項目により検証されている。 ・学生からの授業改善アンケートを学期末に限らずに任意で実施するシステム(期首・期中アンケート)により、学期途中でも随時、検証されている。 ・相互授業参観の実施によりつねに検証を行うことが可能な体制を維持している。 ・シラバスの授業計画は、各教員が授業の進み具合やリアクションペーパーなどに基づき、授業後に調整することもある。学生の理解度も把握しながらの授業展開が望ましいと考えている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S ☒ A B
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・各科目の成績評価基準をシラバスに明記している。 ・シラバス記載項目に基づき、各教員が適切に成績評価を行っている。 ・単位認定の意味については、ガイダンスまた各教員の授業において説明している。 ・評価結果に関する問い合わせの制度について学生に説明している。 ・成績評価に訂正の必要が確認された場合には、調査の上、教授会での報告・承認を経て訂正が行なわれる。 ・卒業論文の成績評価については、口頭試問を実施し、適切な評価を行なっている。 ・オムニバス形式の授業においては、担当者間で協議し公正な評価を下している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017年度文学部講義概要(シラバス)』	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部(学科)内基準を設けて実施していますか。	☒ はい ☐ いいえ
(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。 転編入者の既修得単位の認定、派遣留学、認定留学、英文学科派遣留学制度(SA)参加者の単位認定制度が確立しており、学科会議での審議後、教授会での承認手続きを行なっている。 他大学の単位認定については、学科会議でシラバスを慎重に検討した上で教授会に提案している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S ☒ A B
(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。 シラバスの成績評価基準欄に、試験、課題などの評価率を予め具体的な割合(%)で学生に明示し、透明性を保持しながら厳格に成績評価する方策をとっている。卒業論文の評価についても、必要に応じて複数の教員で口頭試問する制度を整備して厳正に行なっている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☐ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・学生の就職状況（実数・業種）などについては、キャリアセンターによる報告等をもとに、学部単位および学科単位で把握しており、毎年、学科会議において業種ごとの実数・経年的変化等の詳細について情報を共有している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部教授会資料 キャリアセンター作成資料	
2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☐ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・成績分布については「文学部全体」の項目参照。 ・学生の進級状況については学部・学科で把握し、3月の教授会で承認される。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「2016 年度第 5 回文学部定例教授会 議事録」「2016 年度第 10 回文学部定例教授会 議事録」「2016 年度第 11 回文学部定例教授会 議事録」	
②学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400 字程度まで）※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等）。 学生の学習成果は一律に数値化することはできないが、シラバスに明記した「成績評価基準」に基づいて適切に評価を行なっている。英文学科では、ゼミにおいて観察される専門分野の知識、ディスカッション能力・プレゼンテーション能力の向上や、卒業論文に表れる専門分野の知識、問題発見能力、情報収集能力、批判的読解力、論理的思考力、文章作成能力を判断指標として用いている。とりわけ、学習成果が顕著に表れる「卒業論文」については、ゼミでの教育・指導、第一稿の予備提出、添削指導と最終的な論文の完成、口述試験による学習成果の確認と評価という綿密な個人指導のプロセスを経て、執筆過程を詳細に把握した上で評価がなされている。現段階では、教育目標に沿った成果が上がっていると考えられる。また、学生の学習意欲の向上のために GPA 値がその動機づけとなるような配慮をしている。 なお、優秀な卒業論文は、学科の学生団体が発行する学内誌『SMILE』に毎年平均 2 編の論文が掲載されており、学科の学習成果の水準が公開されている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・英文学科誌『SMILE』 「卒業生アンケート」	
③学習成果を可視化していますか。	S ☒ A ☐ B ☐
【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。 ・必修科目としての卒業論文が最も端的に可視化された学習成果の集大成である。 ・卒業論文の指導過程で原則として 11 月に卒業論文第一稿が提出される。 ・各分野の卒業論文のうち優秀論文が年度末発行の学内誌『SMILE』に掲載される。 ・学科生の団体 Links において、学生がゼミでの学習状況等の発表を行なっている。 ・学科 SA 報告会において海外留学の成果発表が行われる。 ・専門科目の演習において課題発表をしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・英文学科誌『SMILE』 『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配布パンフレット）	
2.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400 字程度まで）※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。 ・時間割編成時期に、兼任講師が適切な教育成果を上げているかどうかを学科会議において検討した上で、次年度の担当を決定している。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・同一科目を複数の担当者で受け持っている場合は（例：基礎ゼミ・2年次演習など）、相互に教育成果を確認し、問題があれば学科会議において検討している。 ・4年間の教育成果の可視化として卒業論文の提出を必修化しており、教員はその評価を通じて教育成果の定期的な検証を行なっている。 ・優れた卒業論文は、英文学科生で構成される団体 Links の発行する英文学科誌『SMILE』に掲載し、学科における教育成果を学生と教員間で常に共有し、また全教員によるさらなる教育内容の改善に役立てている。 ・文学系・言語系の教員がそれぞれ集まって、FDミーティングを開催している。2016年度は12月14日に3時間ほどのミーティングを行ない、授業運営、授業改善、論文指導、論文評価のあり方、今後の指導の方針、指導に必要な個々の学生の勉学・生活情報などについて、非常に有益な情報交換、意見交換の機会を持った。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・英文学科誌『SMILE』『2016年度第9回教学改革委員会（拡大）資料11-2』	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S ☒ A B
【利用方法】※箇条書きで記入。 ・「文学部全体」の項目参照。 ・原則として、全科目について全学の「学生による授業改善アンケート」を実施し、科目によっては教員独自の授業アンケート（面談による聞き取り調査を含む）も実施している。 ・アンケート結果を教員に適宜フィードバックし、翌年度のシラバスに反映させて授業の改善につなげている。 ・シラバスの「学生による授業改善アンケートからの気づき」欄の記入により、問題点の把握、授業改善の具体策の提示を行なっている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2017年度からのILAC科目の発足による教養教育の充実化。	2.3③
・2018年度の「言語データ処理コース」の開講を決定。	2.4②

（3）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・学科教育の現状が含む問題点の可視化・共有と改善方策の検討 ・カリキュラムマップ・カリキュラムツリーの改訂と年度内公開
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

3 学生の受け入れ

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。
【学生の受け入れ方針】 英文学科では、文学部全体のアドミッション・ポリシーのもと、以下の点を重視し、一つの固定した視点にとらわれずに様々な視点から物事を学ぼうという意欲と能力のある受験生の入学を認める。 ※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、付属校推薦入試、指定校推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、国際バカロレア自己推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試。 1. 英語への関心、文学・演劇作品への興味をもっている。 2. 外国語教育や言語理論の研究に必要な科学的思考を養う意欲を持っている。 近年採用した国際バカロレア自己推薦入試では、一定の能力を持ちつつ多様な個性をそなえた受験生の入学を認めてい

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

る。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

はい いいえ

3.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

はい いいえ

(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

在籍学生数の定員の超過・未充足に対しては、適切に把握し対応している。クラス指定により事実上の必修科目として設定されている演習科目では、学生数に応じて適切なクラス数を準備している。大幅に定員を超過して学生が入学した年度には、増コマ要求によってクラス数を調整し適切な学生数の授業運営を心がけている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「2016 年度第 5 回教学改革委員会 回覧資料 R-3」

定員充足率（2012～2016 年度）

(各年度 5 月 1 日現在)

種別\年度	2012	2013	2014	2015	2016	5 年平均
入学定員	115 名	126 名	126 名	126 名	126 名	
入学者数	119 名	117 名	143 名	132 名	144 名	
入学定員充足率	1. 03	0. 93	1. 13	1. 05	1. 14	1. 06
収容定員	460 名	471 名	482 名	493 名	504 名	
在籍学生数	510 名	515 名	538 名	545 名	577 名	
収容定員充足率	1. 11	1. 09	1. 12	1. 11	1. 14	1. 11

※ 1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

①学部・学科における過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率の平均

②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1. 20 以上	1. 25 以上
上記以外の分野	1. 25 以上	1. 30 以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告
すべての分野共通	0. 9 未満	0. 8 未満

※ 2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1. 20 以上	1. 17 以上	1. 14 以上	1. 10 以上
収容定員超過率	1. 40 以上	1. 40 以上	1. 40 以上	1. 40 以上

3.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S A B

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

学生募集は大学全体で行なわれており、「文学部全体」の項目参照のこと。

入学者選抜の結果については学科会議で情報を共有し、入学試験の種類とその定員配分は学科会議で協議の上で決定している。入試経路別の学生の成績については、学科会議で情報を共有し、検討している。近年導入した「英文学科グローバル体験公募推薦」制度によって入学した学生の学習状況をフォローし、学科会議で報告して全員で情報を共有している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

55

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

4 教員・教員組織

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	
【求める教員像および教員組織の編制方針】（2011年度自己点検・評価報告書より） 本学科の教員は、学科の理念・目的を実現するため、またさまざまな能力やバックグラウンドを持つ学生への教育指導に対応するため、さらには後の項目で述べる教育目標ならびにディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを踏まえて研究・教育に取り組めるよう、専門分野における高度な知識や研究能力、研究実績、教育技能を有することはもちろんのこと、学生の全人的な成長にも配慮できる人間性と高いコミュニケーション能力を持つことが求められる。 教員組織としては、社会や時代の変化によって変わっていく学生の教育・研究ニーズに対応できるように、幅広い専門がカバーできるような教員集団であることが望ましい。しかしながら、そうした現在の教育ニーズは必ずしも専任教員だけでカバーできるものではない。したがって、高い専門性を備えた専任教員の保持とともに、学内・学外での研究・教育者の人材確保のためのネットワークを有する教員組織をつねに目指している。	
①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【根拠資料】 ※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。 ・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」「英文学科 人事に関する内規」	
②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】 ※箇条書きで記入。 ・学部執行部の構成については、「文学部全体」の項目を参照。 ・英文学科専任教員は、交代で学科主任を担当し学科全体の教育体制を認識・把握している。 ・英文学科主任は、定期的に学科会議を召集・開催し学科の運営について適宜審議を行っている。 ・英文学科会議では、必要な審議、承認、報告を行い、学科の教育全体を専任教員が共有している。 ・英文学科主任は、文学部学科主任会議・文学部教学改革委員会に出席し、学部・学科の審議報告案件を学科に持ち帰り、情報を共有している。 ・英文学科では、派遣留学制度（SA）や英文学科生で構成される組織（Links）の指導などの個別の役割ごとに担当者を決めており、それらの多様な委員を交代で務めることによって、個別の職掌を理解・遂行すると同時に全体的・俯瞰的視野も得られるようにしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部各種委員一覧」	
4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	
①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。	☒ はい ☐ いいえ
（～400字程度まで）※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

織の概要を記入。

2017年4月1日現在、専任教員15名のうち、専門科目を中心に担当する教員が10名、基礎科目を中心に担当する教員が5名である。また分野的には、英米文学7名、英語学・言語学4名、英語教育学1名、比較文化1名、ドイツ文学・比較文学2名という配分である。これらの専任教員の担当科目は、基礎科目・総合科目の英語や英語圏の文化・社会に関する科目、ドイツ語やドイツ語圏の文化・社会に関する科目、また専門科目に関しては、幅広い分野の主要講義科目のみならず、1年次の「基礎ゼミ」や2年次の「2年次演習」に加え、3・4年次の演習（ゼミ）まで、学科の掲げる全分野にわたっている。このため、学生はどの分野を選んでも卒業論文の指導を受けることができる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『2017年度文学部履修の手引き』『2017年度文学部講義概要（シラバス）』『英文学科 人事に関する内規』

②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

（～400 字程度まで）※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

英文学科・英文学専攻の専任教員人事は個別にはではなく合同でおこない、学科専任教員採用人事の際には、将来の大学院担当を考慮する。また、大学院の授業担当専任教員は英文学科専任教員から選ばれる。現在、15名の専任教員全員が学部教育に携わり、そのうち11名が大学院英文学専攻の教員として授業ならびに専攻の運営に携わっており、学部教育と大学院教育の連繋が十分に図られている。それに加えて、専任教員が担当する大学院科目を学部の3・4年生も履修できるようにしており、学部生は大学院入学前から大学院の授業を体験することができる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『2017年度文学部履修の手引き』

2016年度専任教員数一覧

（2016年5月1日現在）

学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
英文	10	3	0	2	15	7	4

専任教員1人あたりの学生数（2016年5月1日現在）：41.2人

③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【特記事項】（～200字程度まで）※ない場合は「特になし」と記入。

2016年度に30代教員1名、2017年度に30代教員1名を新規に採用し、年齢構成のバランス改善を図った専任人事を行った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

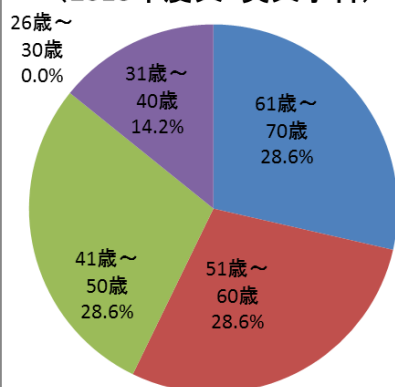
・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』

年齢構成一覧

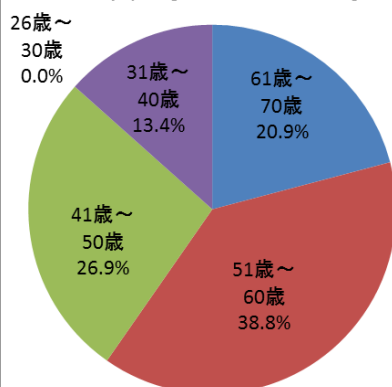
（2017年5月1日現在）

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2017	0人 0.0%	3人 20.0%	3人 20.0%	3人 20.0%	6人 40.0%

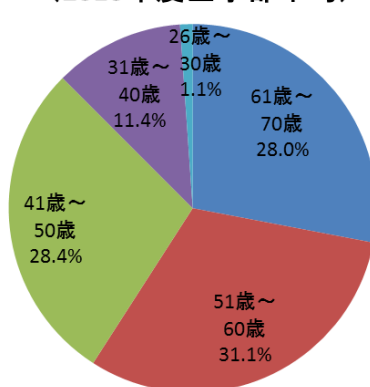
年齢構成比
（2016年度文・英文学科）



年齢構成比
（文・英文学科過去5年平均）



年齢構成比
（2016年度全学部平均）



※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。	
①各種規程は整備されていますか。	はい いいえ
【根拠資料】 ※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。 ・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」「英文学科 人事に関する内規」	
②規程の運用は適切に行われていますか。	はい いいえ
【募集・任免・昇格のプロセス】 ※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。 ・教員の募集は公募を原則としている。 ・公募文書の内容や伝達媒体は学科会議の承認を必要とし、また人事委員会、教授会でも報告、承認を得ている。 ・人事選考に際しては、専任教員から構成される人事選考委員会を設け、規定・内規に沿って選考を進めている。 ・審査においては、最終選考に際して模擬授業を課し、それとともに面接と業績審査を厳正に行なって、候補者の研究者および教育者としての資質を考慮している。模擬授業と面接では、学科の専任教員全員が参加する仕組みを作り上げている。 ・昇格に関しては、学科会議において内規に照らして有資格者を推薦し、人事委員会で検討されたのち、教授会で投票によって承認される。	
4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。	S A B
【FD活動を行うための体制】 ※箇条書きで記入。 ・英文学専攻・英文学科独自のFD活動として、各学期後に文学系と言語学系とに分かれて適宜FDミーティングを開催し、授業運営、授業改善、論文指導、論文評価のあり方、今後の指導の方針、指導に必要な個々の学生の勉学・生活情報などについて、非常に有益な情報交換、意見交換を行なっている。 ・教育開発支援機構FD推進センター開催の研修会・セミナー等にも各教員が必要に応じて参加している。2016年度は、新任教員FDセミナーに新任の助教が出席したほか、教授1名が話題提供者として参加し、授業で実践している工夫を紹介した。	
【2016年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。 ・英文学科FDミーティングの開催（12月14日、80年館6階資料室、春・秋学期授業の報告と反省、14名）。 ・新任教員FDセミナーへの参加（7月9日、外濠校舎4階S407教室、「私の授業の工夫」、学科からの参加は2名）	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「英文学科FDミーティングプログラム」「2016年度第9回教学改革委員会（拡大）資料11-2」	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

5 学生支援

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☐ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・卒業については、各学生の卒業所要単位数を学科会議において確認し、卒業判定は教授会において所定の手続きを経た上で適切になされている。 ・退学、留級については、学科会議・学部教授会でその実態を正確に把握し、対策が必要な場合には学科会議で適切に検討がなされている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「2016 年度第 5 回文学部定例教授会 議事録」「2016 年度第 10 回文学部定例教授会 議事録」「2016 年度第 11 回文学部定例教授会 議事録」	
②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400 字程度まで）※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。 原則的に英文学科の全学生が履修する科目 [1 年次：「基礎ゼミ」、2 年次：「2 年次演習」、3・4 年次「所属ゼミ」] を設置することで、4 年間にわたって専任教員が各担当学生の学習態度、意欲、成績を継続して把握し、管理できる体制を整えており、学科会議において情報を共有し対策を検討している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	S ☐ A ☒ B ☐
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 ・「新入生オリエンテーション」「在学生ガイダンス」において学科生全員に英文学科作成文書「成績不振者について」を配布し、成績不振の場合には、保証人に通知の上、面談を行なう旨の説明を行なっている。 ・すべての科目にまたがって欠席などが多い学生に対しては、学科主任、ゼミ担当教員等が個別に呼び出し、面談するなど状況に応じた対応を実施し、学科会議においてその情報を共有し改善策などを検討している。場合によっては、保護者・保証人と話し合い、学生相談室との連携も図っている。 ・教学改革委員会においても各学科における成績不振者の状況について情報共有が行われている。 ・2015 年度から成績不振の学生に対して大学が全体として行う学修指導制度が導入されている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「成績不振者について」（新入生オリエンテーション・在学生ガイダンス配布資料）「2016 年度第 7 回教学改革委員会 議事録」	
④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	S ☐ A ☒ B ☐
（～400 字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 外国人留学生については、各授業の担当者が修学状況を把握して、勉学上または心理上の問題については、グローバル教育センター事務局国際交流課や学生相談室などを紹介している。また、大学全体の留学生受け入れ体制についても説明している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・2017 年度中に、人事に関する内規において、採用における基準を明確化する。

【この基準の大学評価】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

IV 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		教育課程・教育内容
現状の課題・今後の対応等		・経済的負担のより少ない地域（例：アジア圏など）への SA プログラムの展開の可能性を検討する準備を始める。 ・SA への関心を維持するための広報活動を続ける。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	・今年度の新規専任教員人事として、英語・日本語に堪能な台湾出身の優秀な研究者を助教として採用したことにより、次年度以降に、英文学科として新しい SA プログラムの展開を準備するための基盤を整備した。 ・学生に対する SA 広報活動は、SA 委員を中心として例年通り行なった。
	質保証委員会による点検・評価	新しい SA プログラムの展開を見越して、新任教員人事の手続きがなされたことは評価できる。
評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		現在のレベルを維持するための方策を考案する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	・昨年度に引き続いて、次年度シラバスの第三者チェックを専任教員全員で相互に分担して行なった。また、昨年度に続いて学科内で文学系・言語学系に分かれて専門領域に関する FD 懇談会を開催し、さらに学科会議において定期的に話し合いの機会を持つことで、教育方法の検討が継続的に行なわれた。 ・カリキュラムマップ作成に関する全学的な FD ワークショップに学科の専任教員 2 名が参加し、よりキメの細かい教育方法に関する知見を学科内で共有するとともに、今後のカリキュラムツリー・カリキュラムマップの作成に向けた準備の有益な機会とした。
	質保証委員会による点検・評価	FD 懇談会の開催や FD ワークショップへの参加など、教育方法検討の取り組みが評価できる。
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		現在、ほぼ理想的な状況だが、現状を維持しつつ新たに学習の成果を発表できる場を考案したい。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	現在すでにほぼ理想的な状況であり、今年度も、学科内冊子『SMILE』に今年度提出された全卒論題目および優秀論文の掲載を準備している。その現状を維持しつつ、新たに学習の成果を発表できる場を考案することを目標としたが、この点についてはとくに新しい発展はなく、今後の課題として残されている。
	質保証委員会による点検・評価	学科内冊子での成果掲載がなされ、現状で問題は無い。成果発表の新たな場についてはまた今後に期待したい。
評価基準		学生の受け入れ
現状の課題・今後の対応等		2016 年度の英文学科への入学人数は 20 名の定員超過を起こしているため、次年度以降、学年進行とともに、増コマ要求等により、演習科目で小人数教育が適切に行われるように対応する必要がある。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	今年度入学人数 20 名程の定員超過に対応して、増コマ要求等によって継続的に対処することを目標としたが、次年度のクラス編制において「二次演習」を 1 コマ増とすることで、例年通り 1 クラス 20 名の少人数教育の態勢を確保した。同様に、必要な教育レベルを維持するために、次年度「英語表現演習 (Speaking)」「英語表現演習 (Writing)」のうちのクラス指定科目をそれぞれ 1 コマ増とすることで定員超過に対する対応を行なった。
	質保証委員会による点検・評価	定員超過に対して、増コマ処置を行ったことは、高く評価できる。
評価基準		学生支援
現状の課題・今後の対応等		2015 年度から開始された成績不振者への対応をより向上させる。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	・成績不振者への対応に関して、今年度は該当学生への電話・メール連絡による呼び出し、個人面談、集団面談、保証人への連絡、保証人を交えての面談、事務との連携による指導・進路相談・単位取得や履修取り消し手続きの説明、学生相談室の案内等、様々な対応を試

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		み、個人のニーズに合わせた非常にキメ細やかな指導を行なった。 ・連絡の困難な学生達については、該当者が呼び出しに応じるまで様々な手段によって根気強く本人との接触を試み、成績不振者ほぼ全員との面談を行なった。
	質保証委員会による点検・評価	成績不振者に対し、面談等様々な手段によって接触を続け、ほぼ全員に対応できたことは、高く評価できる。

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

※文学部全体の取り組み状況の評価を参照。

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照。

文学部史学科

I 2012 年度認証評価における指摘事項（努力課題）

該当なし

II 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

文学部は 6 学科からなっており、文学部としての教育理念はあるが、各学科とも専門教育や教育方針の目標を独自に掲げている。その点、6 学科を一つの学部として総評するのは難しいが、全体としては少人数教育を重視し、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育を目指している点は高く評価できる。

「2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」については、全体としては、共通して少人数教育の重視とそれを目指した丁寧な指導が窺えるものの、このようなきめ細かな指導により教員個々の負担が重いのではないかという懸念が残り、その解消策の持続的な検討が今後必要であろうと思われる。

さらに、全般的に文学部の記述には、学生教育への努力は認められるものの、現状の問題点を可視化することが少ないように思われる。さらに一歩踏み込んで、さまざまな視点から文学部、そして各学科を客観的に見直し、問題点を明確にし、問題点への対策を実施することが期待されるとともに、よりきめの細かい教育成果の検証と測定を期待したい。他学部や、文学部の中でも新しい学科の好ましい対策や方策を、今後の文学部改革に導入していってもらいたいと期待している。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

理念・目的の作成・周知では、所定の目標を達成している。

教員・教員組織では、全教員が通学・通信・大学院の教育・運営と二つの入試工房の業務に従事し、一部教員は ILAC や国際日本学研究所の業務も負担している。2015 年度に任期付助教 1 名を採用したが、助教には校務負担に大きな制約があり、直面する危機的状況は解決していない。学位論文指導のコマ化も含め、過重負担の解決を継続的に法人に求めていきたい。

教学では、大学院科目の履修を学部生にも可能にし、成果を収めている。旧教職課程科目「日本史（教職）Ⅰ・Ⅱ」「外国史（教職）Ⅰ・Ⅱ」のうち、2017 年度に開講される 4 科目 8 単位について、新たに史学科 1 年生も「日本史序説Ⅰ・Ⅱ」「東洋史序説」「西洋史序説」の科目名称で受講できることとし、旧教職課程科目としては廃止になる 2018 年度以降も、史学科専門科目として引き続き開講することとした。

国際性の涵養を目指し、これまでに中国の龍門石窟と学術・教育協定を結んできたが、2016 年度には新たに復旦大学文物博物館学系や少林寺との学術協定を締結した。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

※文学部全体の対応状況の評価を参照。

III 自己点検・評価

1 内部質保証

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

- ・「文学部全体」のシート参照。
- ・文学部全体の規程により、学科内に内部質保証委員を置き、文学部質保証委員会と連携しつつ、問題があれば学科会議で審議して、改善策を同委員会や文学部教学改革委員会に諮り、最終的には教授会に提案して承認を得るシステムとなっている。
- ・学科内では、学科会議を定期的に開催しているほか、2011 年度からは教育課程や教育内容等に特化して話し合う特別学科会議を年 2 回開催することとしている。
- ・文学部質保証委員会に史学科からは委員 1 名が出席し、文学部教学改革委員会には学科主任を含む委員 2 名が出席している。これらを通じて学部全体と学科の連携が確保されている。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

2 教育課程・学習成果

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

史学科は、所定のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対し、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 国際的な視野と、政治・経済・社会・文化などにわたる幅広い歴史知識を得ることによって、現代社会の問題を見る眼を養い、未来を展望することができる。
2. 史料の批判的考察から体系的理解に至る歴史学の分析方法を習得して思考力・判断力を培い、自立的に問題を発見・追究・検証することができる。
3. 発表・討論の訓練を通して、自分の意見を論理化・体系化して相手に伝え、かつ相手の意見を理解することができる。
4. 次世代の教育に歴史学の成果を生かし、また、文化遺産の継承に貢献することができる。

①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

☒ はい ☐ いいえ

2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【教育課程の編成・実施方針】

史学科では、所定のカリキュラムのもと、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1 年次には教養教育に加え、国際的な視野と幅広い知識を身につけるため、日本史・東洋史・西洋史の概説を設置している。
2. 新入生が大学における多様な授業に十分に適応し、その能力を発揮することが可能になるよう、初年次教育科目として「基礎ゼミ」を設置している。
3. 2 年次以降、日本史・東洋史・西洋史の三専攻に分かれ、演習（ゼミ）を中心とした歴史学の専門的教育に入る。
4. 自立的に研究できる能力を向上させるため、演習とともに史料の活用や外書の読解能力を実践的に訓練する授業を設置している。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

5. 自分の専攻にとどまらず幅広い学識を得るために履修できる多様な講義科目を設置している。 6. 4年生は所属ゼミ担当教員の指導のもと、一つの研究課題に取り組み、卒業論文を作成していく。課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を学科における学業の集大成として位置づけている。	
①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。	はい ☐ いいえ ☐
②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。	はい ☐ いいえ ☐
【根拠資料】 ※冊子名称やホームページURL等。 ・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』（p.3）	
③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。	S ☐ A ☐ B ☐
（～400字程度まで）※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。 学科会議で適宜検証している。文学部教学改革委員会や質保証委員会から要請があれば、学科会議でさらなる改善策を審議して、それらの委員会の議を経て教授会に提案する。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S ☐ A ☐ B ☐
（～400字程度まで）※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 1年次の春学期に履修させる「基礎ゼミ」および主として1年次に履修させる市ヶ谷基礎科目、1年次開設の日本史・東洋史・西洋史の各概説、日本史・東洋史・西洋史の各序説と2年次開設の「史学概論」「考古学概論」という専門基礎科目、2年次以降に履修させる専攻系科目・特講科目群、実習系科目群、演習（ゼミ）という専門科目、さらに高度な教養科目である総合科目、3年次までに培われた能力や教養を自分で結実させる場である4年次の卒業論文というように、年次進捗と学生の知識・能力の深化に合わせた教育内容を提供している。これらはまた、史資料分析のための方法論、歴史像を構築するための理論と知識を、包括的かつ実践的に習得することを可能にするものであり、「歴史を見る眼」を培うという史学科の理念・目的にかなう十分な特徴を備えている。	
【根拠資料】 ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等 ・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』（pp.253-301） ・『2017年度ILAC科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』（pp.3-4）	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S ☐ A ☐ B ☐
（～600字程度まで）※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。 1年次には、導入教育科目「基礎ゼミ」で大学での学習方法を、ILAC科目では学習の基礎となる幅広い知識を習得させる。また、専門基礎科目の日本史・東洋史・西洋史の各概説および日本史・東洋史・西洋史の各序説で、多角的・国際的視野を身につけさせる。 2年次には専門基礎科目「史学概論」「考古学概論」で、歴史学・考古学の基本的な方法論を習得させる。 2年次以降の専攻系（時代史）講義科目では、専攻分野（日本史・東洋史・西洋史）の知識を深化させ、より専門性の高い特講系講義科目と有機的に結びつくようにしている。専攻分野の研究方法を修得させるため、演習（ゼミ）を必修科目として開設している。また、史資料の扱い方や外国語論文読解力を習得させるため、実習系科目を選択必修科目として開設している。 教養教育ではILAC科目の「総合科目」が2年次以降に履修できる。 学習の集大成として卒業論文を必修とし、演習（ゼミ）担当教員の指導を通じて、自らが設定したテーマで卒業論文を完成させられるよう指導している。 より高度な教育を求める学生には、3年次から大学院史学専攻の科目の履修を可能にしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017年度文学部履修の手引き』（学部 pp.90-101）	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	S A B
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 幅広く深い教養を培うため 1 年次から ILAC 科目を履修する編成となっている。また 1 年次には、日本史・東洋史・西洋史の各概説系科目を各 4 単位履修することが求められているほか、日本史・東洋史・西洋史の序説を 4 単位まで履修することができ、歴史学への関心が特定分野に偏ることのないような編成となっている。 2 年次からは日本史・東洋史・西洋史の各専攻に分かれるが、各自の専攻とは異なる専攻の科目を 4 単位以上履修することを義務づけている。これにより専攻を超えて幅広く歴史を学ぶことができる。また総合科目、文学部共通科目（「現代のコモンセンス」など）、文学部内他学科公開科目、他学部公開科目、情報系科目などの科目を自由科目として 8 単位以上履修することを義務づけている。哲学・文芸・美術史を含む選択科目も履修可能であり、歴史にとどまらず多様な学問分野を学び、豊かな人間性の涵養を促す編成となっている。 これらの教養を土台として、2 年次には専攻、演習（ゼミ）を選択し、4 年次には卒業論文のテーマを決めるが、その機会を通して総合的な判断力を培うことが可能となっている。	
【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 2016 年度中に ILAC 科目のカリキュラムを確定し、2017 年度より施行することができた。ILAC 科目では、0～5 群の各科目群をそれぞれ基盤科目・リベラルアーツ科目に分類し、基礎的内容と応用的な内容の双方を学ぶことが定められている。さらには、2018 年度より「教養ゼミ」の開設も決定しており、リベラルアーツを深く学ぶ制度も準備されている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』（学部 pp. 90-101） ・『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』	
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S A B
(～400 字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。 初年次教育としての「基礎ゼミ」は 2011 年度から 4 コマを全て春学期に集中させ、必ず専任教員が担当して、初回授業で史学科の教育理念や到達目標を周知させるとともに、初年次春学期に基礎的なアカデミック・スキルを学ぶ意義を理解させて、大学教育への円滑な導入を図っている。 旧教職課程科目「日本史（教職）Ⅰ・Ⅱ」「外国史（教職）Ⅰ・Ⅱ」のうち、2017 年度に開講される 4 科目 8 単位について、新たに史学科 1 年生も「日本史序説Ⅰ・Ⅱ」「東洋史序説」「西洋史序説」の科目名称で受講できることとし、旧教職課程科目としては廃止になる 2018 年度以降も、史学科専門科目として引き続き開講することとした。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』（pp. 3-4） ・『2017 年度文学部履修の手引き』（学部 pp. 90-101）	
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 専攻に関わらず、外国史（東洋史・西洋史）の科目の履修が 1 年次から義務づけられている。外国史に関する科目は、東・内陸アジア、インド・イスラム、西・南・東ヨーロッパ、ロシアと多様な地域について、内容も政治・経済・考古学・宗教・芸術など多様な分野にわたっており、国際性の基底をなす異文化理解の促進を十分に可能にするカリキュラム編成となっている。 高度な外国語運用能力の育成に向け、東洋史専攻・西洋史専攻の各演習（ゼミ）の授業で外国語（中国語・英語）の原書を読むことを義務づけている。また、1 年次から基礎科目として多様な言語の学習機会が用意されており、史学科の科目である「東洋史外書講読」「西洋史外書講読」では、日本史専攻の学生も履修することができるようになっている。 留学促進のため、基礎ゼミではグローバル教育センターの留学ガイダンスへの参加を呼びかけた。また、学生の国際性を涵養することを目指し、これまでに中国の龍門石窟と学術・教育協定を結んできたが、2016 年度には新たに復旦大学文物博物館学系や少林寺との学術協定を締結した。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 253-301） ・『2017 年度文学部履修の手引き』（学部 pp. 90-101）	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S ☐ A ☐ B ☐
(～400 字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 キャリア教育については、2011 年度から開講された文学部共通科目の「文学部生のキャリア形成」「現代のコモンセンス」を履修できるよう、学科開設科目の時間割編成の際に配慮し、受講を勧めている。加えて市ヶ谷基礎科目には「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン演習」が設置されている。 さらに 2013 年度から基礎ゼミの一部に試験的にキャリアセンターのガイダンスを取り入れており、初年次教育とキャリア教育との融合を試みている。2016 年度には、キャリアセンターによるプログラムを 4 つの基礎ゼミ合同で実施するにいたった (6 月 16 日)。その成果を 9 月 7 日の第 1 回学科会議において検証し、就職活動においては各ゼミ教員を通じてキャリアセンターの積極的な活用を奨励している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要 (シラバス)』(pp. 3-4, 18-19) 『2017 年度文学部履修の手引き』(学部 p. 124) 『2017 年度文学部講義概要 (シラバス)』(pp. 19-20)	
2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S ☐ A ☐ B ☐
【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。 - 学生全体への履修指導については、4 月に新入生オリエンテーション、在学生ガイダンスを開催し、履修上の注意・指導を行っている。 1 年生には基礎ゼミと、5 月に行われる全ての 1 年生を対象とした新入生面談とにおいて、2 年生以上にはそれぞれが所属する演習 (ゼミ) において、専任教員が直接、履修上の注意を行うとともに、学生からの履修上の相談にも応じている。 1 年生には、11 月にゼミ説明会を開催し、ゼミ選択・履修の相談にも応じている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 「文学部史学科・新入生オリエンテーション」「史学科の理念・目的、教育目標と学位授与、カリキュラム構成について」(新入生オリエンテーション配布資料) 「文学部史学科・履修ガイダンス」(在学生ガイダンス配布資料) 「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」(卒業論文ガイダンス配布資料)	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S ☐ A ☐ B ☐
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 学習指導については、春学期開始後数週間の頃に専任教員が分担して新入生全員を対象にグループ面談を行い、不適應等の問題が起きていないかの確認に努めると同時に、学習相談にも応じている。さらに「基礎ゼミ」を通して、1 年生にも専任教員の学習指導が行き届きやすくなっている。演習 (ゼミ) に所属することになる 2 年次以降の学習指導は、ゼミ担当教員が授業の内外できめ細かに行っている。4 年生に対しては、在学生ガイダンス時に卒論ガイダンスを行うほか、ゼミ担当教員が授業時以外にも卒論指導面談を行うなどして、きめ細かく指導している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」(卒業論文ガイダンス配布資料)	
③学生の学習時間 (予習・復習) を確保するための方策を行なっていますか。	S ☐ A ☐ B ☐
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 学生の授業外学習については、各科目につきシラバスで指示している。2 年次以上の学習の中心である演習 (ゼミ) や史学科の学習を特徴づけている実習系科目群では、教員からの課題を通じて十分な授業外学習が要求されている。また、授業内容を離れた学生間の相互学習やサブゼミも盛んに行われており、各自の専門分野に関しては、授業外の学習時間は十分に確保されている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 『2017 年度文学部講義概要 (シラバス)』(pp. 253-301)	
④1 年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	☐ はい ☐ いいえ
【履修登録単位数の上限設定】※1 年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。 「文学部全体」のシートを参照。 【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

なし。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』（学部 p. 93）	
⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S ☒ A B
【具体的な科目名および授業形態・内容等】 ※簡条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ・一般的に言われる PBL、アクティブラーニングの定義に従うのであれば、従来行っている実習系科目群、演習（ゼミ）、基礎ゼミの授業形態は、学生の主体的な学習を主体とする点で、すでに基本要件を満たしている。 ・史学科の学習は卒論作成を最終的な目標としているが、問題提起から論文の完成までの全ての過程で学生の能動性を前提としている卒論作成は、PBL、アクティブラーニングの究極的な形と考えられる。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 271-280） ・『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』（pp. 3-4）	
⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S ☒ A B
（～400 字程度まで）※どのような配慮が行われているかを記入。 演習（ゼミ）は、2 年次に振り分けを行う際に 1 演習あたり各学年 15 人程度に学生数を制限することで、少人数教育を実現している。実習系の日本考古資料学、日本近世史科学等は、学生の専攻を優先して選抜することで人数の適正化をはかっている。これらの対応については、学部ガイダンス、ゼミ説明会で学生に周知している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい いいえ
【検証体制および方法】 ※簡条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・2017 年度シラバスについては、シラバスの第三者チェックの際に、教学改革委員がシラバスの文章や体裁のチェックを行い、不適切な箇所については訂正した。 ・シラバス執筆上の問題点を集約し、第 2 回特別学科会議（2017 年 2 月 1 日）で検証し情報を共有した。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	☒ はい いいえ
【検証体制および方法】 ※簡条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・2012 年度から秋学期末の第 2 回特別学科会議において、FD 推進センターが提供する「振り返りシート」を利用して、専任教員担当授業についてはシラバスの内容と齟齬がないことを確認している。 ・年二回（春学期末と秋学期末）の特別学科会議では、相互授業参観の状況報告を行っている。 ・第 1 回特別学科会議（2016 年度は 2016 年 9 月 7 日）では、基礎ゼミについて情報共有を行っている。 ・第 2 回特別学科会議（2016 年度は 2017 年 2 月 1 日）では、授業スケジュールがシラバス通りには進まなかったケースについて、その理由（受講生の理解度を確認しながら進めたこと、シラバス作成時期の問題で次年度の授業計画を十分に練る時間的余裕が無く、学生による授業改善アンケートの内容も反映させられないなど）の検証を行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S ☒ A B
【確認体制および方法】 ※簡条書きで記入。 ・各科目の成績評価に関する基準はシラバスに明記されており、単位の認定は適切に行われていると考える。学生の申請に基づく成績再調査の制度も学部全体で保証されている。 ・学科として成績評価と単位認定の適切性を組織的に確認する全面的な作業はこれまで行っていない。史学科の授業は、それぞれが扱う分野・史資料に根ざした多様性を有しており、画一的な適切性の基準を設けることは必ずしも現実的ではない。よって、それぞれの授業において学生への説明責任を果たすことが、適切性の獲得につながるものと考えている。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・4年間の学習成果を測る重要な指標である卒業論文の審査基準については、分野による違いが大きいものの、2012年度に学科として最低限要求すべき最大公約数的な審査基準を作成し、2013年度から4月の在学生ガイダンスにおいて2～4年次生に文書と口頭で提示している。 ・学生の就職・進学状況については、キャリアセンターによる報告をすべての専任教員で共有することとしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 253-301） ・「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配布資料）	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい ☒ いいえ
（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。 留学生や転編入生の既修得単位認定については、学科会議において関連書類（既修得単位に関するシラバス等）を精査して、成績も合わせて認定するか、修得単位数のみ卒業所要単位の中に組み入れる認定方法（R認定）が適切かなど、学内基準に則って判断したのち、教授会の承認を得ている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S ☒ B
（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。 2012年度から秋学期末の特別学科会議において、FD推進センター提供の「振り返りシート」を利用し、各専任教員がシラバスに提示された成績評価基準に則った成績評価を行っているかを、相互に確認している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・個々の学生の進路については、全学生の詳細な情報を網羅するまでには至っていないが、キャリアセンターによる報告に加え、学科会議での所属ゼミの指導教員からの報告を通じて、大凡の状況は学科単位で把握している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・メンタル面での問題を抱えている学生については、試験放棄を含む成績分布や単位修得状況を学科として確認している。 ・1年生については、12月に判明する2年次以降の所属ゼミ希望調査用紙の未提出者について、履修状況・単位修得状況と成績を確認し、学科主任が本人や保証人に連絡して原因を調査し、相談に応じている。また、必要に応じて学生相談室とも連携して対処している。 ・2年次以降については、所属ゼミの指導教員が長期欠席者や単位修得状況不良の学生について学科会議で報告し、対応策を検討するようにしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。	S ☒ B
（～400字程度まで）※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等）。 学習成果の測定については、授業ごとにそれぞれのやり方で行っている。学生一人一人について学科として測定するのであれば、単位修得状況やGPAによることになり、留年者・卒業保留者についてはこれを行っている。順調に進級している学生については、学科としての学習の成果が得られていると理解している。 卒業論文については卒業論文審査基準に基づき、卒業論文面接諮問において各担当教員が達成度を確認し評価している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学習成果を可視化していますか。	S ☒ B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【学習成果可視化の取り組み】※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。 合格した卒業論文については、学科内学会の雑誌である『法政史学』に論文名を掲載し、学生が在籍中の学習成果によりどのような関心、問題意識を持つに至ったかを明示している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配布資料） 『法政史学』87号（2017年3月）課程博士・修士・卒業論文題目一覧（2016年度）	
2.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S ☒ A B
（～400字程度まで）※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。 4年間の教育成果を検証するための重要な指標である卒業論文については、合格者数（卒業者数）を毎年度確認し、2011年度からは秋学期末の特別学科会議で卒業保留となった者の原因分析も行っている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 特になし	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S ☒ A B
【利用方法】※箇条書きで記入。 5段階評価をやめたこと、「授業を履修して感じたこと」「授業の進め方」に関する項目で複数回答を認めていること等から、教育課程や教育内容・方法の組織的改善のためには活用しにくいという意見が多く、十分な活用に至っていない。 「授業改善アンケートからの気づき」がシラバスの必須項目となったこともあり、当面は自由記述欄の内容を踏まえた個々の教員による利用に委ねることとなり、現在に至っている。 - WEBによるアンケートの回答率が低く、実態もつかみにくくなっていることから、回答率の向上について検討する必要がある。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 『2017年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 253-301）	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2017年度のILAC科目の発足とそれにとまう教養教育の充実化。	2.3③

（3）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・多くの講義系科目については新しい授業形態が積極的に導入されているとは言い難く、2014年度末に文学部教授会懇談会で紹介されたようなPBLやアクティブラーニングの手法を、どのように各自の講義に取り入れているか、あるいは今後取り入れていくか、特別学科会議等で情報共有することを検討中である。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

3 学生の受け入れ

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。
【学生の受け入れ方針】 史学科は、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。 ※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

特別推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試等。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要となる基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 史学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

☐ はい ☐ いいえ

3.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

☐ はい ☐ いいえ

(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

史学科定員は 100 名であり、近年の入学者は 2011 年度が 100 名、2012 年度が 95 名、2013 年度が 99 名、2014 年度が 105 名、2015 年度が 95 名と概ね適正を保っていたが、2016 年度は 129 名となり、演習（ゼミ）の振り分けをより均等化することに対応した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

定員充足率（2012～2016 年度）

（各年度 5 月 1 日現在）

種別\年度	2012	2013	2014	2015	2016	5 年平均
入学定員	100 名	100 名	100 名	100 名	100 名	
入学者数	95 名	99 名	105 名	95 名	129 名	
入学定員充足率	0.95	0.99	1.05	0.95	1.29	1.05
収容定員	400 名	400 名	400 名	400 名	400 名	
在籍学生数	466 名	453 名	443 名	429 名	452 名	
収容定員充足率	1.17	1.13	1.11	1.07	1.13	1.12

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ①学部・学科における過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20 以上	1.25 以上
上記以外の分野	1.25 以上	1.30 以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告
すべての分野共通	0.9 未満	0.8 未満

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1.20 以上	1.17 以上	1.14 以上	1.10 以上
収容定員超過率	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上

3.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S ☐ A ☐ B

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

専任教員の全てが入試業務に携わっており、一般入試における学生の動向、選抜のあり方については、入試業務の準備段階、業務遂行時に情報の交換を行い、入試結果を見据えながら実質的な検証を重ねている。

指定校推薦の面接の結果、転入・編入学試験の筆記試験・面接の結果については、採点・面接担当者が学科会議で報告とともに所感を述べ、受験生の傾向、選抜のあり方について情報の共有を図っている。

2013年度に指定校推薦について指定校の見直しを行い、近年推薦者のいなかった2校を除外し、2校を新規に採用した。また指定校の見直し期間を2年間から4年間に延長することを学科として決定した。

志願者のいなかった外国人留学生入試については、2015年度入試から英語を審査科目から外すこととした。これにより志願者0が続いていた外国人留学生の志願者が3年つづけて10名を超すことになった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・大学ホームページ「学部入試情報」(<http://www.hosei.ac.jp/nyugakuannai/gakubu>)

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・外国人留学生入試では今後も志願者数、とくに中国人・韓国人の志願者数の維持・増加が予想されるため、選考の際に東洋史を専門とする専任教員を加え、志願者の学力、志望理由、生活、学習環境についての包括的な情報収集に努めた。	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・2016年度の入学者が129名と大幅な超過が発生したため、引き続き対応を検討中である。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

4 教員・教員組織

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

【求める教員像および教員組織の編制方針】(2011年度自己点検・評価報告書より)

自らの専門領域で独創的で最先端の研究に従事するのみならず、個々の学生が学科の教育目標を達成できるよう自らの研究に基づき細やかな教育指導を行ない、さらに学科・学部運営や入試業務等の大学全体に関わる校務にも積極的に関わる教員が求められる。教員にはまた、地方自治体との連携や学会活動等を通じて、自らの研究成果を社会に還元する努力も求められよう。

教員組織としては、専任教員の半数を日本史分野、半数を外国史(東洋史・西洋史)分野とし、学科の教育目標の達成が可能となる編制を目指す。また、現状では年齢構成が偏っているが、徐々にバランスの取れた年齢構成になるようにしていく。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

- ・「文学部教授会規定」
- ・「文学部教授会規定内規」
- ・「文学部人事委員会細則」
- ・「文学部史学科 人事に関する内規」(2011年7月20日学科会議決定、2012年5月16日一部修正、2014年3月12日一部修正)
- ・「文学部史学科 昇格人事に関する申し合わせ事項」(2011年7月20日学科会議決定)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。						はい ☒ いいえ ☐	
【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】 ※箇条書きで記入。 ・「文学部全体」のシートを参照。 ・学科主任は文学部人事委員および教学改革委員も兼ね、両委員会に対し学科からの発議を行うほか、文学部としての検討事項等を学科に持ち帰り、学科会議の審議に付す役割も担う。 ・学科主任以外の専任教員もすべて学科会議で調整のうえ役割分担、責任の所在を明確にしているが、大学院専攻主任、通教主任、各種委員会委員のほか入試工房長・委員など複数の校務を兼ねなければならない。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし							
4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。							
①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。						はい ☒ いいえ ☐	
（～400 字程度まで）※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。 日本史分野では従来からの 5 名の教員（考古学・古代史・中世史・近世史・近現代史）と 2015 年度採用の助教 1 名（近世史）の計 6 名の専任教員を配置し、東洋史分野では 2 名（文献史料・物質資料各 1 名）、西洋史分野では 3 名（前近代史 2 名・近現代史 1 名）の専任教員を配置している。 専任教員ではカバーできない科目については兼任教員に担当してもらうが、担当教員については、該当分野の専任教員の推薦に基づき履歴書・業績一覧を学科会議で審査した上で、人事委員会および教授会の承認を得て決定している。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部史学科 人事に関する内規」（2011 年 7 月 20 日学科会議決定、2012 年 5 月 16 日一部修正、2014 年 3 月 12 日一部修正） ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 467-471）							
②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。						はい ☒ いいえ ☐	
（～400 字程度まで）※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。 大学院教育に携わることのできない助教 1 名を除き、専任教員 10 名はみな学部教育と大学院教育の両方に携わっている。 また、2013 年度より大学院人文科学研究科史学専攻の 25 科目について史学科学部生の履修を可能にし、大学院との連携による高度な専門的教育を史学科学部生が受ける機会を設けた。さらに東洋史の分野で 2014 年度には 8 科目、2015 年度には 1 科目が新たに加わったことで、日本史・東洋史・西洋史の全分野で、大学院レベルの高度な教育を受けられる場が設けられた。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』（学部 p. 101）							
2016 年度専任教員数一覧						(2016 年 5 月 1 日現在)	
学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
史	7	2	1	1	11	6	3
専任教員 1 人あたりの学生数（2016 年 5 月 1 日現在）：41.1 人							
③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。						はい ☒ いいえ ☐	
【特記事項】 （～200 字程度まで）※ない場合は「特になし」と記入。 現状では専任教員の年齢構成が 50 歳以上に大きく偏っている。これは 2003 年度以降、以前は別個に採用人事を行っていた第一教養部に所属していた教員が史学科に移籍した結果で、やむをえない面がある。2013 年度には 2 名の専任教員の退職に伴い新たに 2 名の新任教員を迎え、さらに 2015 年度には 1 名の任期付助教を採用した。これにより、年齢構成は一定程度は正された。なお 60 歳以上の比率が高いが、60 代前半の 2 名は 2017 年度中に 65 歳になるので、60 代後半の 2 名と合わせ、今後数年間の後任人事により、年齢構成はさらに是正されると見込まれる。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部教授会規程」（規定第 5 号、昭和 37 年 10 月 3 日一部改正、昭和 56 年 12 月 16 日一部改正、2001 年 7 月 27 日一部改正、2007 年 4 月 1 日一部改正、2010 年 7 月 26 日一部改正、2014 年 4 月 1 日一部改正、2015 年 4 月 1 日一部改正）							

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

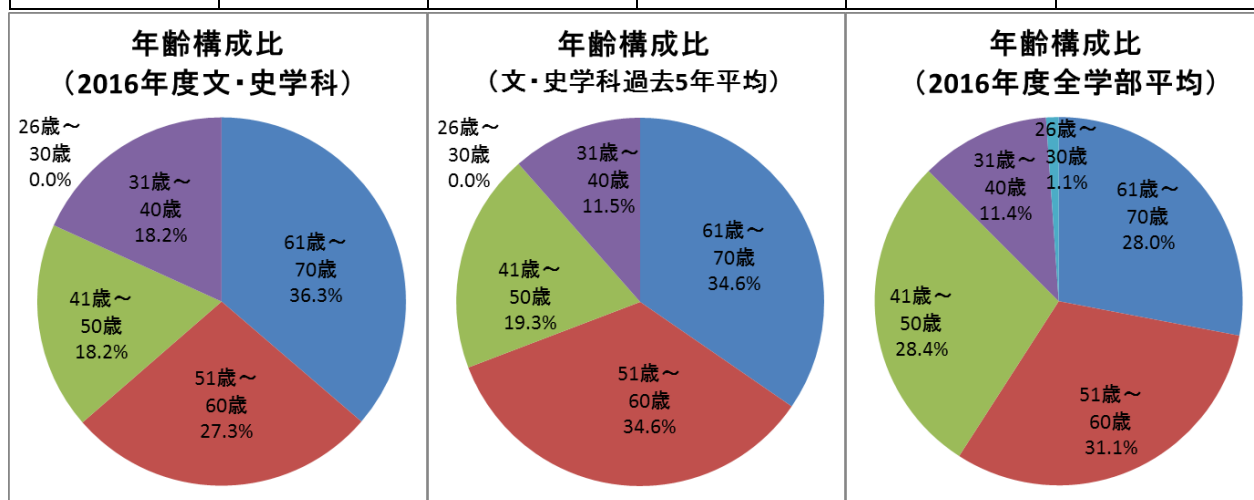
※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・「文学部教授会規程内規」(昭和44年教授会決定、昭和57年3月26日一部改正、1996年3月22日一部改正、2009年9月30日一部改正、2014年4月1日一部改正、2015年4月1日一部改正)

年齢構成一覧

(2016年5月1日現在)

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2016	0人	2人	2人	3人	4人
	0.0%	18.2%	18.2%	27.3%	36.3%



4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

①各種規程は整備されていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を簡条書きで記入。

- ・「文学部教授会規程」(規定第5号、昭和37年10月3日一部改正、昭和56年12月16日一部改正、2001年7月27日一部改正、2007年4月1日一部改正、2010年7月26日一部改正、2014年4月1日一部改正、2015年4月1日一部改正)
- ・「文学部教授会規程内規」(昭和44年教授会決定、昭和57年3月26日一部改正、1996年3月22日一部改正、2009年9月30日一部改正、2014年4月1日一部改正、2015年4月1日一部改正)
- ・「文学部人事委員会細則」(1986年11月19日教授会承認、2012年5月16日教授会承認、2013年9月18日教授会承認)
- ・「文学部人事委員マニュアル」(2014年6月18日確定)
- ・「文学部史学科 人事に関する内規」(2011年7月20日学科会議決定、2012年5月16日一部修正、2014年3月12日一部修正)
- ・「文学部史学科 昇格人事に関する申し合わせ」(2011年7月20日学科会議決定)

②規程の運用は適切に行われていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※簡条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等(非公開)を添付することでも可。

- ・上記根拠資料の通り。
- ・2013年度の専任教員2名、2015年度の助教1名の採用人事、2013年度1件・2014年度2件・2015年度2件・2016年度2件の定年延長人事、2013年度の名誉教授推薦は上記諸規程・内規等に従って進めた。

4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部(学科)内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S ☒ A ☐ B

【FD活動を行うための体制】※簡条書きで記入。

- ・春学期末・秋学期末に特別学科会議を実施。

【2016年度のFD活動の実績(開催日、場所、テーマ、内容(概要)、参加人数等)】※簡条書きで記入。

- ・春学期末特別学科会議：2016年9月7日(水)13:30～15:00、BT6階G会議室、専任教員全員が参加。基礎ゼミの運営方法や留年者・休学者・成績不振者への各教員の対応の報告。
- ・秋学期末特別学科会議：2017年2月1日(水)13:30～15:00、BT6階G会議室、専任教員全員が参加。ゼミでの授業外学習の実施状況、学部生による大学院科目の履修・参加状況、卒業保留の原因・卒業論文作成支援ツールの作成、シラバス・「振り返りシート」を利用した授業内容の検討、シラバスの第三者チェック報告。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・2015 年度より助教 1 名を採用したものの、助教の分担可能な校務が少なく、負担は軽減されていない。2017 年度中に、人事に関する内規において、採用における基準を明確化する。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

5 学生支援

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・卒業者数・卒業保留者については毎年、学科会議および教授会で確認している。 ・退学者については、ゼミ所属学生の場合は指導教員が個別に相談に応じていることも多く、理由を把握しやすいが、1 年生や長期欠席者の退学の場合は学部事務課からの報告で把握しているのが現状で、多くの場合「一身上の都合」とのみ記されている理由を調査することは困難と言わざるを得ない。 ・留年については、前項 2.6①に記したように、留年が懸念される 1 年生は 12 月の時点で把握が可能である。2 年次以降の留年者については所属ゼミ指導教員が把握し、学科全体でも情報を共有するようにしている。加えて、2011 年度分からは教授会で資料が配布され、各学年の留年者の氏名・人数が正確に把握できるようになった。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400 字程度まで）※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。 ※「文学部全体」の取り組みを参照	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③成績不振な学生に対し適切に対応していますか。	S ☒ A ☐ B ☐
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 ・メンタル面での問題を抱えている学生を除き、単位修得状況や GPA といった形での成績不振については、学科としての特別な対応は行っていない。 ・演習（ゼミ）における学習態度や学修不振については、適宜、ゼミ担当教員が個別に指導している。 ・卒業論文の作成が滞っている学生については、ゼミ担当教員が個別の面接指導を行っている。 ・各教員がオフィスアワーを設定し、悩みを抱えた学生の相談を受けられる体制を作っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	S ☒ A ☐ B ☐

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(～400 字程度まで) ※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。

2015 年度には 1 名、2016 年度には 3 名の外国人留学生を受け入れている。1 年次に設けられた基礎ゼミにおいて担当の教員が注意深く就学状況を把握し、学科会議や特別学科会議などを通じて教員間で情報の共有を行っている。言葉の問題、人間関係の問題などから孤立する状況を作り出すことのないよう学科全体で注視しており、現在のところいずれも中国・韓国からの留学生であることから、特に東洋史専攻の教員が個別に相談に応じている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・第 1 回特別学科会議 (2016 年 9 月 7 日) 第 2 回特別学科会議 (2017 年 2 月 1 日) において、専任教員より成績不振者や留年者に関する報告を受け、学科全体で情報の共有を行った。	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・成績不振者や留年者の環境は、人間関係、家庭事情、健康状態などによって個々に異なっているため、それぞれの学生の情報の共有を逐次行い、学科全体として対応していく必要がある。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

IV 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		教員・教員組織
現状の課題・今後の対応等		2015 年度より助教 1 名を採用したものの、助教の分担可能な校務が少なく、負担は軽減されていない。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	第 14 回 (12 月 21 日) 以降の各学科会議において、教員負担の問題を議論し、善処策を検討中である。
	質保証委員会による点検・評価	教員の負担軽減がながらく課題となっている事態が懸念される。史学科の専任教員の多くは、学部授業だけでなく大学院と通信教育部も担当し、また入試において世界史・日本史の負担は大きい。助教への過度の負担とならぬかたちで専任教員全体の負担が軽減されるよう善後策が見つかることを期待する。
評価基準		教育課程・教育内容
現状の課題・今後の対応等		・文学部全体の方針の決定に応じ、カリキュラムマップ (試案) とナンバリング・コード (暫定案) のさらなる整備を進める。 ・キャリアセンターによるプログラムは 4 つある基礎ゼミのすべてでは実施しておらず、2016 年度には確実にこれを実施し、前年度との比較において、その効果を継続的に観察していく必要がある。また、2015 年度より就職活動の時期がずれたことから学生に戸惑いが生じているため、キャリアセンターの積極的な活用を推奨していく。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	・文学部全体の方針の決定に応じ、3 つのポリシーの見直し作業を行った。 ・旧教職課程科目「日本史 (教職) I・II」「外国史 (教職) I・II」のうち、2017 年度に開講される 4 科目 8 単位について、新たに史学科 1 年生も「日本史序説 I・II」「東洋史序説」「西洋史序説」の科目名称で受講できることとし、旧教職課程科目としては廃止になる 2018 年度以降も、史学科専門科目として引き続き開講することとした。 ・6 月 16 日、キャリアセンターによるプログラムを 4 つの基礎ゼミ合同で実施した。その成果を 9 月 7 日の第 1 回特別学科会議において検証している。就職活動においては各ゼミ教員を通じてキャリアセンターの積極的な活用を奨励した。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		・グローバル教育センターとは中国復旦大学文物與博物館学系との学術提携を進め、協定書の調印にこぎつけた。
	質保証委員会による点検・評価	・三つのポリシーの見直し作業、教職科目への対応はいずれも適切であったと判断される。 ・基礎ゼミにおけるキャリアセンター・プログラムの活用とその学科会議での検証は、学科の積極的取り組みとして評価できる。 ・グローバル教育への前向きな取り組みとして、留学生受け入れ増とあわせて国際交流のための外国大学との国際交流は高く評価できる。
評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		多くの講義系科目については新しい授業形態が積極的に導入されているとはいえず、2014年度末に文学部教授会懇談会で紹介されたようなPBLやアクティブラーニングの手法を、どのように各自の講義に取り入れているか、あるいは今後取り入れていくか、特別学科会議等で情報共有することを検討中である。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	2月1日の第2回学科会議において、史学科のゼミ・実習系科目群・基礎ゼミがPBL・アクティブラーニングの要件を満たしていることを確認するとともに、授業外における学生間の相互学習・サブゼミに関する情報共有を行い、授業外の学習時間が十分に確保されていることを確認した。
	質保証委員会による点検・評価	PBL、Active Learning など新たな「授業形態」への自覚と導入は高く評価できる。授業外学習への導きも評価できる。
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		各ゼミで適切な指導環境が整備されているかを、定期的に検証する機会を設ける必要がある。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	・9月7日の第1回特別学科会議で、基礎ゼミについて情報共有を行った。 ・2月1日の第2回特別学科会議で、ゼミでの授業外学習の実施状況、学部生による大学院科目の履修・参加状況、卒業論文の作成に係る問題など各ゼミで適切な指導環境が整備されているかについて検証を行った。
	質保証委員会による点検・評価	ゼミにおける指導環境の整備について、基礎ゼミや大学院科目も含めて学科全体での検証・情報共有をおこなっているのは高く評価できる。
評価基準		学生の受け入れ
現状の課題・今後の対応等		2016年度の入学者では129名と大幅な超過が発生しており、現在対応を検討中である。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	11月16日のゼミ説明会および事前の周知により、ゼミの増コマを行わず希望状況を踏まえて1年生全員の調整を行った。しかし、定員超過の状況は次年度以降も継続されることから、履修状況を見守りつつ逐次対応を学科全体で検討する旨確認した。
	質保証委員会による点検・評価	新生の大幅増という不測の事態への対応を、注意深くまた学生に対して丁寧におこなっていることは評価できる。
評価基準		学生支援
現状の課題・今後の対応等		成績不審者や留年者の環境は、人間関係、家庭事情、健康状態などによって個々に異なっているため、それぞれに対する情報の共有を逐次行い、学科全体として対応していく必要がある。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	9月7日の第1回特別学科会議において、成績不審者・留年者・長期欠席者に関する個々の状況を確認し、学科全体で情報を共有した。その結果を踏まえ個々の学生が所属するゼミ担当教員を中心に対応を行った。
	質保証委員会による点検・評価	成績不振者・留年者について情報共有して議論するとともに、個別の事情をもった個々の学生に対して、学科全体で対応していることが評価できる。

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

※文学部全体の取り組み状況の評価を参照。

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2012 年度認証評価における指摘事項（努力課題）

該当なし

II 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

文学部は 6 学科からなっており、文学部としての教育理念はあるが、各学科とも専門教育や教育方針の目標を独自に掲げている。その点、6 学科を一つの学部として総評するのは難しいが、全体としては少人数教育を重視し、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育を目指している点は高く評価できる。

「2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」については、全体としては、共通して少人数教育の重視とそれを目指した丁寧な指導が窺えるものの、このようなきめ細かな指導により教員個々の負担が重いのではないかという懸念が残り、その解消策の持続的な検討が今後必要であろうと思われる。

さらに、全般的に文学部の記述には、学生教育への努力は認められるものの、現状の問題点を可視化することが少ないように思われる。さらに一歩踏み込んで、さまざまな視点から文学部、そして各学科を客観的に見直し、問題点を明確にし、問題点への対策を実施することが期待されるとともに、よりきめの細かい教育成果の検証と測定を期待したい。他学部や、文学部の中でも新しい学科の好ましい対策や方策を、今後の文学部改革に導入していただくと期待している。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

地理学科では、少人数教育の実施、かつ丁寧で細やかな学習指導について引き続き努力している。2016 年度は、2017 年度入学生から選択必修であるゼミの履修年次を 3 年に引き上げ、ゼミへの学生の振り分けについても人数の上限を設定するというカリキュラム改革を決定した。これは学生に対するきめ細かな指導をさらに充実させるとともに、学生数の偏りに起因する教員の負担加重の問題を解消することを意図したものである。その効果については、今後 4 年間の推移により検証していきたい。

教育成果の可視化については、全員参加を原則とする卒業論文発表会、法政大学地理学会と連携した優秀卒業論文表彰を実施している。これにより、優秀な卒業論文を製作するために必要な学力や取り組み方、評価のポイントを学生に明示することが可能になり、さらに学科の全教員が教育効果を検証する場を設定することが可能となっている。今後もこのような教育成果の可視化について継続して努力していきたい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

※文学部全体の対応状況の評価を参照。

III 自己点検・評価

1 内部質保証

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

・「文学部全体」のシートを参照。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2 教育課程・学習成果

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。	
【学位授与方針】 地理学科は、地理学科のカリキュラムのもと所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。 1. 人間の生活の舞台である地球表層の自然環境や人文・社会環境について基礎的な知識を身に付け、地理的諸事象の基本的メカニズムを理解しているとともに、幅広い教養も身につけている。 2. 地理学的な思考力やものの見方を身に付け、それらに基づく研究方法を用いて考察することができる。 3. 地理学の知をもって社会の諸問題に関心を持ち、他者の声に耳を傾け、自分の考えを口頭表現や文章表現によつて的確に発信することができる能力、地域社会のニーズに応えられる能力、および諸問題を解決する能力を身に付けている。	
①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。	☒ はい ☐ いいえ
2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。	
【教育課程の編成・実施方針】 地理学科では、教育目標と学位授与方針にそつて、以下に示す教育課程を編成している。 1. 幅広い知識や教養を涵養するため、市ヶ谷キャンパスのリベラルアーツ科目の単位を卒業所要単位に含めている。また、1年次には「基礎ゼミ」で、大学での学習方法の基礎・基本を身に付けさせる。 2. 地理学科の専門科目は、1年次では入門的な科目、2年次以降は地理学の様々な分野の基礎的知識を身につけるため各論科目が配置されている。また、主に3年次以降において、地理学の方法論や研究法を身に付ける、演習や実習科目が配置されている。 3. フィールドワークを通じて地域の実態を調査し、その結果をもとにレポートを作成することによって、調査技能、研究方法および文章表現能力を身に付けさせる「現地研究」が必修科目の一つとして配置されている。 4. プレゼンテーションや討論を通して、地理学の研究手法や体系を学び、問題解決能力や卒業論文作成の基礎的能力を身に付けるため、演習（ゼミ）が配置されている。 5. 課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。優秀な学生が早期に研究活動に専念できるよう、3年次で早期卒業し大学院修士課程へ進学する5年一環プログラムも用意されている。	
① 学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。	☒ はい ☐ いいえ
② 教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【根拠資料】 ※冊子名称やホームページURL等。 ・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』	
③ 教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。	S ☒ A ☐ B
（～400字程度まで）※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。 地理学科では、必要に応じて、学科会議にて教育目標や学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性について審議・検討し、その上で文学部教授会や教学改革委員会にて諮っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
① 学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	☒ S ☐ A ☐ B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(～400 字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 1 年次では、地理学の導入科目の位置づけである「地理学概論(1)・(2)」や「地理実習(1)・(2)」等を通じて、大学で学ぶ地理学の体系と方法論の基礎を習得させるとともに、「基礎ゼミⅠ」を通じて大学で必要な学習方法を学ぶ。また「地理学Ⅰ・Ⅱ」や他の ILAC 科目を履修し、幅広い知識や教養を学ぶ。2 年次以降は選択必修科目と選択科目によって地理学の専門的な方法論や知識を学ぶとともに、「現地研究」において習得した方法論の実践を図る。2016 年度入学生までは、2 年次以降には演習を履修し、4 年次になるまでに卒業論文を作成するために必要となる能力が育成される教育内容になっている。 このように、1 年次から 4 年次まで段階を踏んで能力育成を行っており、卒業論文申請者の内の合格者の割合から判断すると教育内容は適切であると考えられる。	
【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 2017 年度新入生から、選択必修科目である演習の履修年次を 3 年次に引き上げ、いくつかの専門科目の履修年次を 2 年次に引き下げた。これにより、4 年次の卒業論文に向けて、より多くの講義・実習を学生が 2 年次より受講できるため、専門知識の習得と卒業論文制作への準備が可能になり、3 年次からの演習における少人数教育の実施が可能になる。今後はより一層の教育効果が期待される。	
【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページ URL や掲載冊子名称等 ・『2017 年度文学部履修の手引き』	
② 学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系的性を確保していますか。	☒ S ☐ A ☐ B
(～600 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。 1 年次には必修科目である「地理学概論(1)・(2)」や「地理実習(1)・(2)」を中心に、専門科目を配置している。それら必修科目を通じて、大学で学ぶ地理学の体系と方法論の基礎を習得させるとともに、「基礎ゼミⅠ」では大学で必要な学習方法について学ぶ授業が提供されている。また、ILAC 科目では「地理学Ⅰ・Ⅱ」において幅広い地理学の教養を学ぶ機会もある。2 年次からは選択必修科目や選択科目によって多岐にわたる地理学の方法論や知識を学ぶとともに、習得した方法論を「現地研究」（フィールドワーク）において実践する。2016 年度入学生までは、2 年次からの「演習」の履修により、4 年次の「卒業論文」へとつなげる編成となっている。以上のように、地理学科では卒業所要となる専門科目 88 単位のうち、必修科目 18 単位は、基礎的な科目である「地理学概論(1)・(2)」と「地理実習(1)・(2)」(8 単位)を 1 年次に、実践的な科目である「現地研究」(2 単位)を 2 年次以上に、そして「卒業論文」(8 単位)を 4 年次に配置し、その上で 2 年～4 年次に開講されているさまざまな選択必修科目や選択科目等(70 単位)の履修を通じて、段階的に学生の能力が育成できるよう体系づけている。	
【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 2017 年度新入生から、選択必修科目である演習の履修年次を 3 年次に引き上げ、いくつかの専門科目の履修年次を 2 年次に引き下げた。これにより、4 年次の卒業論文に向けて、より多くの講義・実習による専門知識の習得と準備が早い段階で可能になるとともに、演習における少人数教育の実施による教育効果が期待される。4 年次の卒業論文の製作に向けて、教育効果が期待される。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』	
③ 幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	☒ S ☐ A ☐ B
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 地理学は、他の人文科学・社会科学・自然科学など幅広い分野と密接な関係があることから、ILAC 科目の履修においても、「地理学Ⅰ・Ⅱ」のみならず、様々な分野の履修が望まれる。また、ILAC 科目の中にある「総合科目」の「人文地理学セミナー」「グローバル社会の地域研究」「自然環境のしくみとその変貌」なども、より発展的に教養を学ぶ科目として位置づけられている。また、ILAC 科目・総合科目のカリキュラムのみならず、地理学科専門科目においても、文化・歴史、社会・経済、自然・環境などのさまざまな分野について学ぶことができる教育課程が編成されている。	
【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 文学部のシート参照。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』『2017 年度 ILAC 科目/市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』		
④ 初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。 初年次教育として少人数クラスの「基礎ゼミⅠ」を設置して、レポート作成方法や図書館利用方法、プレゼンテーション方法など大学で必要な学習方法についての授業内容を提供し、ほぼ全員に履修させている。また、必修科目である「地理学概論(1)・(2)」では、高校で地理科目を選択していない学生に対する配慮から、高校地理で習う内容を踏まえた授業を提供し、高校地理と大学で学ぶべき地理学の内容との橋渡しとなる授業を行っている。さらに、同じく必修科目である「地理実習(1)・(2)」では、地理学科の学生が学士課程の4年間に地理学を専門に学ぶためのベースとなる基礎的な知識や考え方、調査や研究の方法論についての授業内容を提供している。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』『2017 年度 ILAC 科目/市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』		
⑤ 学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 外国語を通じて地理学を学ぶための「外書講読」を開講している。また、地理学の研究対象領域は日本に限らず海外にも広がっているため、世界の各地域に対応した「世界地誌」やその他にも海外を対象にした地理学科専門科目を数多く開講しており、学生の海外諸地域に対する理解を深めている。 さらに、毎年ではないが海外での「現地研究」(2011 年韓国、2012 年台湾、2014 年韓国、2016 年韓国)を実施し、学生自らが異文化を体験する機会を設けている。その結果、学士課程の総仕上げである卒業論文において、海外のフィールドを選択する学生が毎年、数名存在しており、上記の教育内容が学生の国際性を涵養するのに寄与していると考えている。 また、2015 年度からは、英語強化プログラム(ERP: English Reinforcement Program)科目を単位化し、卒業所要単位に組み込むことで、学生の国際性を涵養する機会を増やすことに繋げている。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・現地研究実施概要(地理学科HP http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/)		
⑥ 学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S	☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 2～4 年生に対しては、ガイダンス時において、キャリア教育の一環として開講されている文学部共通科目の「文学部生のキャリア形成」や「現代のコモンセンス」を受講するように指導している。また、教員ごとには、それぞれの演習の授業において各方面で活躍している卒業生をゲストスピーカーとして招き、職業選択や職業体験等の話を提供してもらい、学生への幅広い職業選択へ向けての動機付けを行っている。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』		
2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。		
① 学生の履修指導を適切に行っていますか。	S	☒ A B
【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・正式な新入生ガイダンス終了後に加えて行っている地理学科オリジナルの履修ガイダンスにおいて、1 年次に履修すべき科目を学科で用意した時間割表にその場で記入させて、必修科目などを見落とすことがないように指導している。 ・学科所属の SSI 学生に、地理学科での履修のしかたや、卒業要件などについて詳しく説明する機会を設けている。 ・正式な在校生ガイダンスに加えて、秋学期に行っている地理学科オリジナルの卒論ガイダンスにおいて、卒業論文指導教員の選択手続のやりかたや、卒論作成にかかわる具体的な要領について詳しく説明している。 ・地理学科オリジナルの葉を配布し、文学部履修の手引きに書かれていない地理学科教員の詳しい紹介や取得できる資格などについて説明している。また、地理学科ウェブサイトにおいて、葉の内容に加え、最新の情報についても提供している。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『地理学科の葉』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

・地理学科HP http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 春学期開講期間の中程で、初年次学生に対して、学科教員全員で学生を分担して学習指導を実施している。さらに、単位取得数が少ないなどの成績不振学生や、転入・編入してきた学生に対してもゼミ担当教員および学科主任が学習指導を行うとともに、学科会議等で情報の共有を図り、学科全体で取り組む体制となっている。また、シラバスには各教員のオフィスアワーを記載し、個々の学生の学習相談に対応できるようにしている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 地理学科には「卒業論文」、「現地研究」、演習科目、実習科目等、自ら準備して報告するタイプの授業が多く、それらに要する学生の学習時間はかなり多いと思われる。例えば、「地理実習（1）・（2）」等の実習系科目に関しては、毎週課題を課すことで、学生の学習時間の確保を図っている。一方、講義系科目に関しても、授業改善アンケートに記載された学習時間の確保に関する質問項目の結果を基に、学科会議の場において、学生の学習時間の確保に関する方策についての意見交換を行ってきた。それを踏まえ、2017 度のシラバスでは「授業外学習」の項目において、各教員が学生の学習時間の確保につながるよう記載の工夫を図り、学科内の委員がそのシラバスの記載内容について重点的に検証を行った。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
④1 年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【履修登録単位数の上限設定】※1 年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。 「文学部全体」のシートを参照 【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度 文学部履修の手引き』	
⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S ☒ A B
【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ・授業支援システムの積極的利用 ・「現地研究」の実施概要の掲示および学科ウェブサイトでの公開 ・ECO-TOP プログラムでは、企業、自治体、NPO でのインターンシップ ・各授業におけるアクティブラーニングの積極的導入	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『地理学科の栞』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』 ・地理学科HP http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/	
⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。	☒ S ☐ A ☐ B
(～400 字程度まで) ※どのような配慮が行われているかを記入。 選択必修科目である演習の履修登録については、1 クラスあたりの人数が多くなりすぎないように配慮している。前年度の秋学期に演習の説明会および履修希望調査を行い、各教員担当の演習に学生数を振り分ける作業を学科会議において行っている。卒業論文指導に関しても同様である。また、実験・実習科目に関しては、履修学生数が 10 名を超えれば、TA（教育補助員）を 1 名配置し、円滑な実験・実習が行えるようにしている。	
【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 2017 年度新入生から、選択必修科目である演習の履修年次を 2 年生から 3 年生に引き上げた。また、2016 年度から各演習での履修人数制限を学生数÷教員数とし、これにより、4 年後を目途に、演習のさらなる少人数教育と卒業論文製作への教育効果の可視化を目指す。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	はい ☒ いいえ ☐
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・学科でシラバスチェック委員を決め、チェックの結果により各教員に修正を求めている。 ・地域調査士、GIS 学術士の資格に関してはシラバスに必要なキーワードがあり、担当教員がチェックしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	はい ☒ いいえ ☐
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・授業相互参観の実施 ・学生による授業改善アンケート結果の学科会議での開示	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S ☒ A ☐ B ☐
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・成績分布についてのデータを学科会議で妥当性を検証 ・卒論の評価は全教員が協議し成績を決定	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい ☒ いいえ ☐
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 規定など明文化されたものはないが、転編入の学生に対する既修得単位の認定はシラバス等の書類をその都度精査し、学科会議で審議したうえで教授会に諮り決定している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 「現地研究」など専任教員が分担して行う科目に関しては、GPA の分布のうち A+ を 10%程度に収めるなど、教員によって GPA の平均値が大きく異ならないように成績がつけられている。「卒業論文」に関しては、学科教員全員の審議を経て成績がつけられている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・キャリアセンターからの報告資料による把握	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・各学年における留級者を事務からの資料で把握し、学科会議で原因について情報交換。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400 字程度まで）※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等）。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

地理学科では、さまざまな方法で学習成果を測定している。学生の学習成果としての集大成は卒業論文である。地理学科では担当教員の指導で作成された論文は、複数の教員による口頭試問を受け、さらに学科教員全員出席の会議の中で、その評価についての検討を行っている。その場で当該年度の学生の学習成果の測定が行われる。「現地研究」は必修科目であり、実施概要の掲示と地理学科ウェブサイト（geo-net）での公表を義務付けている。地理学科には教員免許、測量士補、ECO-TOP プログラム、地域調査士等の各種資格・認定があり、地理学科の学位授与式時に資格取得者数等の調査を行っている。なお、2016 年度卒業生の教員免許申請者は 11 名、測量士補申請者は 11 名、ECO-TOP プログラム修了者は 1 名、地域調査士認定者は 8 名、学芸員資格取得者は 2 名であった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『地理学科の葉』『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』
- ・地理学科HP <http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/>

③学習成果を可視化していますか。

S ☒ A B

【学習成果可視化の取り組み】※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。

- ・学科と卒業生と学生で組織する学会が連携した卒業論文発表大会の実施
- ・全国地理学専攻学生卒業論文大会へのエントリー
- ・『法政地理』への優秀卒業論文の投稿
- ・各ゼミ活動について、卒論発表会時にポスターにて発表
- ・ECO-TOP 全体発表会、学内発表会への参加

【2016 年度新規取り組み事項、前年度から変更や改善された事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・地理学科HP <http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/>
- ・法政大学地理学会 HP <http://www.chiri.info/index.html>

2.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。

① 学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。

S ☒ A B

（～400 字程度まで）※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

各期末の学生による授業改善アンケートの結果をもとに、シラバスへの授業改善アンケートに対する「気付き」の記載を行っている。また、教員が個別に行う授業ごとのアンケートやリアクションペーパーにおいて、授業方法の改善を行っている。4 年間の教育成果を検証するための重要な指標である卒業論文については、合格者数（卒業者数）を毎年度確認するとともに、学生の卒論に対するモチベーションを上げるため、卒業生も含めた全員参加の卒論発表大会を毎年行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』

② 学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

S ☒ A B

【利用方法】※箇条書きで記入。

- ・学科会議でアンケート結果を開示し意見交換を行っている。
- ・問題点等があれば「授業改善」の依頼を学科として当該教員に伝える。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2017 年度入学生から「演習」の履修年次を 3 年次に引き上げた。	2.3①②⑦
・2017 年度の ILAC 科目の発足とそれにとりまう教養教育の充実化。	2.3③

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(3) 現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

- ・講義・実験・実習・演習科目などそれぞれの授業形態に即して学生数を配置するために、現在の各科目の履修者数の調査を行い、学科会議において、各科目の教育効果を考えた適正人数や授業内容の検証を行う。授業形態だけでなく、これらの科目の必修科目・選択必修科目・選択科目の科目特性を考慮した上で、カリキュラム上適切な授業内容になっているかについても検証を行う。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

3 学生の受け入れ

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

【学生の受け入れ方針】

地理学科は、各種の入学試験（※）を通して、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、自己推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試等。

1. 高等学校で履修する国語、外国語、地理、歴史、公民、数学、理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要とされる基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 地理学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

① 求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

☒ はい ☐ いいえ

3.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

① 定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

☒ はい ☐ いいえ

(～200字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

定員の超過・未充足に関しては、入試時の査定に大きく関わる問題であり、学科として対応できる部分は元々限られる。学科で対応可能な入試では、定員の超過・未充足に対して適切に対応している。これまでの状況を見ると、入学者数は年により若干の増減はあるが、2012年度から2016年度の平均超過率は1.05であるので、適正に管理されているといえる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

定員充足率（2012～2016年度）

（各年度5月1日現在）

種別\年度	2012	2013	2014	2015	2016	5年平均
入学定員	90名	99名	99名	99名	99名	
入学者数	87名	100名	122名	87名	115名	
入学定員充足率	0.97	1.01	1.23	0.88	1.16	1.05
収容定員	360名	369名	378名	387名	396名	
在籍学生数	420名	412名	433名	431名	452名	
収容定員充足率	1.17	1.12	1.15	1.11	1.14	1.14

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ① 学部・学科における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ② 学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
----	------	------

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20 以上	1.25 以上
上記以外の分野	1.25 以上	1.30 以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告
すべての分野共通	0.9 未満	0.8 未満

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1.20 以上	1.17 以上	1.14 以上	1.10 以上
収容定員超過率	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上

3.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S ☐ A ☐ B ☐
---	--

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。
入試経路別の志願者数、合格者数について学科会議で分析し、次年度以降の各入試経路の定員について検討している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

4 教員・教員組織

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	
【求める教員像および教員組織の編制方針】(2011 年度自己点検・評価報告書より) 確固たる信念と情熱を持って教育に取り組み、研究への飽くなき探究心を持ち続け、学生への規範となる高い人間性と指導力を持った人物が教員として求められる。その上で、学会活動や社会貢献にも積極的に取り組み、内外の教育研究者との連携を構築していることが望まれる。 教員組織においては総合科学としての幅広い地理学の領域をカバーすべく、人文、自然、それぞれにおいて専門分野のバランスに留意した教員組織とするとともに、内外から優秀な人材を兼担、兼任講師として確保し、本学科の幅広い教育ニーズに対応可能な編制を行なう。	
① 採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。	☐ はい ☐ いいえ

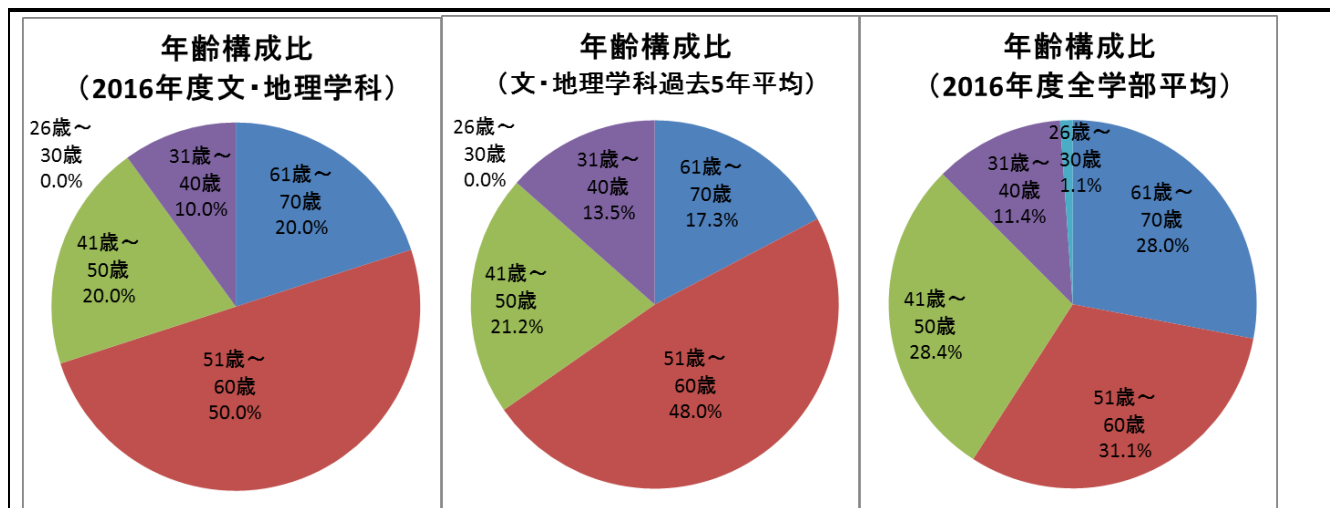
※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。 ・『文学部地理学科人事に関する申し合わせ事項』							
② 組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。						はい ☒ いいえ ☐	
【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】 ※箇条書きで記入。 ・文学部全体のシートを参照。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・地理学科役割分担表							
4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。							
① 学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。						はい ☒ いいえ ☐	
（～400 字程度まで）※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。 総合科学として幅が広い地理学の領域をカバーすべく、人文地理学・自然地理学それぞれにおいて専門分野のバランスに留意した教員組織とするとともに、内外から優秀な人材を兼任・兼任教員として確保し、本学科の幅広い教育ニーズに対応可能な編成を行っている。したがって、学部・学科のカリキュラムに則った教員組織は整備されていると判断できる。また、地理学科では多くの専門科目を他学部公開科目とすること、教員が教養科目（ILAC 科目・総合科目）を分担することで、地理学科の学生とは興味関心を異なる他学科・他学部の学生と教員が接触する機会を多く設定し、教員の価値観・視野が狭まらないよう工夫した組織編成を行っている。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』							
② 教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。						はい ☒ いいえ ☐	
（～400 字程度まで）※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。 地理学科の地理学担当の教員が人文科学研究科と国際日本学インスティテュートの大学院教育に関わることによって、相互の連携は緊密に図られている。また、2011 年度には人文科学研究科地理学専攻への進学を前提とした早期卒業制度を整備し、文学部地理学科における専門教育と大学院人文科学研究科地理学専攻における専門教育との連携を明確にしている。なお、大学院の地理学関連の科目を学部生が聴講することは可能であり、それを推奨しているが、現時点では大学院科目の単位化はなされていないので、今後の課題である。2017 年度に大学院の地理学担当教員を 3 名増やし、地理学専門の専任教員全員が人文科学研究科における地理学教育を担当することになった。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・学則第 49 条 4 項、5 項							
2017 年度専任教員数一覧 （2016 年 5 月 1 日現在）							
学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教員数	うち教授数
地理	6	4	0	1	11	6	3
専任教員 1 人あたりの学生数（2016 年 5 月 1 日現在）：45.2 人							
③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。						はい ☒ いいえ ☐	
【特記事項】 （～200 字程度まで）※ない場合は「特になし」と記入。 2017 年 5 月の専任教員数は 11 名であり、そのうち女性教員は 2 名である。年齢構成では 60 歳代が 2 名、50 歳代が 4 名、40 歳代が 4 名、20 歳代が 1 名となっている。2017 年度の採用人事においては若手教員 2 名（女性教員 1 名）の採用を行い、分野・年齢構成・ジェンダーのバランスが改善された。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし							
年齢構成一覧 （2017 年 4 月 1 日現在）							
年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳		
2016	1 人	0 人	4 人	4 人	2 人		
	9.1%	0%	36.4%	36.4%	18.1%		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

① 各種規程は整備されていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

・『文学部地理学科人事に関する申し合わせ事項』

② 規程の運用は適切に行われていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。

・上記根拠資料の通り（内規を添付）

4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

① 学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S ☒ A ☐ B ☐

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

・授業改善アンケートなどをもとに、学科会議において、各自が点検し、改善すべき点を構成員全員で話し合っている。

【2016年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

・学科会議（2016年4月20日、BT25階C会議室、2015年度秋学期学生による授業アンケート、専任教員全員）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2016年度第2回学科会議議事録

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
- 専任教員の大学院担当が増えた。 - 新規採用人事において、年齢・ジェンダー構成が改善された。	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

5 学生支援

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

生支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☐ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法・データの種類等】 ※箇条書きで記入。 ・文学部事務からの報告資料による把握 ・学位授与率やその原因について調査	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
② 学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。	S ☐ A ☒ B ☐
（～400 字程度まで）※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。 新入生の学習支援として、5 月～6 月にかけて、全教員に学生を振り分けて個別に「新入生面談」を行い、学習の状況や生活について相談を受け、何か問題があれば学科会議で情報共有し、対応を検討している。全教員がオフィスアワーをシラバスに明記して、在学生の相談にいつでも対応できるようにしている。また、オフィスアワー以外にも学習状況の相談を行い、きめ細かな学習指導を行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③ 成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	S ☐ A ☒ B ☐
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 ・学科主任やゼミ担当教員による成績不振学生への面談を実施し、学科会議で報告・検討 ・留級者・成績不振者の情報について学科内で共有 ・学科会議における検討内容を教学改革委員会に報告 ・他学科の留級者・成績不振者対応について教学改革委員会で得た情報を学科内で共有	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
④ 学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	S ☐ A ☒ B ☐
（～400 字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 新入生の外国人留学生については、「新入生面談」において、就学状況や言語や文化的な問題を抱えていないか、確認するようにしている。2 年生以上の在学生には、ゼミ担当教員が個別に相談を受け、学科会議などで報告し、検討している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

IV 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準	教育課程・教育内容
現状の課題・今後の対応等	・授業相互参観のさらなる積極的参加

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	・授業相互参観は1件のみに終わったが、別途授業内容や方法に関する議論を行い、授業改善策を模索した。
	質保証委員会による点検・評価	・授業相互参観自体への積極的な参加は充分に実現できたとは言えないが、授業改善という観点から授業相互参観以外の方法で同様の目的を果たす取り組みを学科として模索したことは、同等の課題を果たしたものと評価することができる。
評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		・アクティブラーニングのさらなる積極的導入
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	・実習、演習授業を中心に、一方的な知識注入だけでなく、学生への問いかけや学生間の議論などを多くの授業で取り入れた。
	質保証委員会による点検・評価	・アクティブラーニングの積極的導入に対し、学科として組織的に取り組んでいることは評価できる。
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		・学位授与率を向上させるため、就職活動、単位取得、卒論執筆のバランスがうまくとれるよう、学生にはゼミ教員を通じてきめ細かいカウンセリングなどを充実させる必要がある
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	・卒業を控えた4年生には、ゼミ教員が個別面談などを行い、就活の状況や卒論の取り組み、卒業に必要な単位の取得状況などを確認した。
	質保証委員会による点検・評価	・ゼミ教員によって、4年生に対してきめ細やかな対応が行われたことは、高く評価できる。今後は、その取り組みでどれぐらい学位授与率の向上が果たされたか、検証が行われることが期待される。
評価基準		学生の受け入れ
現状の課題・今後の対応等		・学年ごとの定員充足率のばらつきが大きい、各入試経路の定員について見直しを検討し、入学者数が安定するような方策を模索する
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	・各入試経路の定員の検討は行ったが、結果として変更は行わなかった。大半の学生が入学センターが作成する合否判定原案を基準として入学してくるため、特別入試の定員を変更しても、入学者数安定にはあまり効果がないのではないかという意見がでた。
	質保証委員会による点検・評価	・各入試経路の定員について検討が行われたことは評価できるが、入学者数を安定させる方策については、今後も継続的な検討が必要である。
評価基準		学生支援
現状の課題・今後の対応等		・成績不振学生との面談回数を増やすなど、さらなるケアを充実させることにより、学位授与率の上昇、留級率の低下を努力目標とする。 ・カリキュラム全体の見直しによる少人数授業の実現
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	・成績不振学生は、学科主任が個別に面談し、その原因の聞き取り調査を行った。主な原因は、留学生の不適応、スポーツ入学学生の授業への不参加、進路の悩みなどに分類され、今後もこのような対応を続けることが重要であるとの認識に至った。 ・カリキュラムを見直し、2017年度入学生からゼミ所属を2年次から3年次に変更した。これによって少人数ゼミが実現でき、より細かい指導が可能になると見ている。また、その代償策として、3年次以降受講可能だった科目を2年次に変更し、2年次の取得単位数に影響がでないようにした。
	質保証委員会による点検・評価	・成績不振学生に対し、多様な原因を把握するための面談が行われたことは、高く評価できる。 ・少人数授業を推進するカリキュラム改革が行われたことは、高く評価できる。

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

※文学部全体の取り組み状況の評価を参照。

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照。

文学部心理学科

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2012 年度認証評価における指摘事項（努力課題）

該当なし

II 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

文学部は 6 学科からなっており、文学部としての教育理念はあるが、各学科とも専門教育や教育方針の目標を独自に掲げている。その点、6 学科を一つの学部として総評するのは難しいが、全体としては少人数教育を重視し、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育を目指している点は高く評価できる。

「2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」については、全体としては、共通して少人数教育の重視とそれを目指した丁寧な指導が窺えるものの、このようなきめ細かな指導により教員個々の負担が重いのではないかという懸念が残り、その解消策の持続的な検討が今後必要であろうと思われる。

さらに、全般的に文学部の記述には、学生教育への努力は認められるものの、現状の問題点を可視化することが少ないように思われる。さらに一歩踏み込んで、さまざまな視点から文学部、そして各学科を客観的に見直し、問題点を明確にし、問題点への対策を実施することが期待されるとともに、よりきめの細かい教育成果の検証と測定を期待したい。他学部や、文学部の中でも新しい学科の好ましい対策や方策を、今後の文学部改革に導入していってもらいたいと期待している。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

個々の教員に対する負担の重さについては、教員の数を増やすことが根本的な解決策として考えられるが、学科単位で容易に実現できる対策ではないため、他の方法を含めて継続的に検討していく必要があると認識している。現在行っている対応としては、特定の教員に過度な負担が集中しないように、学科主任などの役職を輪番制にして年度ごとに交替するようにし、各教員が指導するゼミ生の人数が教員間でおおむね均等になるように配慮していることが挙げられる。また、成績不振などが原因で留年する学生を早期に発見し適切な指導を行うことで、留年生の数が減少し、専任教員 1 人あたりの学生数（2016 年 5 月時点で 30.4 人）も減少し、ひいては教員の負担を軽減できるものと考えられる。今後もこのような取り組みを継続していく予定である。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

III 自己点検・評価

1 内部質保証

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

・文学部全体の記述を参照

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

2 教育課程・学習成果

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。	
【学位授与方針】 心理学科のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の学位の授与を認める。 1. 人の認知について科学的理解をすることができる。 2. 人の発達について科学的理解をすることができる。 3. 観察・実験・調査を通して、心の機能を測定し、分析することができる。 4. 国内外の先行研究や社会的要請をふまえて、自ら課題を設定することができる。 5. 研究・学習成果を的確に他者に伝えることができる。 6. 研究・学習目標を達成するために、他者と協働することができる。	
①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。	はい ☒ いいえ ☐
2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。	
【教育課程の編成・実施方針】 心理学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。 1. 人の心を研究するために必要な知識・技能を偏りなく修得できるように「認知」と「発達」の二領域を中心とした専門科目を配置している。 2. 心理学の全領域に関わる基本的な知識・技能を学生が修得することを促すために、選択必修の学科基礎科目という科目区分を設定している。 3. 1年次に基礎ゼミ、2年次には演習Ⅰ・Ⅱ、3年次と4年次には研究法Ⅰ・Ⅱを配置し、一貫して少人数での演習形式の科目を履修できるようにし、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を系統的かつ継続的に修得できるようにしている。 4. それまでに修得した知識・技能を活用して、人間の心について自らが検討する価値のある問題を設定した上で、科学的・客観的に分析し、その研究成果を明瞭に記述する能力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。	
①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。	はい ☒ いいえ ☐
②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。	はい ☒ いいえ ☐
【根拠資料】 ※冊子名称やホームページURL等。 ・『2017年度文学部講義概要（シラバス）』 ・「心理学科新入生オリエンテーション配布資料」、「心理学科在学生ガイダンス配布資料」 ・法政心理ネット（ http://www.hosei-shinri.jp/ ）	
③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400字程度まで）※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。 定期的に開催する学科会議において、教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性について不断に検証している。形式的な検証プロセスにならないよう、自由闊達な意見の交換を目指したブレーンストーミングにより、能動的に学科の方針や規程について検討するようにしている。こうしたプロセスのなかで、4年生が人文科学研究科心理学専攻の科目を履修できる制度の運用を開始する仕組みが導入されるに至った。また、新カリキュラムの必要性が論じられ、2012年度に改訂された経緯がある。学科会議において学科の教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針について改訂が必要であると認められた場合は、正式に教学改革委員会に発議し、その後教授会の承認を得るというプロセスを経ている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 心理学科では、教育課程の編成・実施方針に基づき、社会に貢献する心理学的研究の内容を提供している。初年次教育の基礎ゼミでは一般的・基礎的な研究スキルおよびマナーの修得を徹底している。1-2 年次には幅広い心理学の分野の知識および基礎的なスキルを学科基礎科目で学び、3 年次以降は、より深い専門的な知識やスキルを展開科目で学ぶことになる。論文の検索の仕方、読み方、データの分析の仕方、プレゼンテーションの仕方といったスキルに関しては、1-4 年次の全学年において演習形式で行い、卒業論文につなげている。学生は卒業論文で自ら問題設定をし、データを集め分析し、考察し、発表を行うことで、応用力、判断力、行動力を獲得する。この一連の作業は、積極的に問題発見をし、自ら解決するという社会人に期待される能力を育むために適切である。そして、心理学を生かした職業選択を支援することも視野に入れ、現場で働いている学外の特別講師を毎年招聘し、掲示板や心理学科独自のホームページを通し学生に広く周知して受講を促している。 【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等 ・法政心理ネット (http://www.hosei-shinri.jp/)	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S ☒ A B
(～600 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。 心理学科の教育課程の編成・実施方針に基づき、認知系科目群と発達系科目群を柱とした様々な授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成している。カリキュラムツリーおよびカリキュラムマップに示されている通り、1 年次に基礎科目や学科基礎科目を履修させ、2 年次から学生の興味関心にしたがい専門性の高い学科展開科目を比較的自由に選択幅を広くして取れるように編成している。1 年次では心理学科生に特化した初年次教育である「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」（ILAC 科目）を開講し、高校から大学へのスムーズな学びの転換を目指している。さらに、学科基礎科目の「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」により心理学への興味や基礎的な方法論についてのスキルを獲得させるようにし、2 年次では研究論文の読み方や実験方法を具体的に学ぶ「演習Ⅰ・Ⅱ」をほぼ全員が履修している。さらに、3 年次以降は、「研究法Ⅰ・Ⅱ」という科目によって、心理学分野での研究活動を一人で行うという学習活動を通じて、それまでに修得した知識・技能を活用する方法論を学ぶ。さらにこれらの集大成として卒業論文を作成させることを必修単位としている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・心理学科カリキュラムツリー、カリキュラムマップ	
③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 心理学科の卒業所要単位 132 単位のうち、44 単位は ILAC 科目または市ヶ谷基礎科目、88 単位は専門科目を履修することが義務付けられており、幅広い教養と深い専門性のバランスが取れた教育課程が編成されている。特に 1～2 年次では、ILAC 科目または市ヶ谷基礎科目を中心に、人文科学、社会科学、自然科学、語学、体育を幅広く履修することで、狭い知識の勉強に留まらず、生きる力を養う幅広い教養を獲得させることを目指している。また、ILAC 科目の 0 群に配置されている「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」を心理学科専任教員が担当することで、ノートの取り方、レポートの書き方、グループワーク・プレゼンテーションの方法といった基礎的なスキルを、心理学科の教育課程と結びつけながら学生が修得できるように配慮している。専門科目においても、学科基礎科目を 32 単位以上履修することを求めることで、心理学の特定の領域だけに偏らない広い視野と総合的な判断力が培えるようなカリキュラムを設けている。また、自由科目を 8 単位以上履修することも求めており、幅広く深い教養と豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されている。 【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 2016 年度中に ILAC 科目のカリキュラムが確定され、2017 年度よりカリキュラムが施行された。ILAC 科目では、0～5 群の各科目群をそれぞれ基盤科目・リベラルアーツ科目に分類し、基礎的内容と応用的な内容の双方を学ぶことが定められている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』	
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S ☒ A B

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(～400 字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。 心理学科 1 年生のほぼ全員が受講する「基礎ゼミ I・II」が、初年次科目として開講されている。高校での学びから大学での学びへスムーズに移行することに加え、大学で学ぶだけでなく社会に出てからも有用な学習スキルおよび態度の修得を目標としている。また、学科基礎科目のうち「心理学概論」「心理学史」「心理統計学 I・II」などいくつかの科目を 1 年次から履修可能にすることで、これから大学で心理学を専門的に学ぶ上で必要となる基礎的な知識や技能を早期から修得できるようにしている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度 ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 国際化に対応した教育の一環として、心理学科を希望するアジアからの多くの留学生を積極的に受け入れている。また、2012 年度からの新カリキュラムでは、カリキュラムの中の専門英語科目である「心理学外書講読 I・II」を「心理学英語 I・II」に変更し、国際的な場で発表できるだけの語学力の伸長に努めている。国際性を涵養するため、外国人研究者を講師として招聘し、学生に聴講の機会を提供している。学部生の時から心理学の英文学術雑誌に触れさせることで、高度な学術論文を読むための英語力の習得を促している。加えて、海外の研究者にメールで直接質問をしたり、資料を求めたりすることを勧めており、英語のコミュニケーション力の涵養にも務めている。海外の学会の紹介や、TED（Technology, Entertainment, Design）を通して著名な心理学研究者の講演を聴くなどのリソースを授業で伝えている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 1 年生対象の「基礎ゼミ I」の春学期の 1 コマでは、キャリアセンターから講師を派遣してもらってキャリアガイダンスを行っている。さらに、2-4 年生に対しては、文学部共通科目として「文学部生のキャリア形成」と「現代のコモンセンス」が設置されており、大学での学びが、将来のキャリアにどのように結びついていくかというマクロな視点をもてるように履修を促している。心理学を活かす職業選択の存在や方法についても、公務員採用試験の対策を行ったり、人事系の職務、発達支援を行う企業などの紹介をするために、特別講師として実際に心理学を活かす職場で活躍している卒業生を毎年招聘している。また、精神科病棟や学校、自治体での取り組み、施設などを見学する機会もできるだけ設けている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『法政心理学会年報』第 11 巻	
2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S ☒ A B
【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。 ・1 年生に対する履修指導は、新入生オリエンテーション、それに続く専任教員によるグループ面談、心理学科の上級生で構成するピアサポーターによる履修講習会など複数の機会を通して適切に行っている。学科のカリキュラムなどを解説した独自の資料もオリエンテーションで配布している。ピアサポートシステムは、ピアカウンセリングを活用しており、互いの人間的成長能力を信じ、「支援する存在」でもあり「支援される存在」でもあるという互惠性を高めることによって、学習環境をポジティブな風土にし、個々の学生の能力を伸ばすシステムである。ピアサポーターは、現在 30 名近くおり活発な活動を行ってくれている。 ・2-4 年生に対する履修指導は、年度初めに行う在学生ガイダンスにおいて、学科のカリキュラムを解説した独自の資料を作成・配布して、学年ごとの履修の注意点などを指摘しながら適切に行っている。 ・上記に加え、少人数の演習系科目（ゼミ）において、必要に応じて個別に履修指導を行っている。また、2 年生に対しては、ピアサポーター主催のゼミ説明会も行っている。 ・転編入生に対しては、学科主任やゼミの担当教員が、面談等で取得単位や学習状況を確認した上で履修指導を行っている。 ・授業形態として、すべての学年ごとに、習熟度に合わせた演習や実習形式の授業を履修させ、講義科目によって得た知識や技能を学生自身が応用・活用して、心理学の研究方法についての理解を深めることができるよう工夫している。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「心理学科新入生オリエンテーション配布資料」、「心理学科在学生ガイダンス配布資料」	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 1-2 年生は、いわゆる卒論ゼミとは異なるが、少人数性の演習形式の科目(「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」「演習Ⅰ・Ⅱ」)をほぼ全員が履修する。また、3-4 年生は、卒論レベルの研究を行えるように「研究法Ⅰ・Ⅱ」を同じ指導教員のもと 2 年間履修する。これらの科目を通して、教員が学生の雰囲気や特徴、個々の学生の状況などを把握し、学科会議等で報告することで情報を共有している。学習が進展しない者に対しては、日常の様子をもとに、わからない場合はサポートするので相談するように声かけをしている。心理学科に管理責任のある教室は、授業がない時間には、自習室として開放しており、多くの学生が勉強している。教員は状況に応じて、個別指導やグループ指導をし、学習活動を促すファシリテーターとして機能している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学生の学習時間(予習・復習)を確保するための方策を行なっていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 シラバスに、時間外でどのようなことを予習または復習したらよいかを具体的に明記しているほか、授業支援システムなどを利用して受講者にメールを流し、予習や復習による学習の定着の意義を伝えている。シラバスに授業外の学習について明記されているかどうか、全専任教員が兼任講師担当科目を含む全科目を対象にチェックを行うことが、授業外学習の重要性を意識させる機会ともなっている。また、ミニテストや、リアクションペーパーなどを授業の終わりや初めに実施し予習、復習の成果を平常点に加味したりしている。先にも述べたが、自習室の開放や大学院生が主に自習や研究に利用している部屋の活用を促し、先輩に教えてもらったりする関係づくりもサポートしている。また、生活支援にかかわるが、アルバイトの入れ方や、時間の有効活用のスキルなど、生活態度や学習態度についてのアドバイスも全体に投げかけるようにしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
④1 年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【履修登録単位数の上限設定】 ※1 年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。 文学部全体の記述を参照 【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】 ※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部履修の手引き』	
⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S ☒ A B
【具体的な科目名および授業形態・内容等】 ※箇条書きで記入(取組例:PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等)。 ・非常に多くの科目で先進的な取り組みを行っている。下記根拠資料に実践報告をまとめてあるので参照されたい。下記根拠資料に挙げたもののほか、2016 年度からは「心理学測定法Ⅰ」で、新たにビデオ教材を用いた反転授業を取り入れている(情報メディア教育研究センターとの共同事業)。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「2015 年度 心理学科 アクティブ・ラーニング、PBL 導入事例」報告書(2016 年度心理学科会議資料)	
⑥それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※どのような配慮が行われているかを記入。 講義形式の科目の多くは 1 授業あたりの学生数に関して特別な配慮は行われていないが、授業内容の特性からみて受講生数の制限が必要と認められる科目については、クラス指定を行い、1 授業あたり 30-40 名程度になるように科目を編成している。クラス指定のある科目は、「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」「心理学測定法Ⅰ・Ⅱ」「心理検査法Ⅰ・Ⅱ」「心理統計法実習Ⅰ・Ⅱ」「情報処理技法Ⅰ・Ⅱ」である。また、演習系科目(「演習Ⅰ・Ⅱ」「研究法Ⅰ・Ⅱ」)では、学生を科目担当教員ごとに分け、1 授業あたり 12-18 名程度になるようにしている。演習系科目の履修の仕方については在学生ガイダンスで学生に資料を配布して説明している。さらに、語学の科目もクラス指定あるいは習熟度ごとに細かく学	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

生を分けることで少人数の授業を実現している。なお、2016 年度新入生の定員超過への対応として、2017 年度は「演習 I・II」（主に 2 年生が履修）のクラス増を行うこととした。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「心理学科在学生ガイダンス配布資料」	
⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	はい ☒ いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・心理学科の専任教員全員が、兼任教員が担当する科目を含む全ての学科専門科目のシラバスをチェックしている。修正が必要な場合は、シラバス作成者に修正を依頼している。 ・上記のシラバス第三者チェックの結果を、文学部教学改革委員会および教授会に報告している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「2016 シラバス確認結果」（2016 年度心理学科会議回覧資料）	
⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	はい ☒ いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・学期末に実施されている授業改善アンケートを基に、専任教員全員が「授業改善アンケートからの気づき」を作成しているが、これを作成する過程で、シラバス通りに授業を展開できたかを振り返ることにしている。また、この「気づき」を共有することで、学科として問題が生じていれば改善に向けて取り組めるような体制を作っている。 ・「演習 II」は 5 名の教員が共通シラバスによる授業運営を行っているため、その進行や到達度についてほぼ毎週メールで確認を行っている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S ☒ A B
【確認体制および方法】※箇条書きで記入。 ・成績評価基準はシラバスに明記している。単位認定についても、単位とはいかに定義されるか、単位認定に値する学習活動とはどのようなものかといった基本的な認識から、毎年ガイダンスの際に学生に説明している。 ・成績評価が客観的で公平に行われるように、シラバス第三者チェックの際に、成績評価基準の項目に「レポート 30%」のように具体的な数値が明記されていることを確認している。 ・D や E 評価を受けた授業に関しては、学部制度として学生は成績調査申請を行うことができ、教員は問い合わせがあった件に答えている。その際、教員側に瑕疵があった場合、教授会の審議を経て、成績は訂正される。 ・卒業論文に関しても予め評価基準（タイトルの適切さ、方法論の妥当性など）を心理学科独自のホームページに公開しており、学生自身がどのように評価されるかが理解できるよう透明化している。 ・卒業論文口頭試問を学科全体で発表会形式で行う場合にも、成績評価について専任教員全員で適切性を検討し決定しており、学科全体として公平で妥当性の高い成績評価を行っている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「法政大学人文科学研究科心理学専攻修士論文／文学部心理学科卒業論文評価表」（心理学科ホームページ「法政心理ネット」に掲載）	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい ☒ いいえ
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 編入生などの既修得単位の認定は、申請のあった科目の内容について、本学の開設科目との間の整合性の有無についてシラバス等をもとに学科会議で検討し、その結果を教授会で審議、承認を受けるという文学部の規定する正式な手続きにのっとって行われている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S ☒ A B
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 少人数クラスを担当する演習科目においては、担当する教員全員が評価方法の基準設定について協議し、公正かつ厳格な成績評価の実施に努力している。たとえば、「演習 II」では、学生の発表に対する評価基準表（ルーブリック）を作成し、共通の基準で評価できるように努めている。他の科目についても、成績評価の基準について、シラバスに成績評価の配分	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

を記入しているほか、予習をせずに出席しても平常点にカウントしないなどについて教員間で合意を得ている。卒業論文の評価についても、絶対評価を基準にしながらも、教員によってその基準に齟齬がないよう、話し合いの場を常に設けている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☐ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。 ・把握主体は全教員 ・把握方法・種類は、卒業論文提出時の進路調査票による。進学、一般企業に就職、公務員に就職等について回答を求めている。また、キャリアセンターによる報告もすべての専任教員で共有することとしている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☐ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。 ・把握主体は全教員 ・把握方法は、成績分布についてはFD推進センターが学期ごとに発行するGPCAの集計結果、進級状況については事務作成書類による。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。	S ☒ A ☐ B ☐
（～400字程度まで）※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等）。 シラバスに示した「成績評価基準」に基づいて評価している。成績評価基準の設定は、各教員が学習成果を結果としてだけでなく、次の学習に対する意欲に結びつけていけるような評価基準にできるよう熟考して設定している。それゆえ、GPCAの利用方法についても、数値の一人歩きに終わらないよう、学生の視点から、学びへのモチベーションを高めるよう配慮して用いている。さらに、必修科目である卒業論文への取り組みによって、心理学科が掲げている教育目標への到達度、すなわち学習成果を測ることができると考えている。なぜなら、心理学領域に特有の知識のみならず、問題の設定の仕方やアイデアの産出、データ収集の方法や適切な分析、研究を実施する上での協力者とのコミュニケーション、得られた成果を先行研究の知見と対比して批判的に考察する力、論理的思考能力および表現力などのすべてが、卒業論文作成の過程に含まれているからである。学士力で謳われている知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力の獲得のすべてが、この卒業論文およびその取り組みを通してその成果を測定・評価できると考えている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学習成果を可視化していますか。	S ☒ A ☐ B ☐
【学習成果可視化の取り組み】※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。 ・学士力で求められるような資質の向上については、卒業論文の成果発表会がその役割を果たしている。この発表会は心理学科の全教員・全学部生に公開されている。論文自体は、主査および副査が精読しており、発表会では主査・副査のみならず他の教員の発言も歓迎している。発表は学生一人ずつの口頭発表であり、4年間の演習形式の授業で修得してきたプレゼンテーション能力の到達度についても評価できる。評価観点については、学生にあらかじめ公開されていることから質保証に役立つとともに、専門性をどの程度身につけてきたかを、全教員が把握できる。 ・卒業論文は、発表会でのプレゼンテーションに加えて、4年生各自が研究成果をA4判1ページの要旨としてまとめることになっている。それを要旨集として卒論発表会で配付しているほか、同窓会組織である法政大学心理学会の定期刊行物「法政心理学会年報」にも収録している。 ・個々の学生の卒論研究は、研究計画の段階で倫理審査を受けることを義務付けており、この段階で教員全員で計画の適切性を検討する機会があり、また実験室などの利用状況からも、大半の学生の研究プロセスが確認できる。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・修士論文・卒業論文要旨集、法政心理学会年報	
2.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S ☒ A B
(～400 字程度まで) ※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。 学科会議において、毎年の時間割編成時期に、授業担当者が主な授業での学生の履修状況を報告し合い、次年度の授業体制のありかたに反映させている。また、上述の「演習 I」「演習 II」では、同じ科目を担当している教員が集まり、学生の学習姿勢や取り上げる課題について情報および意見の交換を実施している。さらに、問題を呈する学生がいた場合には、学科全体で情報を共有し、特定の授業のみで発生している問題であるのか、学生の学習活動全体において教育成果が表れていないことによる問題であるのかを話し合うようにしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S ☒ A B
【利用方法】 ※箇条書きで記入。 ・受講生が少人数である場合も含め、全科目について、学生による授業改善アンケートを実施している。 ・それに対する専任教員全員の気づきを学生にフィードバックし、さらに学科教員のメーリングリストや学科会議等で情報を共有し、教育課程や教育内容・方法の改善に活かしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2017 年度の ILAC 科目の発足とそれともなう教養教育の充実化。	2.3③

(3) 現状の課題・今後の対応等 (必須項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・2017 年秋に施行される予定である公認心理師という国家資格に対応するためのカリキュラム改革の可能性や方法について、情報収集や議論を継続する。 ・2015 年度に作成したカリキュラムマップおよびカリキュラムツリーについて必要な修正等を行い、大学ホームページなどを通して公開する。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

3 学生の受け入れ

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。
【学生の受け入れ方針】 心理学科では、各種の入学試験(※)をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。 ※A 方式入試、T 日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試等。 1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。 2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 心理学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

☐はい ☐いいえ

3.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

① 定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

☐はい ☐いいえ

(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

入学定員充足率の過去 5 年間の平均は 1.12 であり、おおむね適正である。単一年度ごとにみると、2016 年度を除き 1.03-1.20 の範囲内であった。2016 年度は 1.26 であり、全学的に定員が超過した。これを受け基準の見直しを行った結果、2017 年度の入学定員充足率は 1.00 となり適正な数値に戻った。また、収容定員充足率の過去 5 年間の平均は 1.18 であり、妥当な範囲内である。単一年度ごとにみると、2012-13 年度は 1.22 とやや高かったが、2014-16 の直近の 3 年間は 1.15 前後にまで改善した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

定員充足率（2012～2016 年度）

(各年度 5 月 1 日現在)

種別\年度	2012	2013	2014	2015	2016	5 年平均
入学定員	60 名	66 名	66 名	66 名	66 名	
入学者数	72 名	70 名	68 名	68 名	83 名	
入学定員充足率	1.20	1.06	1.03	1.03	1.26	1.12
収容定員	240 名	246 名	252 名	258 名	264 名	
在籍学生数	292 名	299 名	292 名	294 名	304 名	
収容定員充足率	1.22	1.22	1.16	1.14	1.15	1.18

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

①学部・学科における過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20 以上	1.25 以上
上記以外の分野	1.25 以上	1.30 以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告
すべての分野共通	0.9 未満	0.8 未満

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1.20 以上	1.17 以上	1.14 以上	1.10 以上
収容定員超過率	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上

3.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S ☐ A ☐ B ☐

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

入学経路別の学生の成績を検証している。入学経路は、附属校推薦、指定校推薦、スポーツ推薦、一般入試と多岐に渡っているが、教学企画課が経路別に入学後の学生の成績追跡調査を実施しており、その資料が毎年学科に知らされている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

経路別のアンケート結果などは、大学のデータベースでも学科から閲覧できるようになっており、学科の特徴を他学科、他学部とも比較して、客観的な情報をもとに検証することができる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

4 教員・教員組織

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

【求める教員像および教員組織の編制方針】(2011 年度自己点検・評価報告書より)

学部・学科の理念を十分に理解しながら、教育活動や研究活動をたゆまなく前進発展させていくことのできる教員が求められる。学部・学科運営にも自分の専門性に埋没することなく、バランス良く積極的に関わることも重要である。教員組織においては、年齢、専門分野を考慮しながら、学科全体としての理念を実現するのに十分な教育・研究が可能となるような各教員間の公平性・協調性が確保されるような編制を目指している。学科主任をはじめとした各種の役割は、輪番制をとりながら、特定の教員に偏ることがないように配慮し、教育・研究活動に必要な役割を全員が体系的に果たすようにしている。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

・「心理学科人事の内規」、「文学部教授会規程」、「文学部教授会規程内規」、「文学部人事委員会細則」

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

・文学部全体のものに準ずる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「文学部教授会規程」、「文学部教授会規程内規」、「文学部各種委員会一覧」

4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

☒ はい ☐ いいえ

(～400 字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

心理学科のカリキュラムは、「認知」と「発達」という心理学科独自の二領域を柱に据えた編成に最大の特徴がある。そして、基礎から発展への体系を明確にするために、この二領域のそれぞれについて学科基礎科目と展開科目を設定している。さらにこの二領域それぞれを支え、且つ連動させる役割を持つスキル系科目があり、これにより演習から実習、さらに卒論へとつながるカリキュラム編成が構築されている。人事の際には、以上のような独自性の高いカリキュラムの運用を維持できる教員の採用が最も重視されており、「認知」「発達」の二領域を広くカバーできる教員組織の整備が実現して

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

いる。具体的には、知覚、生理、発達、教育、学習、行動、犯罪、言語、スポーツ、健康といった分野を網羅している。また、学際的なコラボレーションや、他学問との連携性も兼ね備えた人材に恵まれており、各教員はスキル系科目と卒業論文の指導にも十分な力量を有している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「心理学科人事の内規」、『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』

②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

(～400 字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

2016 年度より、10 名の学部専任教員のうち 2 名が、大学院の所属としてはスポーツ健康学研究科の専任として移籍したが、引き続き人文科学研究科心理学専攻の授業を担当し、専攻会議にも出席している。また、大学院入試問題の出題・採点にも参加している。結果として心理学科専任教員 10 名全員が、大学院心理学専攻の授業並びに専攻の運営に携わっている。このことにより、学部と大学院を通したカリキュラム構成や学位授与のプロセス全体について検証できることがメリットとして挙げられる。具体的には、学部 4 年次の大学院科目履修と大学院進学後に単位として認定できる制度を導入することが実現している。専任教員は特定の領域に偏らず、幅広い領域の研究を行っており、他大学からの大学院入学希望者も広範に受け入れることのできる大学院での体制が、そのまま学部の体制として整備されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

2016 年度専任教員数一覧

(2016 年 5 月 1 日現在)

学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
心理	8	1	1	0	10	6	3

専任教員 1 人あたりの学生数 (2016 年 5 月 1 日現在) : 30.4 人

③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【特記事項】(～200 字程度まで) ※ない場合は「特になし」と記入。

現在の専任教員数は 10 名 (うち、女性教員 2 名) である。年齢構成は、30 代 1 名、40 代 2 名、50 代 5 名、60 代 2 名である。2010 年度に新任教員の選考を行う機会があり、30 歳代の教員が採用され教員の年齢の範囲が適正化されたが、50 代の教員が半数を占めており、やや偏りが見られる。今後の人事の機会にも、20 代、30 代の教員の割合を増やすことや、男女のバランスについて考えていく必要がある。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

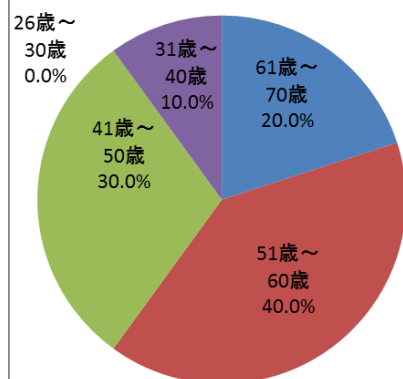
・特になし

年齢構成一覧

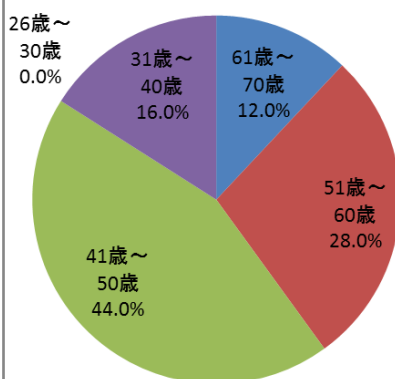
(2016 年 5 月 1 日現在)

年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳
2016	0 人	1 人	2 人	5 人	2 人
	0.0%	10.0%	30.0%	40.0%	20.0%

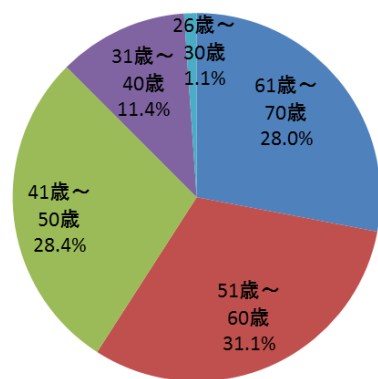
年齢構成比
(2016 年度文・心理学科)



年齢構成比
(文・心理学科過去5年平均)



年齢構成比
(2016 年度全学部平均)



※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。	
①各種規程は整備されていますか。	はい ☐ いいえ ☐
【根拠資料】 ※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。 ・「心理学科人事の内規」	
②規程の運用は適切に行われていますか。	はい ☐ いいえ ☐
【募集・任免・昇格のプロセス】 ※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。 ・上記根拠資料「心理学科人事の内規」の通り。	
4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。	S ☒ A ☐ B ☐
【FD活動を行うための体制】 ※箇条書きで記入。 ・特定の委員によるのではなく、全教員による討論・意見交換・情報共有を基本とする。 ・月に一回以上開催される学科会議で常時、上記の活動をしている。 ・必要に応じて、学科教員によるメーリングリスト（以下、ML）での情報共有を行っている。 【2016年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。 ・春学期と秋学期の授業改善アンケートからの「気づき」を専任教員全員が各自 A4 判 1 枚に記述し、学生が読める場所に掲示した。掲示する前に教員 ML で内容に関して共有した。 ・共通シラバスで 5 名の専任教員が担当している秋学期開講の「演習 II」という科目の進め方・評価方法などについて、随時 ML で情報や意見の交換を行った。 ・専任教員 1 名と兼任講師 4 名により共通シラバスで行っている春学期開講の「演習 I」については、年度末に総括および次年度の授業に向けた意見交換会を授業担当の 5 名で行った。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・2017 年度中に、人事に関する内規において、採用における基準を明確化する。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

5 学生支援

【2017 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☐ いいえ ☐
【データの把握主体・把握方法・データの種類等】 ※箇条書きで記入。 ・把握主体は全教員。 ・把握方法は、文学部教授会での審議資料。 ・卒業に関わる単位数の確認は客観的に行われ、文学部教授会において所定の手続きを経て卒業判定をおこなっている。 ・留級者については年度末に、休学・退学者についてはそのつど文学部事務から報告を受けている。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。	S A B
（～400 字程度まで）※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。 専任教員全員がオフィスアワーを週に 1 回開催している。3-4 年生に対しては少人数性の「研究法 I・II」という科目を通して主にゼミ担当の教員が学生の個別のニーズに応じて指導を行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2017 年度文学部講義概要（シラバス）』	
③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	S A B
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 ・予防として、新入生に対しては、オリエンテーションで少人数のグループに分け、専任教員に割り振って、教員も含めて学生同士がやりとりできる機会を設けている。さらにオリエンテーション直後にピアサポーター主催の歓迎会を行ったり、入学式翌日に履修講習会を開催したりして、大学生活での対人関係や学習システムの違いによるドロップアウトを予防している。 ・2-4 年生の学生については、欠席が目立つようになった時点で、各教員からの情報を学科会議で共有し、早い段階で対応し、問題によっては学生相談室に繋げていくなど、他部署と連携しながら支援していけるように配慮している。 ・成績不振などの理由で留級してしまった学生については、毎年、春学期開始前に学部事務課より該当学生のリストをもらい、対象となる学生に往復はがきを送り、在学生ガイダンスへの参加意思の確認や近況を知らせるように連絡している。それでも連絡がつかない場合は、本人または保証人に電話連絡し、状況把握に努めている。 ・スポーツ推薦で入学してきた学生は履修の仕方に異なる点があることから、大学全体のスポーツ推薦担当の委員で心理学科に所属している教員が、早期に面談して丁寧に対応している。 ・以上の情報はすべて学科で共有し、いずれの教員もいつでも協力してもらえるよう、全身体制で取り組んでいる。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	S A B
（～400 字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 外国人留学生についても、他の学生と同様に、出席状況や成績上に問題があれば対処できる体制にある。今までのところ、留学生であるという理由で修学に困難が見られる事態は発生していないと思われるため、特段の対応はしてきていなかった。ただし、予防的な取り組みは行っていないため、定期的な面談を行うなどについては、今後の検討課題である。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・外国人留学生に対する修学支援について、面談などの予防的な取り組みの必要性などについて、意見交換を行い、必要と認められた場合はその支援の方法について検討する。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照。

IV 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

評価基準		教育課程・教育内容
現状の課題・今後の対応等		現状ではその必要性が認められないために、留学生を対象とした特別なカリキュラムを学科としては用意していないが、必要性が生じたときのために他学部・他学科の取り組みに関する情報を収集したい。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	在籍中の留学生の日本語能力向上を支援するような全学的な教育プログラムの有無について、留学センターに問い合わせを行ったが、該当無しという回答であった。正課として新たな日本語教育科目を設定しなければならないほどの必要性は現在のところ認めていないが、心理学科のピア・サポートの活動の一環として実施することが可能かどうか、学科として検討中である。
	質保証委員会による点検・評価	留学生を対象とした日本語教育プログラムについて「他学部・他学科の情報を収集する」ことが適切な方法で行われており、十分に課題が達成されたと言える。また、全学的なプログラムが存在しないことを確認した上で、学科独自の取り組みの検討を行っており、当初設定された課題以上の達成レベルに達したと言える。
評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		兼任講師が担当している授業についても、シラバス通りに授業が展開されているか否かを確認する手段について、学科として議論する必要性がある。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	現状では、仮にシラバス通りに授業が展開されておらず、それが原因で何か問題が生じているのであれば「学生による授業改善アンケート」に反映されると考えている。2017 年度以降は、シラバス第三者チェックの機会に、「学生の意見（授業改善アンケート等）からの気づき」の内容について確認することと、同欄に記入がなければ記入を求めるようにすることを学科として決定した。
	質保証委員会による点検・評価	課題については、十分な議論がなされている。単純にシラバス通りか否かではなく、それによって問題が発生したか否かという点を重視し、授業改善アンケートとシラバスにおける「学生の意見（授業改善アンケート等）からの気づき」との関係に注目したことは、兼任講師による柔軟な授業運営を担保しながら、シラバスの信頼性を高めることを可能にする方法として評価に値する。以上から、当初設定された課題については、十分に達成されたと言える。
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		4 年次に至るまでの各学年における学習成果の可視化の在り方について検討する必要がある。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	公認心理師という国家資格の発足に対応して、2017 年度中に中規模なカリキュラム改正を行う必要があると見込まれており、各学年での学習成果をどのように可視化するかについても、その際に一緒に議論を行う予定である。
	質保証委員会による点検・評価	「学習成果の可視化」についての議論は行われておらず、当初設定された課題については達成されていない。しかし、国家資格新設に対応した来年度のカリキュラム改正がカリキュラム編成に与える影響は大きく、学生の学習にとっても極めて重要なものであることは明らかであるので、カリキュラム改正とともに「学習成果の可視化」の議論を進めていくという方針には十分な説得力がある。よって、課題そのものは達成はされていないものの、そのことを否定的に評価する必要はないと考えられる。

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

※文学部全体の取り組み状況の評価を参照。

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。